



Sun Fire™ ミッドレンジシステム コントローラコマンド リファレンスマニュアル

ファームウェアリリース 5.18.0

Sun Microsystems, Inc.
www.sun.com

Part No. 819-0762-10
2004 年 10 月, Revision A

コメントの送付: <http://www.sun.com/hwdocs/feedback>

Copyright 2004 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, CA 95054 U.S.A. All rights reserved.

米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) は、本書に記述されている製品に採用されている技術に関する知的所有権を有しています。これら知的所有権には、<http://www.sun.com/patents> に掲載されているひとつまたは複数の米国特許、および米国ならびにその他の国におけるひとつまたは複数の特許または出願中の特許が含まれています。

本書およびそれに付属する製品は著作権法により保護されており、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。サン・マイクロシステムズ株式会社の書面による事前の許可なく、本製品および本書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。

本製品のフォント技術を含む第三者のソフトウェアは、著作権法により保護されており、提供者からライセンスを受けているものです。

本製品のの一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

本製品は、株式会社モリサワからライセンス供与されたリュウミン L-KL (Ryumin-Light) および中ゴシック BBB (GothicBBB-Medium) のフォント・データを含んでいます。

本製品に含まれる HG 明朝 L と HG ゴシック B は、株式会社リコーがリョービマジクス株式会社からライセンス供与されたタイプフェースマスタをもとに作成されたものです。平成明朝体 W3 は、株式会社リコーが財団法人日本規格協会 文字フォント開発・普及センターからライセンス供与されたタイプフェースマスタをもとに作成されたものです。また、HG 明朝 L と HG ゴシック B の補助漢字部分は、平成明朝体 W3 の補助漢字を使用しています。なお、フォントとして無断複製することは禁止されています。

Sun、Sun Microsystems、AnswerBook2、docs.sun.com、OpenBoot、Sun Fire は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems 社の商標もしくは登録商標です。サンロゴマークおよび Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

OPENLOOK、OpenBoot、JLE は、サン・マイクロシステムズ株式会社の登録商標です。

ATOK は、株式会社ジャストシステムの登録商標です。ATOK8 は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、ATOK8 にかかる著作権その他の権利は、すべて株式会社ジャストシステムに帰属します。ATOK Server/ATOK12 は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、ATOK Server/ATOK12 にかかる著作権その他の権利は、株式会社ジャストシステムおよび各権利者に帰属します。

本書で参照されている製品やサービスに関しては、該当する会社または組織に直接お問い合わせください。

OPENLOOK および Sun Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザーインタフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

U.S. Government Rights-Commercial use. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。

本書には、技術的な誤りまたは誤植の可能性があります。また、本書に記載された情報には、定期的に変更が行われ、かかる変更は本書の最新版に反映されます。さらに、米国サンまたは日本サンは、本書に記載された製品またはプログラムを、予告なく改良または変更することがあります。

本製品が、外国為替および外国貿易管理法(外為法)に定められる戦略物資等(貨物または役務)に該当する場合、本製品を輸出または日本国外へ持ち出す際には、サン・マイクロシステムズ株式会社の事前の書面による承諾を得ることのほか、外為法および関連法規に基づく輸出手続き、また場合によっては、米国商務省または米国所轄官庁の許可を得ることが必要です。

原典:	<i>Sun Fire Midrange System Controller Command Reference Manual, Firmware Release 5.18.0</i> Part No: 817-7815-10 Revision A
-----	--



目次

はじめに xxiii

1. システムコントローラの概要 1
 - プラットフォームおよびドメインの管理 1
 - システムコントローラへの接続 2
 - システムコントローラのナビゲーション 2
 - セッションの終了 2

2. システムコントローラのコマンド構文、引数、およびコンポーネント名 3
 - コマンド構文および引数 3
 - コマンド名 4
 - コンポーネント名 4
 - CPU/メモリーボードおよび I/O アセンブリのボード状態 6
 - ボードのテスト状態 6
 - ドメインの状態 7
 - 特殊文字 8
 - FTP URL の使用 8
 - 対話型コマンド 9
 - 状況に応じて使用できるコマンド 9
 - コマンド行の編集 10

コマンド行の履歴	11
コマンド補完機能	12
3. システムコントローラのコマンドリファレンス	13
コマンドの概要	13
システムコントローラコマンド一覧 (アルファベット順)	16
addboard	16
適用範囲	16
プラットフォームシェルの構文	16
ドメインシェルの構文	16
オプション/パラメタ	16
説明	17
関連項目	17
例 — プラットフォームシェル	18
例 — ドメインシェル	18
addcodlicense	19
適用範囲	19
構文	19
オプション/パラメタ	19
説明	19
関連項目	19
例	20
break	21
適用範囲	21
構文	21
オプション/パラメタ	21
説明	21
関連項目	21
例	22

connections	23
適用範囲	23
プラットフォームシェルの構文	23
ドメインシェルの構文	23
オプション/パラメタ	23
説明	23
関連項目	23
例 — プラットフォームシェル	24
console	25
適用範囲	25
構文	25
オプション/パラメタ	25
説明	25
関連項目	26
例 — プラットフォームシェル	26
deleteboard	28
適用範囲	28
プラットフォームシェルおよびドメインシェルの構文	28
オプション/パラメタ	28
説明	28
関連項目	29
例 — プラットフォームシェル	29
例 — ドメインシェル	29
deletecodlicense	30
適用範囲	30
構文	30
オプション/パラメタ	30
説明	30

関連項目	30
例	31
disablecomponent	32
disconnect	33
適用範囲	33
プラットフォームシェルの構文	33
ドメインシェルの構文	33
オプション/パラメタ	33
説明	33
関連項目	33
例	34
dumpconfig	35
適用範囲	35
構文	35
オプション/パラメタ	35
説明	36
関連項目	36
例	37
enablecomponent	38
flashupdate	39
適用範囲	39
構文	39
オプション/パラメタ	39
説明	40
関連項目	42
flashupdate コマンドの例 — プラットフォームシェル	43
help	44
適用範囲	44

構文	44
オプション/パラメタ	44
説明	44
例	45
history	46
適用範囲	46
構文	46
オプション/パラメタ	46
説明	46
関連項目	46
例	46
password	47
適用範囲	47
プラットフォームシェルの構文	47
ドメインシェルの構文	47
オプション/パラメタ	47
説明	47
関連項目	48
例	48
poweroff	49
適用範囲	49
プラットフォームシェルの構文	49
ドメインシェルの構文	49
オプション/パラメタ	49
説明	50
関連項目	51
例	51
poweron	52

適用範囲	52
プラットフォームシェルの構文	52
ドメインシェルの構文	52
オプション / パラメタ	52
説明	53
関連項目	53
例	53
reboot	55
適用範囲	55
構文	55
オプション / パラメタ	55
説明	55
例	56
reset	57
適用範囲	57
構文	57
オプション / パラメタ	57
説明	57
関連項目	58
例	58
restartssh	59
適用範囲	59
構文	59
オプション / パラメタ	59
説明	59
関連項目	59
restoreconfig	60
適用範囲	60

構文	60
オプション/パラメタ	60
説明	61
関連項目	61
例	62
resume	63
適用範囲	63
構文	63
オプション/パラメタ	63
説明	63
関連項目	63
例	64
setdate	65
適用範囲	65
構文	65
オプション/パラメタ	65
説明	67
関連項目	67
例	68
setdefaults	70
適用範囲	70
構文	70
オプション/パラメタ — プラットフォームシェル	70
オプション/パラメタ — ドメインシェル	70
説明	71
例	72
setescape	73
構文	73

オプション/パラメタ 73
説明 73
関連項目 73
例 74

setfailover 75
適用範囲 75
構文 75
オプション/パラメタ 75
説明 75
関連項目 76
例 76

setkeyswitch 78
適用範囲 78
プラットフォームシェルの構文 78
ドメインシェルの構文 78
オプション/パラメタ 78
説明 81
関連項目 81
例 82

setls 83
適用範囲 83
構文 83
オプション/パラメタ 83
説明 83
関連項目 85
例 85

setupdomain 87
適用範囲 87

構文	87
オプション/パラメタ	87
説明	91
関連項目	91
例	92
setupplatform	93
適用範囲	93
構文	93
オプション/パラメタ	93
説明	94
関連項目	99
例	99
showboards	103
適用範囲	103
プラットフォームシェルの構文	103
ドメインシェルの構文	103
オプション/パラメタ	103
説明	104
関連項目	104
例 — プラットフォームシェル	104
例 — ドメインシェル	108
showcodlicense	109
適用範囲	109
プラットフォームシェルの構文	109
オプション/パラメタ	109
説明	109
関連項目	110
例	110

showcodusage 111

適用範囲 111

プラットフォームシェルの構文 111

オプション / パラメタ 111

説明 111

関連項目 111

例 112

showcomponent 115

適用範囲 115

プラットフォームシェルの構文 115

ドメインシェルの構文 115

オプション / パラメタ 115

説明 115

関連項目 116

例 116

showdate 119

適用範囲 119

プラットフォームシェルの構文 119

ドメインシェルの構文 119

オプション / パラメタ 119

説明 119

関連項目 120

例 — プラットフォームシェル 120

showdomain 121

適用範囲 121

構文 121

オプション / パラメタ 121

説明 121

関連項目	121
例	122
showenvironment	125
適用範囲	125
プラットフォームシェルの構文	125
ドメインシェルの構文	125
オプション/パラメタ	125
説明	126
例	128
showerrorbuffer	131
適用範囲	131
構文	131
オプション/パラメタ	131
説明	131
関連項目	132
例	132
showescape	134
構文	134
オプション/パラメタ	134
説明	134
関連項目	134
例	134
showfailover	135
適用範囲	135
構文	135
オプション/パラメタ	135
説明	135
関連項目	136

例 136

showfru 138

適用範囲 138

構文 138

オプション/パラメタ 138

説明 138

例 138

showkeyswitch 140

適用範囲 140

プラットフォームシェルの構文 140

ドメインシェルの構文 140

オプション/パラメタ 140

関連項目 140

説明 140

例 141

showlogs 142

適用範囲 142

プラットフォームシェルの構文 142

ドメインシェルの構文 142

オプション/パラメタ 142

説明 143

関連項目 143

例 143

showplatform 147

適用範囲 147

構文 147

オプション/パラメタ 147

説明 148

関連項目	149
例	149
showresetstate	154
適用範囲	154
構文	154
オプション/パラメタ	154
説明	155
関連項目	155
showsc	156
適用範囲	156
構文	156
オプション/パラメタ	156
説明	156
例	156
ssh-keygen	158
適用範囲	158
構文	158
オプション/パラメタ	158
説明	158
関連項目	159
例	159
testboard	160
適用範囲	160
構文	160
オプション/パラメタ	160
説明	160
関連項目	161
例	161

用語集 163

索引 167

表目次

表 2-1	プラットフォームからアクセスできるコンポーネント	5
表 2-2	ドメインからアクセスできるコンポーネント	5
表 2-3	ボード状態	6
表 2-4	showboards コマンドの Status フィールド	6
表 2-5	showplatform および showdomain コマンド出力のドメイン状態列の値	7
表 2-6	コマンド行の編集機能	10
表 2-7	以前入力したコマンド行をふたたび呼び出すためのキーストローク	11
表 2-8	システムコントローラコマンドを補完するためのキーストローク	12
表 3-1	システムコントローラコマンドの概要	13
表 3-2	connections コマンドのヘッダーの説明	24
表 3-3	タイムゾーンの簡略表現、タイムゾーン名、およびグリニッジ標準時からのオフセット	66
表 3-4	setkeyswitch による設定変更の説明	79
表 3-5	キースイッチを現在の設定から新しい設定に変更した結果	79
表 3-6	CPU/メモリーボードの位置の説明	85
表 3-7	I/O アセンブリの位置の説明	85
表 3-8	setupdomain コマンドのパラメタ値	87
表 3-9	setupplatform のパラメタ値	94
表 3-10	setupplatform HostID/MAC Address Swap パラメタのプロンプト	99
表 3-11	showboards コマンドおよび showboards -v コマンドの出力ヘッダーの定義	106
表 3-12	COD ライセンス情報	109

表 3-13	showcodusage リソース情報	112
表 3-14	showcodusage ドメイン情報	113
表 3-15	showenvironment -p <i>part</i> の説明	126
表 3-16	showenvironment の出力ヘッダーの説明	127

コード例

- コード例 3-1 プラットフォームシェルの `addboard` コマンドの例 18
- コード例 3-2 ドメインシェルの `addboard` コマンドの例 18
- コード例 3-3 `addcodlicense` コマンドの例 20
- コード例 3-4 `break` コマンドの例 22
- コード例 3-5 プラットフォームシェルに対する `connections` コマンド 24
- コード例 3-6 ドメイン B へのアクセスにパスワードが設定されていない場合の `console` コマンドの例 26
- コード例 3-7 ドメイン A へのアクセスにパスワードが設定されている場合の `console` コマンドの例 26
- コード例 3-8 I/O アセンブリ 7 を削除する `deleteboard` コマンドの例 29
- コード例 3-9 CPU/メモリーボード 3 を削除する `deleteboard` コマンドの例 29
- コード例 3-10 `deletecodlicense` コマンドの例 31
- コード例 3-11 システムコントローラのプラットフォームシェルからのセッションの切り離し 34
- コード例 3-12 システムコントローラのプラットフォームコンソールからのセッションの切り離し 34
- コード例 3-13 ドメイン A シェルからセッションを切り離す `disconnect` コマンドの例 34
- コード例 3-14 `dumpconfig` コマンドの例 37
- コード例 3-15 動作中のシステムコントローラボードおよびシステムコントローラのリアルタイムオペレーティングシステムを更新する `flashupdate` コマンドの例 43
- コード例 3-16 交換用 CPU/メモリーボード `sb4` を更新する `flashupdate` コマンドの例 43
- コード例 3-17 `addboard` コマンドの情報を表示する `help` コマンドの例 45
- コード例 3-18 `show` で始まるコマンドを表示する `help` コマンドの例 45
- コード例 3-19 `a` で始まるコマンドを表示する `help` コマンドの例 45

- コード例 3-20 `history` コマンド 46
- コード例 3-21 パスワードが設定されている場合の `password` コマンドの例 48
- コード例 3-22 パスワードが設定されていない場合の `password` コマンドの例 48
- コード例 3-23 sb2 の電源を切断する `poweroff` コマンドの例 51
- コード例 3-24 プラットフォームシェルのすべての電源装置、ファントレー、およびシステムボードの電源を切断する `poweroff` コマンドの例 51
- コード例 3-25 sb2 の電源を投入する `poweron` コマンドの例 53
- コード例 3-26 ドメイン A のすべての CPU/メモリーボードおよび I/O アセンブリの電源を投入する `poweron` コマンドの例 53
- コード例 3-27 `reboot` コマンドの例 56
- コード例 3-28 ドメイン A からの `reset` コマンドの例 58
- コード例 3-29 ドメイン A からの `reset -a` コマンドの例 58
- コード例 3-30 `restoreconfig` コマンドの例 62
- コード例 3-31 動作中ドメイン A の `resume` コマンドの例 64
- コード例 3-32 プラットフォームシェルの `setdate` コマンドの例 68
- コード例 3-33 日付ホストから日付を設定する `setdate -r` コマンドの例 68
- コード例 3-34 グリニッジ標準時からのオフセットを使用してタイムゾーンを太平洋標準時に設定する `setdate -t` コマンドの例 68
- コード例 3-35 タイムゾーンの簡略表現を使用して日付およびタイムゾーンを東部標準時に設定する `setdate -t` コマンドの例 68
- コード例 3-36 グリニッジ標準時からのオフセットを使用してタイムゾーンを日本標準時間に設定する `setdate -t` コマンドの例 69
- コード例 3-37 タイムゾーンの簡略表現を使用してタイムゾーンをヨーロッパ中央時間に設定する `setdate -t` コマンドの例 69
- コード例 3-38 `setdefaults` の例 72
- コード例 3-39 手動フェイルオーバーを実行する `setfailover` コマンドの例 (スペア SC 上で実行) 76
- コード例 3-40 フェイルオーバーを使用不可にする `setfailover` コマンドの例 76
- コード例 3-41 フェイルオーバーを再度使用可能にする `setfailover` コマンドの例 77
- コード例 3-42 `setkeyswitch on` コマンドの例 82
- コード例 3-43 `setkeyswitch off` コマンドの例 82
- コード例 3-44 プラットフォームシェルからドメイン B を停止する `setkeyswitch off` コマンドの例 82

コード例 3-45	スロット sb4 の CPU/メモリーボードの位置を使用可能にする <code>setls</code> コマンドの例	85
コード例 3-46	スロット ib6 の I/O アセンブリの位置を使用可能にする <code>setls</code> コマンドの例	86
コード例 3-47	スロット sb0 および CPU ポート 3 の CPU/メモリーボードの位置を使用不可にする <code>setls</code> コマンドの例	86
コード例 3-48	スロット sb4 の CPU/メモリーボードの位置を使用不可にする <code>setls</code> コマンドの例	86
コード例 3-49	<code>setupdomain</code> コマンドの変数	92
コード例 3-50	<code>setupplatform</code> の出力	99
コード例 3-51	<code>setupplatform -p hostid</code> の出力	102
コード例 3-52	<code>setupplatform -p hostid -m auto</code> の出力	102
コード例 3-53	プラットフォームシェルの <code>showboards</code> コマンドの出力例	104
コード例 3-54	<code>-p version</code> オプションを指定した <code>showboards</code> コマンド	105
コード例 3-55	ドメインシェルの <code>showboards -a</code> コマンド	108
コード例 3-56	<code>showcodlicense</code> コマンドの出力例 – わかりやすく加工された COD RTU ライセンスデータ	110
コード例 3-57	<code>showcodlicense -r</code> コマンドの出力例 – COD RTU ライセンスキー	110
コード例 3-58	<code>showcodlicense -v</code> コマンドの出力例 – わかりやすく加工された COD RTU ライセンスデータと加工されていない COD RTU ライセンスデータ	110
コード例 3-59	<code>showcodusage</code> コマンドのリソース別の出力例	112
コード例 3-60	<code>showcodusage</code> コマンドのドメイン別の出力例	112
コード例 3-61	<code>showcodusage</code> コマンドのリソース別およびドメイン別の出力例	114
コード例 3-62	<code>showcomponent</code> の出力例	116
コード例 3-63	<code>showcomponent ib6</code> の出力例	118
コード例 3-64	プラットフォームシェルの <code>showdate</code> コマンド	120
コード例 3-65	<code>showdomain</code> コマンドの例	122
コード例 3-66	<code>showdomain -v</code> コマンドの例	123
コード例 3-67	起動パラメタの情報を表示する <code>showdomain -p bootparams</code> コマンドの例	124
コード例 3-68	プラットフォームシェルに対する <code>showenvironment</code> コマンドの例	128
コード例 3-69	<code>showerrorbuffer</code> コマンドのインターコネクトテストの出力例	132
コード例 3-70	<code>showerrorbuffer</code> コマンドのハードウェアエラーの出力例	133
コード例 3-71	<code>showerrorbuffer</code> コマンドの出力例 – 永続的に保存されたエラー情報	133
コード例 3-72	<code>showescape</code> コマンドの出力例	134

- コード例 3-73 フェイルオーバーが正常に機能していることを示す `showfailover` コマンド 136
- コード例 3-74 フェイルオーバーが使用不可であることを示す `showfailover` コマンド 136
- コード例 3-75 冗長モードでの `showfailover` コマンド 137
- コード例 3-76 SC フェイルオーバーが動作していないことを示す `showfailover` コマンド 137
- コード例 3-77 `showfru -r manr` コマンドの出力例 139
- コード例 3-78 キースイッチが on に設定されていることを示している `showkeyswitch` の例 141
- コード例 3-79 キースイッチが off に設定されていることを示している `showkeyswitch` の例 141
- コード例 3-80 キースイッチが standby に設定されていることを示している `showkeyswitch` の例 141
- コード例 3-81 システムの再起動後に実行する `showlogs` コマンドの出力例 143
- コード例 3-82 `showlogs` コマンドの永続ログの出力例 144
- コード例 3-83 `showlogs` コマンドの永続ログの出力例、重大 (Critical) メッセージのみ 145
- コード例 3-84 `showlogs` コマンドの永続ログの出力例、5 件のメッセージの表示 146
- コード例 3-85 Sun Fire 6800 システムの `showplatform` コマンドの出力例 149
- コード例 3-86 Sun Fire 6800 システムの `showplatform -v` コマンドの出力例 150
- コード例 3-87 ホスト ID および MAC アドレスの交換後の `showplatform -p hostid` コマンドの出力例 152
- コード例 3-88 ホスト ID および MAC アドレスの復元後の `showplatform -p hostid` コマンドの出力例 153
- コード例 3-89 `showsc` コマンド 156
- コード例 3-90 `ssh-keygen` コマンドの例 159
- コード例 3-91 CPU/メモリーボード sb0 をテストする `testboard` の例 161

はじめに

このマニュアルでは、Sun Fire™ ミッドレンジシステム E6900/E4900/6800/4810/4800/3800 のシステムコントローラのコマンド行インタフェースについて説明します。システムコントローラは、サーバーのシステム機能、環境監視、ドメイン、およびハードウェアを制御します。コマンド行インタフェースを使用して、プラットフォームやドメインを構成し、ドメイン、電源装置、ファン、およびその他のコンポーネントの電源の投入と切断を行うことができます。また、Solaris™ ドメインコンソールにアクセスすることもできます。

お読みになる前に

このマニュアルは、システム管理者または Solaris オペレーティング環境での作業に関する知識を持つ人を対象としています。このような経験がない場合は、まず、Solaris ユーザーおよびシステム管理者向けマニュアルを読み、UNIX® システム管理のトレーニングの受講を検討してください。マニュアル URL の詳細は、xxvi ページの「Sun のオンラインマニュアル」を参照してください。

マニュアルの構成

このマニュアルは、次の章で構成されています。

第1章では、システムコントローラについて説明します。また、プラットフォーム管理およびドメイン管理についても簡単に説明します。

第2章では、システムコントローラコマンドの構文、コマンド名、およびコマンド回数について説明します。

第3章では、すべてのシステムコントローラコマンドの概要を一覧で示し、各コマンドについて説明します。

書体と記号について

書体または記号 ¹	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例。	.login ファイルを編集します。 ls -a を実行します。 % You have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して表します。	マシン名% su Password:
AaBbCc123 またはゴシック	コマンド行の可変部分。実際の名前や値と置き換えてください。	rm <i>filename</i> と入力します。 rm ファイル名 と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『Solaris ユーザーマニュアル』
「 」	参照する章、節、または、強調する語を示します。	第6章「データの管理」を参照。 この操作ができるのは「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅をこえる場合に、継続を示します。	% grep ``#define \ XV_VERSION_STRING'

¹ 使用しているブラウザにより、これら設定と異なって表示される場合があります。

シェルプロンプトについて

シェル	プロンプト
UNIX の C シェル	マシン名%
UNIX の Bourne シェルと Korn シェル	\$
スーパーユーザー (シェルの種類を問わない)	#

関連マニュアル

種類	タイトル	Part No.
リリースノート	『Sun Fire ミッドレンジシステムファームウェア 5.18.0 ご使用にあたって』	819-0756
システム管理	『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』	819-0758
Sun Management Center	『Sun Management Center 3.5 バージョン 3 Sun Fire ミッドレンジシステムのための追補マニュアル』	817-5584
動的再構成 (DR)	『Sun Fire ミッドレンジシステム Dynamic Reconfiguration ユーザーマニュアル』	817-4921
概要	『Sun Fire 6800/4810/4800/3800 システム製品概要』	806-7899
	『Sun Fire E6900/E4900 システム製品概要』	817-5849
保守	『Sun Fire 6800/4810/4800/3800 システムサービスマニュアル』	817-2376
	『Sun Fire E6900/E4900 システムサービスマニュアル』	817-5854

Sun のオンラインマニュアル

各言語対応版を含むサンの各種マニュアルは、次の URL から表示、印刷、または購入できます。

<http://www.sun.com/documentation>

Sun の技術サポート

このマニュアルに記載されていない技術的な問い合わせについては、次の URL にアクセスしてください。

<http://www.sun.com/service/contacting>

コメントをお寄せください

弊社では、マニュアルの改善に努力しており、お客様からのコメントおよびご忠告をお受けしております。コメントは下記よりお送りください。

<http://www.sun.com/hwdocs/feedback>

コメントには下記のタイトルと Part No. を記載してください。

『Sun Fire ミッドレンジシステムコントローラコマンドリファレンスマニュアル』,
Part No. 819-0762-10

第1章

システムコントローラの概要

システムコントローラは、システムコントローラボードとシステムコントローラファームウェアで構成されます。

システムコントローラファームウェアの機能は、次のとおりです。

- システムの監視および制御
- ハードウェアの管理
- ドメインの構成
- Solaris オペレーティング環境への日付と時刻の提供
- すべてのシステムボードで使用されるクロック信号の提供
- プラットフォームコンソールおよびドメインコンソールの提供
- Sun Management Center ソフトウェアとともに使用する、SNMP によるシステムの監視および制御機能の提供

システムコントローラについては、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』、『Sun Fire 6800/4810/4800/3800 システム製品概要』、および『Sun Fire E6900/E4900 システム製品概要』を参照してください。

プラットフォームおよびドメインの管理

プラットフォーム管理機能では、ドメイン間で共有される資源およびサービスを管理します。この管理機能を使用して、資源やサービスを構成および共有する方法を設定できます。

ドメイン管理機能では、特定のドメインの資源およびサービスを管理します。この機能を使用すると、ドメインの構成、キースイッチの位置の制御、およびドメインコンソールへのアクセスが可能になります。

プラットフォーム管理機能およびドメイン管理機能については、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「概要」の章を参照してください。

システムコントローラへの接続

システムコントローラへの接続方法については、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「システムコントローラへのアクセス」の章を参照してください。

システムコントローラのナビゲーション

システムコントローラ内のナビゲート方法については、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「システムコントローラへのアクセス」の章を参照してください。

セッションの終了

システムコントローラセッションの終了方法については、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「システムコントローラへのアクセス」の章を参照してください。

第2章

システムコントローラのコマンド構文、引数、およびコンポーネント名

この章では、次の項目について説明します。

- 3 ページの「コマンド構文および引数」
- 4 ページの「コマンド名」
- 4 ページの「コンポーネント名」
- 6 ページの「CPU/メモリーボードおよび I/O アセンブリのボード状態」
- 6 ページの「ボードのテスト状態」
- 7 ページの「ドメインの状態」
- 8 ページの「特殊文字」
- 8 ページの「FTP URL の使用」
- 9 ページの「対話型コマンド」
- 9 ページの「状況に応じて使用できるコマンド」
- 10 ページの「コマンド行の編集」
- 11 ページの「コマンド行の履歴」
- 12 ページの「コマンド補完機能」

コマンド構文および引数

システムコントローラコマンドの一般的な構文は、次のとおりです。

```
command_name [flags] [arguments]
```

引数はコマンド名のあとに続く文字列で、次の 2 つに分類されます。

- 必須引数
- オプション引数

オプション引数は、常にコマンド行のオプションフラグのあとに入力します。次の例では、オプション引数 *domainID* の *a* がオプションフラグ *-d* のあとに入力されています。*boardname* は必須引数で、CPU/メモリーボードの名前を表します。この例では、*sb2* が *boardname* にあたります。

```
schostname:SC> addboard -d a sb2
```

コマンド名

大部分のシステムコントローラコマンドには、「動名詞」の形式の名前が付いていません。一般的に、コマンド名は英語です。システムコントローラコマンド名では大文字と小文字が区別されますが、コマンドのオプションでは区別されません。ただし、ボード名のような項目は大文字で指定します。

注 – システムコントローラコマンドを入力するときは、完全なコマンド名、または一意に識別できる長さのコマンド名を指定します。

コンポーネント名

表 2-1 に、プラットフォームからアクセスできるコンポーネント名を示します。また、表 2-2 に、ドメインからアクセスできるコンポーネント名を示します。これらの表のコンポーネント名は、大文字でも小文字でも指定できます。

注 - 表 2-1 および表 2-2 のコンポーネントは、使用しているシステムによって異なります。たとえば、6 つの電源装置と 6 つの CPU/メモリーボードを使用できるのは、Sun Fire E6900 および 6800 システムだけです。

表 2-1 プラットフォームからアクセスできるコンポーネント

装置の説明	装置名
電源グリッド*	GRID0、GRID1
電源装置	PS0、PS1、PS2、PS3、PS4、PS5
CPU/メモリーボード	SB0、SB1、SB2、SB3、SB4、SB5
I/O アセンブリ	IB6、IB7、IB8、IB9
リピータボード	RP0、RP1、RP2、RP3
ID/ソースボード	ID0
ファントレイ	FT0、FT1、FT2、FT3
システムコントローラ	SSC0、SSC1

* 電源グリッドはコンポーネントではなく、Sun Fire E6900 または 6800 システムを異なるシステムに 2 分割するものです。電源装置 ps0、ps1、および ps2 は電源グリッド 0 を構成します。ps3、ps4、および ps5 は電源グリッド 1 を構成します。

表 2-2 に、ドメインからアクセスできるコンポーネントを示します。

表 2-2 ドメインからアクセスできるコンポーネント

装置の説明	装置名
CPU/メモリーボード	SB0、SB1、SB2、SB3、SB4、SB5
I/O アセンブリ	IB6、IB7、IB8、IB9

CPU/メモリーボードおよび I/O アセンブリのボード状態

表 2-3 に、CPU/メモリーボードおよび I/O アセンブリのボード状態を示します。ボード状態を確認するには、showboards コマンドを使用して、State ヘッダーを参照します。

表 2-3 ボード状態

ボード状態	説明
使用可能 (Available)	ボードがドメインに割り当てられていません。
割り当て済み (Assigned)	ボードはドメインに割り当てられていますが、ハードウェアが構成されていないか、または使用されていません。
動作中 (Active)	ボードは、割り当てられたドメインで使用されています。動作中のボードは再割り当てできません。

冗長システムコントローラ (SC) を装備している場合、SC の状態には Main または Spare のいずれかが表示されます。メイン SC は、すべてのシステム資源を供給します。スペア SC は、メイン SC に障害が発生した場合にシステム資源を供給します。

ID ボード、電源装置、およびリピータボードには、状態はありません。これらのボードおよびコンポーネントのボード状態フィールドにはダッシュが表示されます (表 2-4)。ファントレーには、停止 (off)、低速 (low speed)、および高速 (high speed) の状態があります。

ボードのテスト状態

表 2-4 に、showboards コマンドの Status フィールドについての説明を示します。

表 2-4 showboards コマンドの Status フィールド

テスト状態	説明
合格 (Passed)	ボードのすべてのコンポーネントが、テストに合格しました。
失敗 (Failed)	POST で問題が発見されたため、ボードは使用できません。ファームウェアが破壊されたか、非互換である可能性もあります。
正常 (OK)	コンポーネントが正常に機能しています。

表 2-4 showboards コマンドの Status フィールド (続き)

テスト状態	説明
テスト中 (Under Test)	ドメインで POST (電源投入時自己診断) が実行されています。setkeyswitch コマンドまたは testboard コマンドの実行中か、あるいは SNMP でのテスト中です。
テスト未実行 (Not Tested)	テストが実行されていません。
縮退 (Degraded)	ボード上のいくつかのコンポーネントに問題があるか、使用不可になっています。ボード上にまだ使用できる部分があるときは、ボードが縮退モードになります。
使用不可 (Disabled)	コンポーネントがシステムから構成解除されました。POST で問題が発見されたためにコンポーネントが使用できないか、setls コマンドによってコンポーネント位置の状態が使用不可に設定されました。
-	スロットが空いているか、そのデバイスに適合していません。

ドメインの状態

showplatform および showdomain コマンドの出力では、フィールドの 1 つにドメイン状態が示されます。ドメイン状態の主な値については、表 2-5 を参照してください。

表 2-5 showplatform および showdomain コマンド出力のドメイン状態列の値

ドメイン状態	説明
電源切断 (Powered Off)	ドメインが停止中で、キースイッチが off の位置にあります。
待機 (Standby)	ドメインが停止中で、キースイッチが standby の位置にあります。
POST 実行中 (Running POST)	ドメインが動作中で、POST を実行しています。
動作中 (Active)	ドメインが動作中です。
OpenBoot PROM が動作中 (Active - OpenBoot PROM)	ドメインが動作中で、OpenBoot™ PROM を実行しています。
起動中 (Active - Booting)	ドメインが動作中で、Solaris オペレーティング環境を起動しています。
Solaris が動作中 (Active - Solaris)	ドメインが動作中で、Solaris オペレーティング環境が動作しています。
停止中 (Active - Halted)	ドメインで Solaris オペレーティング環境が停止しています。
リセット中 (Active - Reset)	ドメインで XIR リセットが行われ、再起動されていません。

表 2-5 showplatform および showdomain コマンド出力のドメイン状態列の値 (続き)

ドメイン状態	説明
パニック中 (Active - Panicking)	ドメインが動作中で、パニックが発生しています。コアファイルの作成中です。
デバッグ中 (Active - Debugger)	ドメインが動作中で、現在デバッガが実行されています。
応答なし (Not Responding)	ドメインが応答しません。
エラーによる一時停止 (Paused due to an error)	ハードウェアのエラーによりドメインが一時停止しています。

特殊文字

複数のコマンドを 1 行で実行するには、セミコロン (;) で区切ります。次に、addboard および deleteboard コマンドの両方を実行する例を示します。

```
schostname:A> addboard sb2;deleteboard sb3
```

ハッシュ記号 (#) は、現在行でのコメントの開始点を示します。次に、addboard コマンドを実行する例を示します。# から Return キーを押すまでの間に入力された内容は、処理されません。

```
schostname:A> addboard sb2 #this text is ignored
```

FTP URL の使用

flashupdate、dumpconfig、restoreconfig などのシステムコントローラコマンドを使用する場合は、URL に FTP プロトコルを指定し、ホスト名のあとにはダブルスラッシュ (//) を入力して絶対パスを指定します。ダブルスラッシュを入力しない場合、そのパスは指定したユーザーのホームディレクトリに属すると解釈されません。

次に、FTP URL を指定するさまざまな方法を示します。

- 絶対パス名を使用する URL :

```
ftp://user:password@hostname//tmp/directory
```

この例では、/tmp/directory が参照されます。

- 相対パス名を使用する URL :

```
ftp://user:password@hostname/tmp/directory
```

この例のパス名は、/home/user/tmp/directory として参照されます。

- 匿名 FTP を使用する URL (ユーザー名またはパスワードがない):

```
ftp://hostname/tmp/directory
```

この例のパス名は、/home/ftp/tmp/directory として参照されます。

対話型コマンド

コマンドによっては、実行前に確認のプロンプトが表示される場合があります。-y または -n フラグを指定して、プロンプトを無効にすることもできます。また、プロンプトで表示された質問には、yes または no で答えます。

setupplatform、setupdomain などのコマンドは、常に対話型のコマンドです。

- 対話型コマンドが入力を求めるプロンプトを表示した場合には、次のように入力します。
 - 角括弧 [] に表示された現在の設定を保存するには、Return キーを押します。
 - 文字列を入力する場合、現在の設定を空の文字列に変更するには、ダッシュ (-) を入力します。

状況に応じて使用できるコマンド

システムコントローラコマンドには、メイン SC では実行できても、スペア SC では実行できないものがあります。使用している SC で実行できるコマンドの一覧を参照するには、その SC のプラットフォームシェルで help コマンドを実行します。help コマンドは、システムコントローラがメインであるかスペアであるかに基づいて、有効なコマンドの一覧を表示します。

コマンド行の編集

システムコントローラには、コマンド行を編集するために、基本的なコマンド行エディタが用意されています。入力したキーは、画面上には表示されません。

表 2-6 に、簡易コマンド行編集に使用するキーストロークを示します。

- Control キーシーケンスでは、Control キーを押したまま次の文字を入力します (表 2-6)。
- Escape キーシーケンスでは、Escape キーを押して離し、その後、次の文字を押して離します (表 2-6)。

表 2-6 コマンド行の編集機能

キーストローク	説明
Backspace (Control-h)	カーソルの直前の文字を消去します。
Delete	カーソルの直前の文字を消去します。
Control-c	コマンド行の編集を取り消します。コマンドは実行されません。
Return	行の編集を終了します。
Control-b	1 文字戻ります。
Esc-b	1 ワード戻ります。
Control-f	1 文字進みます。
Esc-f	1 ワード進みます。
Control-a	行頭に戻ります。
Control-e	行末に進みます。
Esc-h	ワードの先頭からカーソルの直前までを消去します。消去された文字を保存バッファに格納します。
Control-w	行の先頭からカーソルの直前までを消去します。消去された文字を保存バッファに格納します。
Control-d	次の文字を消去します。
Esc-d	カーソル位置からワードの最後までを消去します。消去された文字を保存バッファに格納します。
Control-k	カーソル位置から行末までを消去します。消去された文字を保存バッファに格納します。
Control-u	行全体を消去します。消去された文字を保存バッファに格納します。

表 2-6 コマンド行の編集機能 (続き)

キーストローク	説明
Control-r	行を再入力します。
Control-q	次の文字を引用します。制御文字を挿入できます。
Control-y	カーソルの直前に保存バッファの内容を挿入します。

コマンド行の履歴

各シェルでは、入力したすべてのコマンドの短い履歴が保存されます。コマンド行の履歴を表示するには、`history` コマンドを使用します。コマンドをふたたび呼び出して、コマンドを編集したり、**Return** キーを押してコマンドを実行したりすることができます。入力した 8 つ以上のコマンド行の履歴が保存されます。

表 2-7 に、以前入力したコマンドをふたたび呼び出すためのキーストロークを示します。

表 2-7 以前入力したコマンド行をふたたび呼び出すためのキーストローク

キーストローク	説明
Control-p	編集のために、直前の行を選択して表示します。
Control-n	編集のために、次の行を選択して表示します。
Control-l	コマンド履歴リストのすべてを表示します。

コマンド補完機能

コマンド補完機能を使用すると、長いコマンドの入力が簡単になります。コマンドの一部を入力して、補完キーストロークを使用します (表 2-8 を参照)。これを使用すると、入力した文字で始まるコマンドが、使用可能なコマンドのリストから検索されます。

- 候補となるコマンドが 1 つだけの場合は、自動的に残りの文字が入力されます。
- 候補となるコマンドが複数ある場合は、その複数のコマンドすべてに共通する文字が入力されます。
- 入力した文字で始まるコマンドがない場合は、残りの文字に対して少なくとも 1 つの候補ができるまで文字が消去されます。

表 2-8 に、コマンドを補完するためのキーストロークを示します。

表 2-8 システムコントローラコマンドを補完するためのキーストローク

キーシーケンス	説明
Control-space	コマンドを補完します。
Control-?	一致する候補をすべて表示します。
Control-/	一致する候補をすべて表示します。

第3章

システムコントローラのコマンドリファレンス

この章では、Sun Fire ミッドレンジシステムのユーザー用に設計された、システムコントローラコマンドの概要について説明します。また、システムコントローラのコマンド行インタフェースや、各コマンドの詳細および使用例についても説明します。

コマンドの概要

表 3-1 に、システムコントローラのコマンドと、その使用方法を示します。多くのコマンドは、プラットフォームシェルおよびドメインシェルの両方で実行できます。システムコントローラコマンドは、プラットフォームシェルで実行した場合とドメインシェルで実行した場合とで、使用方法や効果、適用範囲が異なる場合があります。

表 3-1 システムコントローラコマンドの概要

コマンド	説明	プラットフォーム シェル	ドメインシェル
addboard	ドメインにボードを割り当てます。	x	x
addcodlicense	COD (Capacity on Demand) ライセンスデータベースに、COD 使用権 (RTU : Right-to-Use) ライセンスキーを追加します。	x	
break	ドメインコンソールにブレイク信号を送信します。		x
connections	システムコントローラまたはドメインへの接続を表示します。	x	x
console	プラットフォームからドメインに接続します。	x	
deleteboard	ドメインからボードの割り当てを解除します。	x	x
deletecodlicense	COD ライセンスデータベースから、COD 使用権 (RTU) ライセンスキーを削除します。	x	

表 3-1 システムコントローラコマンドの概要 (続き)

コマンド	説明	プラットフォーム シェル	ドメインシェル
disablecomponent	リリース 5.15.0 以降は、このコマンドを使用せず、代わりに <code>setls</code> コマンドを使用してください。	x	x
disconnect	現在の接続または指定された接続を切り離します。	x	x
dumpconfig	プラットフォームおよびドメインの構成をサーバーに保存します。	x	
enablecomponent	リリース 5.15.0 以降は、このコマンドを使用せず、代わりに <code>setls</code> コマンドを使用してください。	x	x
flashupdate	ファームウェアを更新します。	x	
help	コマンドの基本的なヘルプ情報を表示します。	x	x
history	コマンド履歴を、日付およびタイムスタンプとともに表示します。	x	x
password	シェルのパスワードを設定します。	x	x
poweroff	コンポーネントの電源を切断します。	x	x
poweron	コンポーネントの電源を投入します。	x	x
reboot	システムコントローラを再起動します。	x	
reset	ドメインシェルのドメインをリセットします。		x
restartssh	SSH サーバーを再起動して、最新のホスト鍵を読み込み、格納します。	x	
restoreconfig	サーバーからプラットフォームおよびドメインの構成を復元します。	x	
resume	ドメインシェルの終了し、ドメインコンソールへのアクセスを再開します。		x
setdate	日付および時間を設定します。	x	x
setdefaults	構成をデフォルトの値に設定します。	x	x
setescape	エスケープシーケンスを設定します。	x	
setfailover	システムコントローラのフェイルオーバーの状態を変更します。	x	
setkeyswitch	キースイッチの位置を設定します。	x	x
setls	コンポーネント位置の状態を設定します。リリース 5.15.0 以降は、 <code>enablecomponent</code> および <code>disablecomponent</code> コマンドの代わりにこのコマンドを使用してください。	x	x

表 3-1 システムコントローラコマンドの概要 (続き)

コマンド	説明	プラットフォーム シェル	ドメインシェル
setupdomain	ドメインを構成します。		x
setupplatform	プラットフォームを構成します。	x	
showboards	システム内のすべてのコンポーネントの割り当て情報および状態を表示します。	x	x
showcodlicense	COD ライセンスデータベースに現在格納されている COD 使用権 (RTU) ライセンスを表示します。	x	
showcodusage	COD リソースの現在の使用状況に関する統計情報を表示します。	x	x
showcomponent	コンポーネントの状態を表示します。	x	x
showdate	日付および時間を表示します。	x	x
showdomain	ドメインの構成および状態を表示します。		x
showenvironment	環境情報を表示します。	x	x
showerrorbuffer	エラーバッファの内容を表示します。	x	
showescape	エスケープシーケンスを表示します。	x	x
showfailover	システムコントローラおよびクロックのフェイルオーバーの状態を表示します。	x	
showfru	現在 Sun Fire ミッドレンジシステムに取り付けられている現場交換可能ユニット (FRU) を表示します。	x	
showkeyswitch	仮想キースイッチの設定を表示します。	x	x
showlogs	ログを表示します。	x	x
showplatform	プラットフォームの構成と情報、およびドメインの状態を表示します。	x	
showresetstate	リセット後またはレッドモードトラップ後の CPU を表示します。		x
showsc	システムコントローラのバージョンおよび稼働時間を表示します。	x	
ssh-keygen	SSH ホスト鍵の生成と、システムコントローラのホスト鍵の指紋の表示を行います。	x	
testboard	CPU/メモリーボードをテストします。	x	x

システムコントローラコマンド一覧 (アルファベット順)

次に、システムコントローラコマンドについて説明します。

addboard

ドメインにボードを割り当てます。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

プラットフォームシェルの構文

```
addboard -d domainID system_board_name [system_board_name ...]
```

```
addboard -h
```

ドメインシェルの構文

```
addboard system_board_name [system_board_name ...]
```

```
addboard -h
```

オプション / パラメタ

-d には、*domainID* をオプションで指定します (プラットフォームシェルのみ)。

domainID の値は、a、b、c、または d です。

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

system_board_name には、追加するボードを指定します。*system_board_name* に指定できる値は、sb0 ~ sb5 (CPU/メモリーボード) または ib6 ~ ib9 (I/O アセンブリ) です。

説明

プラットフォームシェルで指定されたドメインまたは現在のドメインに、`system_board_name` を割り当てます。ボードの状態は、使用可能 (Available) である必要があります。ボード状態を表示するには、`showboards` コマンドを使用します。ボード状態の詳細は、6 ページの「CPU/メモリーボードおよび I/O アセンブリのボード状態」を参照してください。

ドメインシェルを使用してボードをドメインに割り当てるには、そのボード名が現在のドメインのアクセス制御リスト (ACL) に記載されている必要があります。ボードが ACL に記載されていると、システムコントローラソフトウェアはそのボードの `addboard` 要求を処理できます。プラットフォームシェルでは ACL を使用しないため、常にボードをドメインに追加できます。また、プラットフォームシェルでは、ボードをドメインから削除して ACL を無視するか、または無効にすることもできます。`setupplatform` コマンドを使用して ACL を構成し、ボードがアクセスできるドメインを制限することもできます。

ボードが動作中ドメインに割り当てられている場合は、ボードを使用できません。ドメインからボードの割り当てを解除するには、ドメインで Solaris オペレーティング環境を停止する必要があります。実行手順については、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「一般的な管理作業」の章にある「ボードの割り当ておよび割り当て解除」を参照してください。

ボードが存在しない場合に、このコマンドを実行すると、スロットの所有権が指定されたドメインに割り当てられます。

関連項目

`deleteboard`、`setkeyswitch`、`showboards`、`showdomain`、`showplatform`、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「一般的な管理作業」の章にある「ボードの割り当ておよび割り当て解除」(ドメインにボードを割り当てる手順) を参照してください。

例 — プラットフォームシェル

プラットフォームシェルから、ボード名 sb2 をドメイン A に追加するには、次のように入力します (コード例 3-1)。

コード例 3-1 プラットフォームシェルの addboard コマンドの例

```
schostname:SC> addboard -d a sb2
```

例 — ドメインシェル

ボード名 sb2 を現在のドメインに割り当てるには、次のように入力します (コード例 3-2)。

コード例 3-2 ドメインシェルの addboard コマンドの例

```
schostname:A> addboard sb2
```

addcodlicense

COD (Capacity on Demand) ライセンスデータベースに、COD 使用権 (RTU : Right-to-Use) ライセンスキーを追加します。

適用範囲

プラットフォームシェル

構文

```
addcodlicense license-signature
```

```
addcodlicense -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

license-signature には、COD ライセンスデータベースに追加する COD RTU ライセンスキーを指定します。

説明

指定した COD RTU ライセンスキーを、システムコントローラの COD ライセンスデータベースに追加します。

注 – このコマンドを実行する前に、Sun License Center から COD RTU ライセンスキーを入手する必要があります。COD RTU ライセンスキーの詳細は、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』を参照してください。

関連項目

deletecodlicense、showcodlicense、showcodusage

例

コード例 3-3 addcodlicense コマンドの例

```
schostname:SC> addcodlicense 01:80d8a9ed:45135285:0201000000:8:00000000:0000000000000000000000
```

注 - 上記の COD RTU ライセンスキーは一例で、有効なライセンスキーではありません。

break

ドメインコンソールにブレイク信号を送信します。

適用範囲

ドメインシェル

構文

```
break [-y|-n]
```

```
break -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-y を指定すると、警告メッセージに **yes** と応答します。これを指定した場合は、確認のプロンプトが表示されません。

-n を指定すると、警告メッセージに **no** と応答します。これを指定した場合は、確認が必要な場合にはコマンドが実行されません。

説明

ドメインコンソールにブレイク信号を送信します。ドメインコンソールを再開します。

注 - このコマンドは、Solaris オペレーティング環境を一時停止します。

Solaris オペレーティング環境がドメイン内で動作しているときに **break** 信号を送信すると、通常の場合、**OpenBoot PROM** またはデバッガが強制的に起動されます。キースイッチの設定が **secure** の場合、Solaris オペレーティング環境はブレイク信号を無視します。

関連項目

resume、setkeyswitch、showkeyswitch

例

コード例 3-4 に、`break` コマンドを使用して Solaris オペレーティング環境を一時停止し、OpenBoot PROM に入る方法を示します。

コード例 3-4 `break` コマンドの例

```
schostrname:A> break
```

```
This will suspend Solaris in domain A.
```

```
Do you want to continue? [no] yes
```

```
Type 'go' to resume.
```

```
debugger entered.
```

```
{1} ok
```


connections

システムコントローラまたはドメインへの接続を表示します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

プラットフォームシェルの構文

```
connections [-d domainID]
```

```
connections -h
```

ドメインシェルの構文

```
connections [-h]
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-d *domainID* を指定すると、指定したドメイン (a、b、c、または d) への接続が表示されます。

説明

システムコントローラに現在接続されているホストを表示します。プラットフォームシェルからこのコマンドを実行すると、プラットフォームおよび各ドメインへの接続が表示されます。

ドメインシェルからこのコマンドを実行すると、ドメインへの接続だけが表示されます。SSH または Telnet を使用する場合、各ドメインへの接続は 1 つです。

システムコントローラに対して開始できる接続の種類については、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』を参照してください。

関連項目

disconnect

例 — プラットフォームシェル

コード例 3-5 プラットフォームシェルに対する connections コマンド

```
schostname: SC> connections

ID  Hostname                Idle Time Connected On   Connected To
--  -
  1  xxxxxxxx                -           May 02 00:00   Platform
  4  xxx                     -           May 02 00:21   Platform

schostname: SC>
```

表 3-2 に、コード例 3-5 で出力されたヘッダーについての説明を示します。

表 3-2 connections コマンドのヘッダーの説明

connections コマンドの ヘッダー列	説明
ID	接続 ID。これは一意の番号です。
Hostname	このセッションの接続元。値が localhost の場合、接続はプラットフォームまたはシリアルポートを介して確立されています。
Idle Time	SSH、Telnet またはシリアルポート接続が、活動せずにアイドル状態になっている時間。30 秒前に活動があった場合は、ダッシュ (-) が表示されます。
Connected On	接続が開始された日時。書式は、Mon dd hh:mm です。
Connected To	セッションが接続されているシェルまたはコンソール。Platform または domainIDs (A、B、C、または D) が表示されます。

console

プラットフォームからドメインに接続します。

適用範囲

プラットフォームシェル

構文

```
console [-d] domainID
```

```
console -h
```

オプション / パラメタ

-d *domainID* には、接続するドメイン (a、b、c、または d) を指定します。-d パラメタは省略可能で、*domainID* だけを指定することもできます。

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

説明

ドメインに接続します。プラットフォームからドメインにナビゲートするには、`console` コマンドを使用します。このドメインへの接続用にパスワードが作成されている場合は、パスワードを入力する必要があります。

注 - OpenBoot PROM が ok プロンプト状態の場合、または Solaris オペレーティング環境が login:プロンプト状態の場合には、Enter キーを押してプロンプトを表示させる必要があります。Enter キーを押さないと、POST、OpenBoot PROM、または Solaris オペレーティング環境によって出力が生成されるまで、プロンプトは表示されません。

ドメインがハングアップしている場合は、出力は表示されません。ただし、ドメインが出力を表示していなくても、ハングアップしているとはかぎりません。

ドメインが動作中の場合 (ドメインが、Solaris オペレーティング環境、OpenBoot PROM、または POST を実行している場合) は、ドメインコンソールに接続されます。ドメインが動作中でない場合は、ドメインシェルに接続されます。ドメインコンソールからのドメインシェルの取得については、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「システムコントローラへのアクセス」の章を参照してください。

関連項目

disconnect

例 — プラットフォームシェル

次に、ドメインが動作しておらず、パスワードが初期設定されていない場合のコマンドの例を示します。

コード例 3-6 ドメイン B へのアクセスにパスワードが設定されていない場合の console コマンドの例

```
schostname:SC> console b
Connected to Domain B
Domain Shell for Domain B

schostname:B>
```

次に、ドメインが動作しておらず、パスワードが初期設定されている場合のコマンドの例を示します。

コード例 3-7 ドメイン A へのアクセスにパスワードが設定されている場合の console コマンドの例

```
schostname:SC> console a
Enter Password:
Connected to Domain A
Domain Shell for Domain A
schostname:A>
```

次に、ドメインが動作中で、パスワードが設定されていない場合のコマンドの例を示します。

```
schostname:SC> console a

Connected to Domain A
```

ほかの出力は表示されません。OpenBoot PROM が ok プロンプト状態の場合、または Solaris オペレーティング環境が login:プロンプト状態の場合には、Enter キーを押してプロンプトを表示させる必要があります。Enter キーを押さないと、POST、OpenBoot PROM、または Solaris オペレーティング環境によって出力が生成されるまで、プロンプトは表示されません。

ドメインがハングアップしている場合は、出力は表示されません。ただし、ドメインが出力を表示していなくても、ハングアップしているとはかぎりません。

deleteboard

現在割り当てられているドメインから、ボードの割り当てを解除します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

プラットフォームシェルおよびドメインシェルの構文

```
deleteboard system_board_name [system_board_name . . .]
```

```
deleteboard [-h]
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

system_board_name には、削除するボードを指定します。指定できる値は、sb0 ~ sb5 (CPU/メモリーボード) および ib6 ~ ib9 (I/O アセンブリ) です。

説明

現在割り当てられているドメインから、ボードの割り当てを解除します。現在のドメインからこのコマンドを使用する場合は、現在のドメインに割り当てられているボードの割り当てだけを解除できます。CPU/メモリーボードまたは I/O アセンブリボードの状態は、割り当て済み (Assigned) である必要があります。ボードは動作中のドメインの一部であってははいけません。ボード状態を表示するには、showboards コマンドを使用します。ボード状態の詳細は、6 ページの「CPU/メモリーボードおよび I/O アセンブリのボード状態」を参照してください。ドメインから割り当てを解除するボードが、アクセス制御リスト (ACL) に記載されている必要はありません。

ドメインから動作中のボードの割り当てを解除するには、ドメインで Solaris オペレーティング環境を停止する必要があります。または、DR を使用して動作中のボードの割り当てを解除することもできます。実行手順については、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「一般的な管理作業」の章にある「ボードの割り当ておよび割り当て解除」を参照してください。

ボードが存在しない場合、このコマンドを実行すると、スロットの所有権の割り当てが指定されたドメインから解除されます。

関連項目

addboard、showboards、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「一般的な管理作業」の章にある「ボードの割り当ておよび割り当て解除」(ドメインからボードを割り当て解除する手順)を参照してください。

例 — プラットフォームシェル

I/O アセンブリ ib7 を削除するには、次のように入力します。

コード例 3-8 I/O アセンブリ 7 を削除する deleteboard コマンドの例

```
schostname:SC> deleteboard ib7
```

例 — ドメインシェル

CPU/メモリーボード sb3 を現在のドメイン (ドメイン A) から削除するには、次のように入力します。

コード例 3-9 CPU/メモリーボード 3 を削除する deleteboard コマンドの例

```
schostname:A> deleteboard sb3
```

deletecodlicense

COD ライセンスデータベースから、COD 使用权 (RTU) ライセンスキーを削除します。

適用範囲

プラットフォームシェル

構文

```
deletecodlicense [-f] license-signature
```

```
deletecodlicense -h
```

オプション / パラメタ

-f を指定すると、ライセンスの削除によってライセンス違反が発生する場合でも、指定した COD RTU ライセンスキーが COD ライセンスデータベースから強制的に削除されます。

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

license-signature には、COD ライセンスデータベースから削除する COD RTU ライセンスキーを指定します。

説明

システムコントローラの COD ライセンスデータベースから、COD RTU ライセンスキーを削除します。COD RTU ライセンスキーの詳細は、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』を参照してください。

システムは、ライセンスの数と、使用している COD CPU の数を照合します。ライセンスの削除によって、使用している COD CPU に対する COD RTU ライセンスの数が足りなくなる場合には、ライセンスキーは COD ライセンスデータベースから削除されません。COD RTU ライセンスキーを削除するには、使用する COD CPU の数を減らす必要があります。適切な数のドメインの電源を切断するか、動的再構成 (DR) を使用して適切な数のボードを切り離してください。

関連項目

addcodlicense、showcodlicense、showcodusage

例

コード例 3-10 deletecodlicense コマンドの例

```
schostname:SC> deletecodlicense 01:80d8a9ed:45135285:0201000000:8:00000000:000000000000000000000000
```

注 – 上記の COD RTU ライセンスキーは一例で、有効なライセンスキーではありません。

disablecomponent

disablecomponent コマンドは、リリース 5.15.0 以降は使用しないでください。このコマンドの代わりに setls コマンドを使用できます。disablecomponent コマンドは現在も使用できますが、setls コマンドを使用することをお勧めします。詳細は、setls コマンドの説明を参照してください。

disconnect

現在の接続または指定された接続を切り離します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

プラットフォームシェルの構文

```
disconnect [ID]
```

```
disconnect -h
```

ドメインシェルの構文

```
disconnect [-h]
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

ID (プラットフォームシェルの場合のみ) には、終了させる接続を指定します。ID は、connections コマンドのヘッダ一列 ID に表示される番号です。

説明

システムコントローラへの接続を終了します。引数を指定しないでこのコマンドを使用すると、現在のセッションが切り離されます。disconnect コマンドの詳細は、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「システムコントローラへのアクセス」の章を参照してください。

接続がほかのシステムから開始されていた場合は遠隔ホストに戻ります。セッションがプラットフォームシェルから開始された場合は、何も表示されません。プロンプトを表示するには、Return キーを押します。シリアルポートから接続していた場合は、メインメニューに戻ります。

関連項目

connections

例

システムコントローラのプラットフォームシェルから遠隔 (SSH または Telnet) 接続のセッションを切り離すには、次のように入力します (コード例 3-11)。

コード例 3-11 システムコントローラのプラットフォームシェルからのセッションの切り離し

```
schostname:SC> disconnect  
Connection closed by foreign host.
```

システムコントローラのプラットフォームコンソールにシリアル接続している場合は、`disconnect` を入力すると次のように表示されます (コード例 3-12)。

コード例 3-12 システムコントローラのプラットフォームコンソールからのセッションの切り離し

```
schostname:SC> disconnect  
  
Type 0 for Platform Shell  
  
Type 1 for domain A  
Type 2 for domain B  
Type 3 for domain C  
Type 4 for domain D  
  
Input:
```

システムコントローラのドメインシェルからセッションを切り離すには、次のように入力します (コード例 3-13)。

コード例 3-13 ドメイン A シェルからセッションを切り離す `disconnect` コマンドの例

```
schostname:A> disconnect  
Connection closed by foreign host.
```

コード例 3-13 は、プラットフォームから確立されたドメインへの接続ではなく、ドメインからの直接接続を示します。

注 - ドメインシェルから切り離しても、何も表示されません。Return キーを押して、プロンプトを表示させてください。

dumpconfig

プラットフォームおよびドメインの構成をサーバーに保存します。

適用範囲

プラットフォームシェル

構文

```
dumpconfig -f url [-t]
```

```
dumpconfig -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-f には、URL を指定します (FTP プロトコルを使用する必要があります)。

url は、データファイルを含むディレクトリの URL です。URL は、ファイルではなくディレクトリを指す必要があります。次に例を示します。

```
ftp://userid:password@hostname/path
```

```
ftp://hostname/path
```

```
ftp://IPaddress/path
```

-t を指定すると、構成データをプレーンテキスト (非暗号化) 形式で保存します (このオプションの使用はお勧めしません。下位互換のために、使用できるようになっています)。

FTP URL の詳細は、8 ページの「FTP URL の使用」を参照してください。

注 - *hostname* には、*schostrname*、*schostrname.eng.sun.com* などの、ホスト名または完全指定のドメイン名を入力してください。省略したドメイン名は使用できません。

注 - URL パスで指定したディレクトリには、指定したユーザーの書込み権が必要です。ユーザーが指定されていない場合は、匿名 FTP が使用されます。

説明

回復に備えて、プラットフォームおよびドメインの構成をサーバーに保存します。デフォルトでは、データは暗号化形式で保存されます。暗号化された構成データのパスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。このコマンドを使用すると、指定した URL に 2 つのデータファイル (*hostname.nvci* および *hostname.tod*) が作成されます。

プラットフォームおよびドメインの初期構成を設定したあとと、設定またはハードウェア構成を変更したときには、このコマンドを使用します。たとえば、*setupplatform*、*setupdomain*、*setdate*、*addboard*、*deleteboard*、*setlts*、*password* を使用すると、設定が変更されます。*dumpconfig* コマンドを再実行することによって、プラットフォームおよびドメインの新しい構成がサーバーに保存されます。



注意 – このコマンドを使用してプラットフォームおよびドメインの構成を保存していない場合に、システムコントローラボードに障害が発生すると、プラットフォームおよびドメインを手動で再構成することになります。そのため、このコマンドの実行は非常に重要です。プラットフォームまたはドメインの構成を変更するたびに、このコマンドを使用します (前述のコマンドリストを参照してください)。

単一 SC 構成のシステムコントローラボードを交換する場合は、*dumpconfig* コマンドによって保存した構成情報を使用して、プラットフォームおよびドメインの構成を交換用のシステムコントローラボードに復元できます。

このコマンドは、古い構成に戻すためには使用しないでください。*showplatform*、*showdomain*、*showcomponent*、*showboards* システムコントローラコマンドを使用すると、すべての構成を表示して参照できます。



注意 – *-t* オプションを使用すると、*dumpconfig* コマンドによって、すべてのデータが *.nvci* および *.tod* ファイルに (暗号化されていない) プレーンテキスト形式で格納されます。パスワードおよび SSH 非公開ホスト鍵のような機密情報を参照できるようになるので、セキュリティ上の危険が発生します。

関連項目

`restoreconfig`

例

コード例 3-14 `dumpconfig` コマンドの例

```
schostname:SC> dumpconfig -f ftp://hostname/path  
Enter Password:  
Enter Password Again:  
Created: ftp://hostname/path/hostname.nvci  
Created: ftp://hostname/path/hostname.tod
```

enablecomponent

enablecomponent コマンドは、リリース 5.15.0 以降は使用しないでください。このコマンドの代わりに setls コマンドを使用できます。enablecomponent コマンドは現在も使用できますが、setls コマンドを使用することをお勧めします。詳細は、setls コマンドの説明を参照してください。

flashupdate

システムコントローラおよびシステムボード (CPU/メモリーボードおよび I/O アセンブリ) のファームウェアを更新します。サーバーまたは同じ種類の別のボードを、フラッシュイメージのソースとして使用できます。

適用範囲

プラットフォームシェル

構文

```
flashupdate [-y|-n] -f url all|systemboards|scapp|rtos
```

```
flashupdate [-y|-n] -f url board [board ...]
```

```
flashupdate [-y|-n] -u
```

```
flashupdate [-y|-n] -c source_board destination_board [destination_board ...]
```

```
flashupdate -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-y を指定すると、確認のプロンプトが表示されません。

-n を指定すると、確認が必要な場合にはコマンドが実行されません。

-f にはフラッシュイメージのソースとして、URL を指定します。

url は、フラッシュイメージを含むディレクトリの URL です。

指定できる値は、次のとおりです。

```
ftp://hostname/path
```

```
ftp://userid:password@hostname/path
```

```
http://hostname/path
```

FTP URL の詳細は、8 ページの「FTP URL の使用」を参照してください。

注 - *hostname* には、ホスト名または完全指定のドメイン名を入力してください。省略したドメイン名は使用できません。たとえば、*schostname*、*schostname.eng.sun.com* のように入力します。

board は、ボード名です。

-c を指定すると、イメージが別のボードからコピーされます。

- *source_board* は、フラッシュイメージのソースボード
- *destination_board* は、フラッシュイメージの宛先ボード

-u を指定すると、すべてのボードが最新バージョンのボードから自動的に更新されます。

all を指定すると、システムコントローラ、すべてのシステムボード (CPU/メモリーボードと I/O アセンブリ)、およびシステムコントローラのリアルタイムオペレーティングシステム (rtos) が更新されます。

system_boards を指定すると、すべての CPU/メモリーボードおよび I/O アセンブリが更新されます。

scapp を指定すると、現在のシステムコントローラが更新されます。システムコントローラを更新すると、システムコントローラが再起動され、現在のすべての接続が切り離されます。2 つ目のシステムコントローラボードが取り付けられている場合は、*scapp* を実行するときに、2 つ目のシステムコントローラボードの *scapp* も更新します。

rtos を指定すると、システムコントローラのリアルタイムオペレーティングシステムが更新されます。2 つ目のシステムコントローラボードが取り付けられている場合は、リアルタイムオペレーティングシステムを更新するときに、2 つ目のシステムコントローラボードの *rtos* も更新します。

説明



注意 - ファームウェアをアップグレードするときは、常に *Install.info* ファイルで、ファームウェアのアップグレード手順を確認します。このファイルは、ソフトウェアの最新リリースで提供されます。また、注意事項や特定の手順については、リリースノートを参照してください。システムコントローラのファームウェアを更新する場合は、一度に 1 つのシステムコントローラだけを更新します。同時に両方のシステムコントローラを更新しないでください。

システムコントローラ、CPU/メモリーボード、および I/O アセンブリのファームウェアを更新します。リピータボードにはファームウェアはありません。`flashupdate` を使用してボードを更新するには、ボードの電源が投入されている必要があります。ボードの電源が入っていない場合、`flashupdate` コマンドは何も実行せずに、エラーメッセージを表示して停止します。セキュリティー保護されたドメインのボードは更新できません。

システムに交換用のボードを取り付ける場合は、次の作業を行います。

1. 交換用のボードのファームウェアレベルが、交換するボードと同一であることを確認します。互換性がないボードは、`showboards` コマンドの出力で、ボード状態が `Failed` になります。
2. ボードレベルが、交換したボードと同一でない場合は、ボード上で `flashupdate` 手順を実行します。
3. `showboards` の出力でボードが `Failed` 状態だった場合は、互換バージョンの `flashupdate` を実行したあとで、ボードの電源を切り、`Failed` 状態を解除します。

フラッシュイメージを更新する前に、交換用ボードのファームウェアが、`scapp`、CPU/メモリーボード、および I/O アセンブリ PROM 用に交換するボードのファームウェアと互換性があることを確認します。ドメインの再起動またはドメインのキースイッチを `setkeyswitch off` コマンドで `off` に、または `setkeyswitch on` コマンドで `on` にすると、新しいファームウェアが読み込まれます。

- 現在のファームウェアのバージョン番号を確認するには、`showboards -p version` コマンドを使用します。
新しいファームウェアには、新しい `rtos` イメージが含まれる場合があります。現在インストールされている `rtos` イメージが、ソフトウェアで提供されている `rtos` と異なる場合は、`rtos` イメージをアップグレードする必要があります。
- 現在の `rtos` のバージョン番号を確認するには、`showsc` または `showboards -v -p version` コマンドを使用します。README ファイルにも、新しい `rtos` イメージのバージョン番号が記載されています。

注 - すべてのバージョンを確認していないと、ドメインに障害が発生するか、あるいはシステムコントローラが正常に再起動しなくなる可能性があります。



注意 – ファームウェアをアップグレードする際は、次のことに注意してください。

- ファームウェアをアップグレードする前に、README ファイルおよび Install.info ファイルを読んでください。
 - ドメインのキースイッチの位置を変更しないでください。
 - DR を使用しないでください。
 - ボードの電源を切らないでください。
 - システムコントローラを再起動しないでください。
-

状態の scapp イメージまたは rtos イメージをアップグレードする場合は、次の作業を行います。

1. flashupdate 手順中は、コンソールの監視が重要です。
2. エラーが報告された場合は、コンソールを監視します。

すでにインストールされているイメージが、新しいイメージと互換性がない場合は、次の作業を行います。

1. ファームウェアをアップグレードする前に、ドメインを停止します。
2. ファームウェアのアップグレードを実行したあとで、ドメインを再起動します。

すでにインストールされているイメージが、新しいイメージと互換性がある場合は、次の作業を行います。

1. flashupdate 手順を実行したあとで、ドメインを再起動します。ファームウェアが古いファームウェアのバージョンと互換性がある場合でも、新しい機能を取得して、バグを修正するために、ファームウェアをアップグレードする必要があります。

システムに交換用のボードを取り付ける場合は、次の作業を行います。

1. 交換用のボードのファームウェアレベルが、交換するボードと同一であることを確認します。
2. 同一でない場合は、ボードに対し flashupdate 手順を実行します。



注意 – 通常の状態では、flashupdate は正常に実行できます。ただし、flashupdate コマンドが停電、ネットワーク接続の障害などで異常終了した場合には、システムコントローラはインストールするイメージの URL を指定するためのプロンプトを表示します。

関連項目

『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』

flashupdate コマンドの例 — プラットフォームシェル

注 – 次の例では、出力が非常に長くなるため、入力するコマンドだけを示します。

注 – flashupdate all、flashupdate rtos、flashupdate scapp コマンドを使用すると、システムコントローラが一度再起動されます。

- 動作中のシステムコントローラボード、すべてのシステムボード、およびシステムコントローラのリアルタイムオペレーティングシステム (rtos) を更新するには、プラットフォームコンソールからこの手順を実行し、コンソール出力を監視します。これによって、システムコントローラが再起動されます。次のように入力します。

コード例 3-15 動作中のシステムコントローラボードおよびシステムコントローラのリアルタイムオペレーティングシステムを更新する flashupdate コマンドの例

```
schostname:SC> flashupdate -f ftp://host/path all
```

- CPU/メモリーボード sb0 (source_board) の交換用 CPU/メモリーボードである sb4 (destination_board) のファームウェアをアップグレードするには、次のように入力します。

コード例 3-16 交換用 CPU/メモリーボード sb4 を更新する flashupdate コマンドの例

```
schostname:SC> flashupdate -c sb0 sb4
```

help

コマンドの基本的なヘルプ情報を表示します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

構文

```
help [command_name] | [partial_command_name]
```

```
help -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

command_name は、コマンドの名前です。

partial_command_name には、コマンドの先頭文字またはコマンド名の一部 (show など) を指定できます。

説明

引数を指定せずに `help` コマンドを実行すると、現在使用できるコマンドの一覧が表示されます。引数を指定して `help` コマンドを実行すると、指定した引数で始まるコマンドの一覧が表示されます。該当するコマンドが 1 つしかない場合は、完全なヘルプが表示されます。それ以外の場合は、指定した引数で始まる各コマンドの簡略な説明が表示されます。

省略したコマンド名を入力すると、省略名と一致するすべてのコマンドの基本的なヘルプ情報が表示されます。省略コマンド名には、`help` コマンドが認識できる十分な長さのコマンド名を含める必要があります。`help` コマンドを入力すると、入力した文字で始まるすべてのコマンドのヘルプ情報が戻されます。

`help` コマンドはシェルを区別します。現在のシェルに関する情報だけが表示されません。

例

コード例 3-17 は、addboard コマンドのヘルプ情報を表示しています。

コード例 3-17 addboard コマンドの情報を表示する help コマンドの例

```
schostname:SC> help addboard

addboard -- assign a board to a domain

Usage: addboard -d <domain> <board> ...
       addboard -h

       -d -- the domain to assign the board to
       -h -- display this help message
```

コード例 3-18 は、プラットフォームシェルの show で始まるすべてのコマンドを表示しています。

コード例 3-18 show で始まるコマンドを表示する help コマンドの例

```
schostname:SC> help show

showboards      -- show board information
showcodlicense  -- show COD licenses
showcodusage    -- show COD resource usage
showcomponent   -- show state of a component
showdate        -- show the current date and time for the platform
showenvironment -- show environmental information
showerrorbuffer -- show the contents of the error buffer
showescape      -- show system controller escape sequence
showfailover    -- show SC Failover information
showfru         -- show FRUID information
showkeyswitch   -- show the keyswitch positions
showlogs        -- show the logs
showplatform    -- show platform configuration, information and domain status
showsc          -- show system controller version and uptime
```

コード例 3-19 は、プラットフォームシェルの a で始まるすべてのコマンドを表示しています。

コード例 3-19 a で始まるコマンドを表示する help コマンドの例

```
schostname:SC> help a

addboard      -- assign a board to a domain
addcodlicense -- add a cod license
```

history

コマンド履歴を、日付およびタイムスタンプとともに表示します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

構文

```
history [-h]
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

説明

コマンド履歴を、そのコマンドが実行された日付およびタイムスタンプとともに表示します。このコマンドでは、使用しているシェルについて、最新の 20 個のコマンドだけが表示されます。

関連項目

コマンド行編集を使用して、コマンド履歴を編集できます。コマンド行編集の詳細は、10 ページの「コマンド行の編集」を参照してください。

例

コード例 3-20 history コマンド

```
schostname:SC> history  
May 07 16:29:21 : showboards  
May 07 16:29:24 : showdate  
May 07 16:29:29 : history
```


password

プラットフォームまたはドメインのパスワードを設定します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

プラットフォームシェルの構文

```
password [-d domainID]
```

```
password -h
```

ドメインシェルの構文

```
password
```

```
password [-h]
```

オプション / パラメタ

-d *domainID* には、ドメイン (a、b、c、または d) を指定します。

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

説明

プラットフォームまたはドメインのパスワードを設定します。各ドメインおよびプラットフォームには、個別のパスワードがあります。パスワードを設定すると、シェルまたはコンソールへのアクセスでパスワードの入力が必要になります。

注 – ファームウェアリリース 5.13.0 以降の冗長 SC 構成では、メインシステムコントローラのプラットフォームシェルのパスワードが、スペアシステムコントローラのパスワードにもなります。

ドメインが使用されていない場合でも、プラットフォームおよび各ドメインにパスワードを設定することは重要です。これによって、認可されていないドメインが作成されて起動されることを防止できます。

パスワードを変更すると、そのパスワードを認可する前に現在のパスワードが認証されます。変更されたパスワードは、即時有効になります。それ以降は、古いパスワードは受け付けられません。

パスワードを削除するには、Enter new password および Enter new password again のプロンプトで Return キーを押します。

OpenBoot PROM のパスワードは、プラットフォームおよびドメインのパスワードとは異なります。各ドメインの OpenBoot PROM は、OpenBoot PROM ソフトウェアの標準機能である OpenBoot PROM セキュリティーモードをサポートします。OpenBoot PROM セキュリティーモードのパスワードの詳細は、OpenBoot PROM のマニュアルを参照してください。

関連項目

『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「セキュリティーに関するガイドライン」を参照してください。

例

コード例 3-21 に、パスワードがすでに設定されている場合に、プラットフォームシェルまたはドメインシェルで password コマンドを入力したときの例を示します。

コード例 3-21 パスワードが設定されている場合の password コマンドの例

```
schostname: SC> password
Enter current password:
Enter new password:
Enter new password again:
schostname: SC>
```

使用しているシェルに現在パスワードが割り当てられていない場合、現在のパスワードを入力するためのプロンプトは表示されません (コード例 3-22)。

コード例 3-22 パスワードが設定されていない場合の password コマンドの例

```
schostname: SC> password
Enter new password:
Enter new password again:
schostname: SC>
```

poweroff

コンポーネントの電源を切断します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

プラットフォームシェルの構文

```
poweroff [-y|-n] all|grid#|component_name [component_name ... ]  
poweroff -h
```

ドメインシェルの構文

```
poweroff [-y|-n] all|component_name [component_name ... ]  
poweroff -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-y を指定すると、すべての質問に **yes** と応答します。このオプションは、危険を伴います。-y オプションを指定すると、コンポーネントの電源を強制的に切断できます。

-n を指定すると、すべての質問に **no** と応答します。-n オプションを指定すると、コンポーネントの電源は強制的に切断できません。

component_name は、コンポーネント名です。

プラットフォームシェルの *component_name* では、次のものを指定できます。

- all。現在制御できるすべてのコンポーネントの電源が切断されます。
- 電源グリッド (grid0、grid1)。Sun Fire E6900 および 6800 システムには、grid0 および grid1 の 2 つの電源グリッドがあります。grid1 は、電源装置 ps3、ps4、および ps5 を制御します。ほかのすべてのミッドレンジシステムには、1 つの電源グリッド (grid0) があります。このグリッドは、電源装置 ps0、ps1、および ps2 を制御します。
- 電源装置 (ps0 ~ ps5)
- スペアシステムコントローラ (ssc0 または ssc1)
- CPU/メモリーボード (sb0 ~ sb5)

- I/O アセンブリ (ib6 ~ ib9)
- リピータボード (rp0 ~ rp3)
- ファントレイ (ft0 ~ ft3)

ドメインシェルの *component_name* では、次のものを指定できます。

- CPU/メモリーボード (sb0 ~ sb5)
- I/O アセンブリ (ib6 ~ ib9)

注 – 指定されたボードは、現在のドメイン内にある必要があります。

説明

1 つまたは一連のコンポーネントの電源を切断します。

ドメインシェルの場合、指定されたボードは現在のドメインにある必要があります。

メインシステムコントローラおよび ID ボード (ID0) を除く、`showboards` で一覧表示されたすべてのスロットの電源を切断できます。電源が切断されたコンポーネントは監視されません。各ボードの電源状態を表示するには、`showboards` コマンドを使用します。

`showboards` コマンドを使用してボード状態を表示し、ボード状態が動作中 (Active) でなければ、すべてのコンポーネントの電源を切断できます。コンポーネントが動作中 (Active) である場合は、ドメイン全体の停止を警告するメッセージがコンソールに表示され、確認を求められます。

ボードがドメイン内で動作中で、装置 (ボード) の電源を強制的に切断する場合は、ドメインのキースイッチを `standby` に設定します。キースイッチの設定を変更するには、`setkeyswitch` コマンドを使用します。

メイン SC から `poweroff` コマンドを実行して、スペア SC の電源を切断できます。スペア SC の電源が切断されると、ホットプラグ LED が点灯します。

リピータボードは、動作中 (Active) 状態にはなりません。リピータボードがドメイン内で使用されている場合は、電源を切断することはできません。

電源を切断しても電源グリッドに現在の負荷に対応できる電力が十分残っている場合には、電源装置の電源を切断できます。この状況は構成によって異なります。現在の負荷に対応するために必要な電源装置の電源を切断しようとする、電源装置の電源は切断されず、理由を示すメッセージが表示されます。冗長電源装置の電源は切断できません。

ファンの電源を切断すると十分に冷却できなくなる場合、ファンの電源は切断できません。

関連項目

poweron、setkeyswitch、showboards

例

プラットフォームシェルから CPU/メモリーボード、sb2 の電源を切断するには、次のように入力します (コード例 3-23)。

コード例 3-23 sb2 の電源を切断する poweroff コマンドの例

```
schostname:SC> poweroff sb2
```

すべての電源装置、ファントレー、およびシステムボードの電源を切断するには、次のように入力します (コード例 3-24)。

コード例 3-24 プラットフォームシェルのすべての電源装置、ファントレー、およびシステムボードの電源を切断する poweroff コマンドの例

```
schostname:SC> poweroff all
```

注 - ドメインシェルからは、電源装置、ファントレー、リピータボード、または電源グリッドの電源を切断することはできません。これらのコンポーネントの電源を切断するには、プラットフォームシェルに接続します。

poweron

コンポーネントの電源を投入します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

プラットフォームシェルの構文

```
poweron all|grid#|component_name [component_name ... ]
```

```
poweron -h
```

ドメインシェルの構文

```
poweron all|component_name [component_name ... ]
```

```
poweron -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

プラットフォームシェルの *component_name* では、次のものを指定できます。

- a11。すべての電源装置およびボードの電源が投入されます。
- 電源グリッド (grid0、grid1)。Sun Fire E6900 および 6800 システムには、grid0 および grid1 の 2 つの電源グリッドがあります。grid1 は、電源装置 ps3、ps4、および ps5 を制御します。その他のすべてのミッドレンジシステムには、1 つの電源グリッド (grid0) があります。このグリッドは、電源装置 ps0、ps1、および ps2 を制御します。
- 電源装置 (ps0 ~ ps5)
- スペアシステムコントローラ (ssc0 または ssc1)
- CPU/メモリーボード (sb0 ~ sb5)
- I/O アセンブリ (ib6 ~ ib9)
- リピータボード (rp0 ~ rp3)
- ファントレー (ft0 ~ ft3)

ドメインシェルの *component_names* では、次のものを指定できます。

- a11。ドメイン内のすべての CPU/メモリーボードおよび I/O アセンブリの電源が投入されます。
- CPU/メモリーボード (sb0 ~ sb5)

■ I/O アセンブリ (ib6 ~ ib9)

指定されたボードは、現在のドメイン内にある必要があります。

説明

1 つまたは一連のコンポーネントの電源を投入します。 *component_name* を指定する必要があります。

ドメインからは、ドメインに割り当てられているコンポーネントにかぎり、電源を投入できます。コンポーネントの電源を投入するには、電源グリッドの電源も入れておく必要があります。

電源装置の電源が投入されると、ファントレイの電源も自動的に投入されます。ファントレイは、電源グリッドから電源を取得します。

スペアシステムコントローラの電源が切断されている場合は、メインシステムコントローラから `poweron` コマンドを実行してスペアシステムコントローラに電源を投入できます。システムに電源が投入された場合、または電源が投入されているシステムにスペアシステムコントローラを挿入した場合には、スペアシステムコントローラの電源は自動的に投入されます。スペアシステムコントローラの電源が投入されているときには、ホットプラグ LED は点灯しません。

関連項目

`poweroff`、`setkeyswitch`、`showboards`

例

プラットフォームシェルから CPU/メモリーボード、`sb2` の電源を投入するには、次のように入力します (コード例 3-25)。

コード例 3-25 `sb2` の電源を投入する `poweron` コマンドの例

```
schostname:SC> poweron sb2
```

ドメイン内の CPU/メモリーボードおよび I/O アセンブリの電源を投入するには、次のように入力します (コード例 3-26)。

コード例 3-26 ドメイン A のすべての CPU/メモリーボードおよび I/O アセンブリの電源を投入する `poweron` コマンドの例

```
schostname:A> poweron all
```

注 - ドメインシェルからは、電源装置、リピータボード、ファントレイ、または電源グリッドの電源を投入できません。これらのコンポーネントの電源を投入するには、プラットフォームシェルを使用します。

reboot

システムコントローラを再起動します。

適用範囲

プラットフォームシェル

構文

```
reboot [-y|-n]
```

```
reboot -h
```

オプション / パラメタ

-y を指定すると、確認のプロンプトが表示されません。

-n を指定すると、確認が必要な場合にはコマンドが実行されません。

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

説明

システムコントローラを再起動します。reboot コマンドを実行しても、構成の設定は変更されません。動作中のドメインは実行を継続します。

キースイッチの操作中にシステムコントローラを再起動すると、キースイッチが **off** に設定される場合があります。



注意 – システムコントローラの再起動は、Solaris オペレーティングシステムの再起動、ボードや SNMP のテストなど、すべての動作に影響します。

例

システムコントローラを再起動するには、次のように入力します (コード例 3-27)。

コード例 3-27 `reboot` コマンドの例

```
schostname:SC> reboot  
Are you sure you want to reboot the System Controller now? [no]
```

reset

ドメインをリセットします。

適用範囲

ドメインシェル

構文

```
reset [-y|-n] [-x|-a]
```

```
reset -h
```

オプション / パラメタ

引数を指定せずに `reset` を入力すると、`reset -x` と同じ意味になります。

`-y` を指定すると、質問に `yes` と応答します (コマンドを実行する)。

`-n` を指定すると、質問に `no` と応答します (コマンドを実行しない)。

`-h` を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

`-x` を指定すると、XIR (外部強制リセット) を介してリセットされます。XIR は、診断データを取得するために使用されます (デフォルト)。

`-a` を指定すると、OpenBoot PROM の `reset-all` コマンドと同じ処理を実行します。

説明

このコマンドは、ドメインコンソールを再開します。キースイッチが `secure` の位置に設定されていると、ドメインのリセットは許可されません。また、`off` または `standby` の位置に設定されていると、ドメインはリセットできません。ドメインをリセットする前に、キースイッチの位置を `on` に変更してください。

デフォルトでは、`reset` を実行すると、XIR によってドメイン内の CPU がリセットされます。XIR によって、ドメインの制御が強制的に OpenBoot PROM に移り、OpenBoot PROM のエラーリセット回復処理が開始されます。エラーリセット回復処理では、Solaris オペレーティング環境のコアファイルなど、ハードウェアおよびソフトウェアのデバッグに必要なデータを収集できるように、ほとんどのドメイン状態が保持されます。OpenBoot PROM のエラーリセット回復処理は、OpenBoot PROM の構成パラメタ `error-reset-recovery` を設定することによって制御できます。

このドメインのパラメタの定義および設定できる値については、`setupdomain` コマンドの項の表 3-8 を参照してください。

システムコントローラコマンドとは異なり、`OpenBoot PROM reset` コマンドでは、コアファイルが生成されません。

一時停止しているドメインは、リセットできません。ドメインは、ハードウェアがエラーを検出すると自動的に一時停止されます。ドメインコンソールに表示されるメッセージによって、ドメインの一時停止が通知されます。

ドメインの一時停止状態を解除するには、次の操作を行います。

1. `setkeyswitch off` コマンドを使用して、キースイッチを `off` にします。
2. `setkeyswitch on` コマンドを使用して、キースイッチを `on` にします。

関連項目

`resume`、`setkeyswitch`、`setupdomain`、`showdomain`、`showkeyswitch`、`showresetstate`、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「障害追跡」の章にある「応答しないドメイン」を参照してください。この節では、ハングアップしたドメインまたはハードハングアップしたドメインから回復する手順について説明しています。

例

ドメインシェルからドメインをリセットするには、次のように入力します (コード例 3-28)。このコマンドは、診断データを取得するために `XIR` を使用します。

コード例 3-28 ドメイン A からの `reset` コマンドの例

```
schostname:A> reset
```

`OpenBoot PROM` の `reset-all` コマンドと同じ処理を実行するには、次のように入力します (コード例 3-29)。

コード例 3-29 ドメイン A からの `reset -a` コマンドの例

```
schostname:A> reset -a
```

restartssh

SSH サーバーを再起動します。

適用範囲

プラットフォームシェル

構文

```
restartssh [-h]
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-y を指定すると、情報メッセージに **yes** と応答します。これを指定した場合は、確認のプロンプトが表示されません。

-n を指定すると、情報メッセージに **no** と応答します。これを指定した場合は、確認が必要な場合にはコマンドが実行されません。

説明

このコマンドを実行するには、`setupplatform` コマンドを使用して SSH を使用可能にする必要があります。

`ssh-keygen` を使用して新しいホスト鍵を生成した場合は、新しいホスト鍵が有効になる前に SSH サーバーを再起動する必要があります。サーバーを再起動すると、鍵はメモリーに読み込まれ、SSH サーバー専用のメモリー構造に格納されます。

SSH サーバーを再起動するときには、すべての SSH 接続を切断します。このコマンドを実行すると情報メッセージが送信され、実際に SSH サーバーを再起動する前に確認が要求されます。-y または -n スイッチを指定すると、確認を省略できます。

SSH 接続を介してコマンドを実行した場合、SSH サーバーを再起動すると接続が切断されます。この処理には数秒しかかからないため、ただちに SSH 接続を再確立できます。

関連項目

ssh-keygen

restoreconfig

サーバーからプラットフォームおよびドメインの構成を復元します。

適用範囲

プラットフォームシェル

構文

```
restoreconfig [-y|-n] -f url
```

```
restoreconfig -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-y を指定すると、確認のプロンプトが表示されません。

-n を指定すると、確認が必要な場合にはコマンドが実行されません。

-f には、URL を指定します (FTP プロトコルを使用する必要があります)。

url は、データファイルを含むディレクトリの URL です。URL は、ファイルではなくディレクトリを指す必要があります。次に例を示します。

```
ftp://userid:password@hostname/path
```

```
ftp://hostname/path
```

```
ftp://IPaddress/path
```

FTP URL の詳細は、8 ページの「FTP URL の使用」を参照してください。

注 - *hostname* には、*hostname*、*hostname.eng.sun.com* などの、ホスト名または完全指定のドメイン名を入力してください。省略したドメイン名は使用できません。

説明

`dumpconfig` コマンドで作成された 2 つのデータファイル (`schostname.nvci` および `schostname.tod`) を使用して、サーバーからプラットフォームおよびドメインの構成を復元します。これらのファイルが存在する URL は、ディレクトリを指すように指定し、FTP プロトコルを使用する必要があります。デフォルトでは、構成データは暗号化形式で保存されます。暗号化されたデータを復元するために、ダンプファイルの作成時に構成データを暗号化するために使用したパスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。



注意 – `dumpconfig` コマンドは、システムの設定時に実行する必要があります。また、このコマンドは、単一 SC 構成で障害が発生したシステムコントローラを交換する作業でも使用します。`dumpconfig` の一般的な使用方法については、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「システムの電源投入および設定」の章にある「`dumpconfig` を使用してプラットフォーム構成およびドメイン構成を保存する」を参照してください。

このコマンドを実行するには、`setkeyswitch off` コマンドを使用して、すべてのドメインの電源を切断する必要があります。構成が復元されると、メインおよびスベアシステムコントローラは自動的に再起動されます。日付と時間は、構成が復元され、システムコントローラが再起動されたあとで設定する必要があります。また、`setkeyswitch on` コマンドを使用して、すべてのドメインを起動します。このコマンドによって、キースイッチが `off` の位置にあるドメインがすべて復元されます。

注 – 必要な構成を確実に復元するために、すべてのドメインを起動する前に、プラットフォームおよびドメインの構成を確認してください。プラットフォームシェルでは、`showplatform`、`showboards`、および `showdate` を使用します。各ドメインシェルでは、`showdomain`、`showboards`、および `showdate` を使用します。

関連項目

`dumpconfig`、`setkeyswitch`、`setdate`、`showboards`、`showdate`、`showdomain`、`showplatform`

例

コード例 3-30 に、必須の `-f` オプションを指定した `restoreconfig` コマンドの例を示します。

コード例 3-30 `restoreconfig` コマンドの例

```
schostname:SC> restoreconfig -f ftp://hostname/path
Enter Password:
Enter Password Again:

This will restore all the platform and domain configurations and passwords.
The system controller will be rebooted when the restore is complete.
The date will need to be set in the platform and each domain.

Do you want to restore the system controller configuration now? [no] y

Retrieving: ftp://hostname/path/schostname.nvci
Verifying data.
Retrieving: ftp://hostname/path/schostname.tod
Verifying data.
Nvci has been restored.
Tod has been restored.
Enter new password:
Enter new password again:
May 19 11:25:14 hostname Platform.SC: Stopping all services on this SC
Restore complete. The system controller is being rebooted.
The date will need to be set in the platform and each domain.

Rebooting. All telnet connections closed. Reestablish any needed connections.
May 19 11:25:14 hostname Platform.SC: All services on this SC have been stopped.

Software Reset . . .
```


resume

ドメインシェルを終了し、ドメインコンソールへのアクセスを再開します。

適用範囲

ドメインシェル

構文

```
resume [-h]
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

説明

ドメインシェルを終了し、ドメインコンソールへのアクセスを再開します。このコマンドを実行するには、ドメインが動作している必要があります。ドメインが動作中ではない場合は、ドメインコンソールがなく、何も再開されません。ドメインコンソールに接続すると、出力が表示されない場合があります。OpenBoot PROM または Solaris オペレーティング環境のいずれかがドメインで動作している場合は、Return キーを押して、プロンプトを表示させます。Return キーを押さないと、POST 出力が表示されず (POST 出力の表示が遅れる場合があります)。

ドメインコンソールを再開するほかのシステムコントローラは、次の節で示します。

関連項目

break、reset、setkeyswitch

例

コード例 3-31 動作中ドメイン A の resume コマンドの例

```
schostname:A> resume
```

ほかの出力は表示されません。OpenBoot PROM が ok プロンプト状態の場合、または Solaris オペレーティング環境が login: プロンプト状態の場合には、Enter キーを押してプロンプトを表示させる必要があります。Enter キーを押さないと、POST、OpenBoot PROM、または Solaris オペレーティング環境によって出力が生成されるまで、プロンプトは表示されません。

ドメインがハングアップしている場合は、出力は表示されません。ただし、ドメインが出力を表示していなくても、ハングアップしているとはかぎりません。

setdate

日付および時間を設定します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

構文

```
setdate [-v] [-t time zone] [mmdd]HHMM
```

```
setdate [-v] [-t time zone] mmddHHMM [[cc]yy][.SS]
```

```
setdate [-v] [-r datehost]
```

```
setdate [-v] -t time zone
```

```
setdate [-v] -t GMT<+|-> GMT からのオフセット (表 3-3)
```

```
setdate -h
```

オプション / パラメタ

-t *time zone* を指定すると、タイムゾーンの簡略表現を使用してタイムゾーンが設定されます (表 3-3 を参照)。夏時間ではないタイムゾーンだけが指定できます。夏時間のある地域の場合は、夏時間が自動的に調整され、時刻およびタイムゾーンが設定されます。

-t GMT<+|-> はグリニッジ標準時 (GMT) からのオフセット (表 3-3) です。

mm は月です。

dd は日です。

HH は時間 (24 時間式) です。

MM は分です。

cc は世紀 -1 です。

yy は西暦の下 2 桁です。

SS は秒数です。世紀 -1 の値には、20 (21 (世紀) -1) を使用します。

-r *datehost* を指定すると、*rdate* を使用して現在の時刻が設定されます。ホスト名は、*rdate* 要求をサポートする有効なシステムである必要があります。*hostname* には、*schostname*、*schostname.eng.sun.com* などの、ホスト名または完全指定のドメイン名を入力してください。省略したドメイン名は使用できません。

-v を指定すると、冗長モードになります。設定したタイムゾーンの詳細情報が表示されます。

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

表 3-3 タイムゾーンの簡略表現、タイムゾーン名、およびグリニッジ標準時からのオフセット

タイムゾーンの簡略表現	タイムゾーン名	グリニッジ標準時 (GMT) からのオフセット
ACT	オーストラリア中部標準時間	GMT+9.5
AET	オーストラリア東部標準時間	GMT+10
AGT	アルゼンチン標準時間	GMT-3
ART	アラブ (エジプト) 標準時間	GMT+2
AST	アラスカ標準時間	GMT-9
BET	ブラジル東部時間	GMT-3
BST	バングラデシュ標準時間	GMT+6
CAT	中央アフリカ時間	GMT+2
CNT	カナダニューファンドランド時間	GMT-3.5
CST	中部標準時	GMT-6
CTT	中国台湾時間	GMT+8
EAT	東アフリカ時間	GMT+3
ECT	ヨーロッパ中央時間	GMT+1
EET	東ヨーロッパ時間	GMT+2
EST	東部標準時	GMT-5
HST	ハワイ標準時間	GMT-10
IET	インディアナ東部標準時間	GMT-5
IST	インド標準時間	GMT+5.5
JST	日本標準時間	GMT+9
MET	中東時間	GMT+3.5
MIT	ミッドウェイ諸島時間	GMT-11
MST	山地標準時	GMT-7

表 3-3 タイムゾーンの簡略表現、タイムゾーン名、およびグリニッジ標準時からのオフセット (続き)

タイムゾーンの簡略表現	タイムゾーン名	グリニッジ標準時 (GMT) からのオフセット
NET	近東時間	GMT+4
NST	ニュージーランド標準時間	GMT+12
PLT	パキスタン / ラホール時間	GMT+5
PNT	フェニックス標準時間	GMT-7
PRT	プエルトリコおよび米領バージン諸島時間	GMT-4
PST	太平洋標準時	GMT-8
SST	ソロモン諸島標準時間	GMT+11
UTC	協定世界時	GMT+0
VST	ベトナム標準時間	GMT+7

説明

プラットフォームおよびドメインの日付と時刻を設定します。このコマンドをプラットフォームから実行した場合は、各ドメインの日付および時刻は影響を受けません。またドメインから実行した場合は、プラットフォームの日付および時刻に影響を及ぼしません。最大で 5 つの異なる時刻およびタイムゾーン (プラットフォームに対して 1 つの時刻とタイムゾーン、および 4 つのドメインに対して個別の時刻とタイムゾーン) を設定できます。

タイムゾーン地域で夏時間が使用されている場合、これは自動的に設定されます。

注 – Solaris オペレーティング環境が動作している間は、ドメインのシステムコントローラから日付の設定はできません。**Solaris** オペレーティング環境の動作中に日付を設定するには、**Solaris** オペレーティング環境の `date` コマンドを使用します。

日付と時刻を設定したあとは、SNTP サーバーを使用して日付と時刻の同期をとることができます。詳細は、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』を参照してください。

関連項目

`showdate`、`setupplatform`

例

プラットフォームから `setdate` コマンドを入力すると、プラットフォームに対して日付と時刻が設定されます。ドメインから `setdate` コマンドを入力すると、ドメインに対して日付と時刻が設定されます。

プラットフォームの日付および時刻を 2001 年 4 月 20 日 木曜日 18 時 15 分 10 秒に設定するには、次のように入力します

コード例 3-32 プラットフォームシェルの `setdate` コマンドの例

```
schostname:SC> setdate 042018152001.10  
Thu Apr 20 18:15:10 PST 2001
```

日付ホストから日付を設定するには、次のように入力します。

コード例 3-33 日付ホストから日付を設定する `setdate -r` コマンドの例

```
schostname:SC> setdate -r datehost  
Thu Apr 20 18:15:10 PST 2001
```

グリニッジ標準時 (GMT) からのオフセットを使用してタイムゾーンを太平洋標準時 (PST) に設定し、プラットフォームの日付および時刻を 2001 年 4 月 20 日 木曜日 18 時 15 分 10 秒に設定するには、次のように入力します (表 3-3)。

コード例 3-34 グリニッジ標準時からのオフセットを使用してタイムゾーンを太平洋標準時に設定する `setdate -t` コマンドの例

```
schostname:SC> setdate -t GMT-8 042018152001.10  
Thu Apr 20 18:15:10 PST 2001
```

タイムゾーンの簡略表現を使用してタイムゾーンを東部標準時 (EST) に設定し、プラットフォームの日付および時刻を 2001 年 4 月 20 日 木曜日 18 時 15 分 10 秒に設定するには、次のように入力します (表 3-3)。

コード例 3-35 タイムゾーンの簡略表現を使用して日付およびタイムゾーンを東部標準時に設定する `setdate -t` コマンドの例

```
schostname:SC> setdate -t EST 042018152001.10  
Thu Apr 20 18:15:10 EST 2001
```

グリニッジ標準時 (GMT) からのオフセット (表 3-3) を使用してタイムゾーンを日本標準時間に設定し、日付および時刻を設定しない場合は、次のように入力します。

コード例 3-36 グリニッジ標準時からのオフセットを使用してタイムゾーンを日本標準時間に設定する `setdate -t` コマンドの例

```
schostname:SC> setdate -t GMT+9  
Thu Apr 20 18:15:10 GMP+9 2001
```

タイムゾーンの簡略表現 (表 3-3) を使用してタイムゾーンをヨーロッパ中央時間に設定し、日付および時刻を設定しない場合は、次のように入力します。

コード例 3-37 タイムゾーンの簡略表現を使用してタイムゾーンをヨーロッパ中央時間に設定する `setdate -t` コマンドの例

```
schostname:SC> setdate -t ECT  
Thu Apr 20 18:15:10 ECT 2001
```

setdefaults

デフォルトの構成値を設定します。



注意 – このコマンドを実行すると、これまでに設定した値が上書きまたは削除されます。注意して使用してください。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

構文

```
setdefaults [-y|-n] [-c] [-p platform]
```

```
setdefaults -h
```

オプション / パラメタ — プラットフォームシェル

-y を指定すると、確認のプロンプトが表示されません。このオプションによってプラットフォームシェルおよび各ドメインシェルにデフォルトが設定されます。

-n を指定すると、確認が必要な場合にはコマンドが実行されません。

-c を指定すると、COD ライセンスデータベースに格納されている COD 使用権 (RTU) ライセンスキーが保持されます。このオプションでは、使用可能なインスタントアクセス CPU (headroom) の数およびドメインに予約された COD RTU ライセンスの数は保持されません。

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-p platform を指定すると、プラットフォームだけのデフォルトがリセットされません。

オプション / パラメタ — ドメインシェル

-y を指定すると、確認のプロンプトが表示されません。

-n を指定すると、確認が必要な場合にはコマンドが実行されません。

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

説明



注意 – このコマンドを実行するには、すべてのドメインが動作中でなく (OpenBoot PROM、POST、または Solaris オペレーティング環境が動作していない)、ケースイッチが `off` に設定されている必要があります。

オプションを指定せずに、プラットフォームシェルからこのコマンドを実行すると、プラットフォームとドメインの値がデフォルトの値に設定されます。オプションを指定せずに、ドメインシェルからこのコマンドを実行すると、現在のドメインの値だけがデフォルトの値にリセットされます。

パスワードが設定されている場合は、デフォルトの値を設定するためにパスワードを入力する必要があります。プラットフォームシェルからこのコマンドを実行する場合は、プラットフォームシェルのパスワードが必要です。ドメインシェルからこのコマンドを実行する場合は、ドメインシェルのパスワードが必要です。プラットフォームシェルおよび各ドメインシェルのパスワードは、個別です。

さらに、このコマンドには次の機能があります。

- システムコントローラにデフォルト値を設定します。このコマンドでは、システムコントローラの設定のみをリセットします。OpenBoot PROM のドメインの構成には影響ありません。

スペアシステムコントローラボードが存在する場合は、SC フェイルオーバーが自動的に使用可能になります。スペアシステムコントローラボードが存在しない場合は、SC フェイルオーバーは使用不可です。
- `-c` オプションを指定しない場合にのみ、すべての COD RTU ライセンスが削除され、インスタントアクセス CPU (headroom) の数とドメインの COD RTU ライセンスの数がゼロ (0) にリセットされます。
- すべてのプラットフォームおよびドメイン構成を消去します (プラットフォーム)。
- パスワードを削除します (ドメインおよびプラットフォーム)。
- 接続形式を `none` にリセットします。
- SSH ホスト鍵を消去します。
- デフォルトを設定したあと、メインおよびスペアの両方のシステムコントローラを再起動します。



注意 – `setdefaults` コマンドを実行する前に、SC へのシリアル接続を確立してください。`setdefaults` コマンドの実行後は、システムコントローラへの遠隔接続が使用不可になります。遠隔接続 (SSH または Telnet) が使用不可の場合、SC のプラットフォームシェル (および `setupplatform` コマンド) には、シリアル接続を介してのみアクセスできます。

例

コード例 3-38 `setdefaults` の例

```
schostname:SC> setdefaults
```

```
You are about to reset all configuration data to default values.  
All domain configurations, ACLs, passwords, data buffers, network  
settings, and SSH host keys will be lost.
```

```
The system controller will be REBOOTED after the defaults are set.
```

```
Do you want to restore the default values and reboot now? [no]
```

- `yes` と応答すると、デフォルトに設定されたあと、システムコントローラが再起動されます。
- `no` と応答すると、デフォルト値は設定されません。
- プラットフォームシェルにパスワードが設定されている場合は、パスワードが要求されます。

setescape

ドメインコンソールの Solaris または OpenBoot PROM のプロンプトから、ドメインシェルのシステムコントローラのプロンプトに移動するために使用する文字のシーケンスを設定します。

構文

```
setescape escapechars
```

```
setescape -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

escapechars には、エスケープシーケンスを、最大 5 文字の英数字で指定します。デフォルトのシーケンスは、ハッシュ記号およびピリオド (#.) です。

説明

ドメインコンソールの Solaris または OpenBoot PROM のプロンプトから、ドメインシェルのシステムコントローラのプロンプトに移動するために使用する文字のシーケンスを設定します。

ドメインコンソールで、エスケープシーケンスの最初の文字を入力したとします。デフォルトのシーケンスは、ハッシュ記号およびピリオド (#.) です。画面上に文字が表示されるまでに 1 秒かかります。これは、システムが、エスケープシーケンスの次の文字が入力されるかどうかを確認するために 1 秒間待機するためです。次の文字が入力されると、システムはさらに次の文字に対して 1 秒間待機します。以降も同様です。エスケープシーケンスのすべての文字を入力すると、ドメインシェルのプロンプトが表示されます。一部の文字だけを入力した場合は、入力した文字が画面上に出力されます。

エスケープシーケンスの先頭文字には、コンソールから入力する頻度の低い文字を選択することをお勧めします。よく使用する文字を選択すると、キーを入力してから画面に文字が表示されるまでの遅延によって混乱を招き、入力に影響する可能性があります。

関連項目

showescape

例

エスケープ文字を ~~~.. に設定するには、次のように入力します。

```
schostname:SC>setescape ~~~..
```

注 – 混乱を避けるため、OpenSSH プロトコルで事前に定義されているエスケープシーケンスは使用しないでください。

エスケープ文字を #. (デフォルト) にリセットするには、次のように入力します。

```
schostname:SC>setescape "#."
```

注 – # は、プラットフォームシェルおよびドメインシェルのコメント文字であるため、シーケンスを引用符で囲む必要があります。

setfailover

システムコントローラ (SC) フェイルオーバーの状態を変更します。

適用範囲

プラットフォームシェル

構文

```
setfailover [-y|-n] on|off|force
```

```
setfailover -h
```

オプション / パラメタ

-y を指定すると、確認のプロンプトが表示されません。

-n を指定すると、確認が必要な場合にはコマンドが実行されません。

on を指定すると、フェイルオーバーの発生またはオペレータからの要求によってフェイルオーバーが使用不可になっていたシステムで、フェイルオーバーが使用可能になります。

off を指定すると、フェイルオーバーは使用不可になります。このオプションにより、再度使用可能に設定されるまでフェイルオーバーが停止します。

force を指定すると、強制的にスペア SC へのフェイルオーバーを実行します。

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

説明

このコマンドにより、自動または手動で SC フェイルオーバーを制御できます。このコマンドを使用してフェイルオーバーを強制的に実行した場合、手動フェイルオーバーの実行後は、SC フェイルオーバーが使用不可になることに注意してください。SC フェイルオーバーの詳細は、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「システムコントローラのフェイルオーバー」の章を参照してください。

関連項目

setupplatform、showfailover、showlogs、showplatform、showsc

例

メイン SC からスペア SC への手動フェイルオーバーを実行するには、次のように入力します。

コード例 3-39 手動フェイルオーバーを実行する setfailover コマンドの例 (スペア SC 上で実行)

```
schostname:sc> setfailover force

SC: SSC0
Spare System Controller
SC Failover: enabled and active.
Clock failover enabled.

This will abruptly interrupt operations on the other System Controller.
This System Controller will become the main System Controller.

Do you want to continue? [no] yes
Oct 26 00:10:33 schostname Platform.SC: SC Failover: becoming main SC ...
Oct 26 00:10:37 schostname Platform.SC: Chassis is in single partition mode.
Oct 26 00:10:42 schostname Platform.SC: Main System Controller
Oct 26 00:10:42 Oct 26 00:10:42 schostname Platform.SC: Added logical IP address
xxx.xxx.xxx.xxx

Oct 26 00:10:43 schostname Platform.SC: SC Failover: disabled

schostname:SC>
```

SC フェイルオーバーを使用不可にするには、次のように入力します。

コード例 3-40 フェイルオーバーを使用不可にする setfailover コマンドの例

```
schostname:SC> setfailover off
SC Failover: disabled
```

SC フェイルオーバーを再度使用可能にするには、次のように入力します。

コード例 3-41 フェイルオーバーを再度使用可能にする `setfailover` コマンドの例

```
schostname:SC> setfailover on  
SC Failover: enabled and active.
```

setkeyswitch

仮想キースイッチの位置を指定された値に変更します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

プラットフォームシェルの構文

```
setkeyswitch [-y|-n] -d domainID off
```

```
setkeyswitch -h
```

ドメインシェルの構文

```
setkeyswitch [-y|-n] [off|standby|on|diag|secure]
```

```
setkeyswitch -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-y を指定すると、確認のプロンプトが表示されません。

-n を指定すると、確認が必要な場合にはコマンドが実行されません。

-d *domainID* (プラットフォームシェルのみ) には、電源を切断するドメインのドメイン ID (a、b、c、または d) を指定します。

setkeyswitch のパラメタおよび説明については、表 3-4 を参照してください。

表 3-4 setkeyswitch による設定変更の説明

値	説明
off	ドメインに属しているすべてのボードの状態を割り当て済み (Assigned) に変更し、ボードを低電力モードにします。低電力モードでは、ボードをシステムから取り外すことができます。ドメインは、システムの電源投入時に初期化されません。
standby	ドメインに属しているすべてのボードの状態を割り当て済み (Assigned) に変更し、ボードの電源を投入します。ドメインはシステムの電源投入時に初期化されませんが、ドメインを構成するボードの電源は投入されます。
on	ドメインの電源を投入し、ドメインを初期化します。システムコントローラは、POST 後、ドメインを OpenBoot PROM モードにします。OpenBoot PROM の auto-boot? が true に設定されている場合は、Solaris オペレーティング環境が自動的に起動します。
diag	POST 冗長モードおよび POST 診断レベルが最大に設定されていることを除き、setkeyswitch on コマンドと同じです。
secure	break コマンドおよび reset コマンドが無視されることを除き、setkeyswitch on コマンドと同じです。CPU/メモリーボードおよび I/O アセンブリのフラッシュ PROM の更新は、許可されていません。

表 3-5 に、キースイッチの設定変更の結果を示します。

表 3-5 キースイッチを現在の設定から新しい設定に変更した結果

現在の設定	新しい設定	結果
off	off	キースイッチの位置は変更されません。
off	standby	すべてのボードの電源を投入します。ドメインに属しているボードは、割り当て済み (Assigned) 状態である必要があります。ドメインは、システムの電源投入時に初期化されません。
off	on	ドメインの電源を投入し、ドメインを初期化します。ドメインは、POST の実行後 OpenBoot PROM モードになります。OpenBoot PROM の auto-boot? が false に設定されていない場合は、Solaris オペレーティング環境が自動的に起動されません。
off	diag	on と同様です。ただし、POST 冗長および診断レベルは最大に設定されます。ドメインは diag-device から起動します。
off	secure	on と同様です。ただし、ドメインシェルは、reset および break コマンドを無視します。
standby	off	すべてのボードの電源が切断されます (低電力モードに設定され、ボードの監視がすべて停止します)。ドメインが停止します。

表 3-5 キースイッチを現在の設定から新しい設定に変更した結果 (続き)

現在の設定	新しい設定	結果
standby	on	仮想キースイッチを off から on に設定する場合と同様です。ただし、システムコントローラがボードの電源を投入し、準備するのを待つ必要がありません。
standby	standby	キースイッチの位置は変更されません。
standby	diag	on と同様です。ただし、POST 冗長および診断レベルは最大に設定されます。ドメインは diag-device から起動します。
standby	secure	on と同様です。ただし、ドメインシェルは、reset および break コマンドを無視します。
on	off	すべてのボードの電源が切断されます (低電力モードに設定され、ボードの監視がすべて停止します)。ドメインが停止します。
on	standby	ドメインが動作しなくなります。すべてのボードの電源は投入されたままです。
on	on	キースイッチの位置は変更されません。
on	diag	POST 冗長モードが on に設定されていることと、POST 診断レベルが最大に設定されていることを除き、setkeyswitch on コマンドと同じです。この設定の変更は、動作中のドメインには影響しません。
on	secure	break および reset は無視されます。
diag	off	すべてのボードの電源が切断されます (低電力モードに設定され、ボードの監視がすべて停止します)。ドメインが停止します。
diag	standby	ドメインが動作しなくなります。すべてのボードの電源は投入されたままです。
diag	on	動作中のドメインは影響を受けません。この操作では、キースイッチの位置だけが変更されます。ドメインはすでに実行中であるため、ほかの機能は実行されません。
diag	diag	キースイッチの位置は変更されません。
diag	secure	break および reset は無視されます。
secure	off	すべてのボードの電源が切断されます (低電力モードに設定され、ボードの監視がすべて停止します)。ドメインが停止します。
secure	standby	ドメインが動作しなくなります。すべてのボードの電源は投入されたままです。break コマンドおよび reset コマンドは無視されなくなります。

表 3-5 キースイッチを現在の設定から新しい設定に変更した結果 (続き)

現在の設定	新しい設定	結果
secure	on	break および reset は無視されません。
secure	diag	この設定の変更は、動作中のドメインには影響しません。
secure	secure	キースイッチの位置は変更されません。

説明

各ドメインには仮想キースイッチがあり、`off`、`standby`、`on`、`diag`、および `secure` の 5 つの位置に設定できます。`setkeyswitch` コマンドを実行すると、仮想キースイッチの位置が指定された値に変更されます。仮想キースイッチによって、各ドメインの物理キースイッチは必要がなくなります。

ドメインシェルにアクセスできない場合は、ドメインのキースイッチの位置を、プラットフォームシェルから `off` の位置に設定します。最初に Solaris オペレーティング環境を停止せずに、ドメインのキースイッチの位置を `off` に設定すると、問題が発生する場合があります。ドメインが Solaris オペレーティング環境を実行している場合に、`setkeyswitch` コマンドの `off` および `standby` パラメータを指定すると、確認が要求されます。

ドメインの電源がすでに投入されている場合は、`setkeyswitch on`、`setkeyswitch diag`、および `setkeyswitch secure` コマンドを実行しても、仮想キースイッチの位置しか変更されません。ドメインを構成する I/O アセンブリや CPU/メモリーボードなどのコンポーネントの電源を投入する必要がある場合、システムはこれらのボードまたは装置の電源も投入しようとします。

キースイッチの位置が `on`、`secure`、または `diag` に変更された場合は、ドメインコンソールが再開されます。

キースイッチの設定の変更中に障害が発生した場合は、回復したあとでキースイッチの位置が `off` または `standby` にリセットされます。

システムコントローラは、停電または物理的な電源の再投入が行われた場合でも、各キースイッチの位置を保持します。停電またはシステムの電源が切断されたあとに、システムの電源を投入すると、システムコントローラは、電源切断中に動作していたすべてのドメインを起動します。

関連項目

`resume`、`showkeyswitch`

例

仮想キースイッチを on にしてドメインの電源を投入するには、次のように入力します (コード例 3-42)。

コード例 3-42 setkeyswitch on コマンドの例

```
schostname:A> setkeyswitch on
```

仮想キースイッチを off にしてドメインを停止するには、次のように入力します (コード例 3-43)。

コード例 3-43 setkeyswitch off コマンドの例

```
schostname:A> setkeyswitch off
```

プラットフォームシェルからドメイン B を停止するには、次のように入力します (コード例 3-44)。

コード例 3-44 プラットフォームシェルからドメイン B を停止する setkeyswitch off コマンドの例

```
schostname:SC> setkeyswitch -d b off
```



注意 – コード例 3-44 では、ドメイン B のキースイッチが off の位置に設定される前に、ドメインで Solaris オペレーティング環境が正常に停止されません。

setls

コンポーネント位置の状態を設定します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

構文

```
setls -s new_status -l location
```

```
setls -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-s *new_status* には、コンポーネント位置の状態を設定します。

- enable – 指定したコンポーネント位置が使用可能になります。
- disable – 指定したコンポーネント位置が使用不可になります。

-l *location* には、コンポーネント位置を指定します。

- *slot/port/physical_bank/logical_bank* (CPU/メモリーボード)
- *slot/port/bus* (I/O アセンブリ)
- *slot/card* (I/O アセンブリ)

説明

特定の位置にあるコンポーネントをシステムに構成するかどうかを制御します。コンポーネント位置の状態は、次のいずれかに設定できます。

- **Enabled** – 指定した位置にあるコンポーネントは、コンポーネントの健全性状態 (Component Health Status : CHS) に応じてシステムに構成されます。コンポーネントの健全性状態の詳細は、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』を参照してください。

setls コマンドによって使用不可のコンポーネントを使用可能に戻すことができない場合があります。showcomponent コマンドの出力で、POST 状態の欄に chs と表示されている使用不可のコンポーネントは、システムに構成することができません。このような場合は、ご購入先に保守作業を依頼してください。

- **Disabled** – 指定した位置にあるコンポーネントは、システムに構成されません。

注 – コンポーネント位置の状態は、次回のドメインの再起動時、ボードの電源の再投入時、または POST の実行時に更新されます。たとえば、`setkeyswitch on` または `off` の操作を行うと、自動的に POST が実行されます。

コンポーネント位置を使用不可にすると、そのサブコンポーネントの位置も使用不可になります。たとえば、CPU スロットの位置を使用不可にすると、その CPU が制御しているメモリーの位置も自動的に使用不可になります。

同様に、コンポーネント位置を使用可能にすると、サブコンポーネント位置も使用可能になりますが、それは `setls` コマンドを使用してサブコンポーネント位置を個別に使用不可に設定していない場合にかぎります。親コンポーネントの位置を指定するだけでは、サブコンポーネント位置を自動的に使用可能にすることはできません。各サブコンポーネント位置は、`setls` コマンドを使用して個別に使用可能にする必要があります。

コンポーネント位置の状態に関して、次の事項に注意してください。

- コンポーネント位置をプラットフォームシェルで使用不可にすると、そのコンポーネント位置は全ドメインで使用不可になります。
使用不可に指定した位置にあるコンポーネントは、システムに構成されません。
- コンポーネント位置をドメインシェルで使用不可にすると、そのコンポーネント位置はそのドメインでのみ使用不可になります。
使用不可に指定した位置にあるコンポーネントは、システムに構成されません。
ドメイン内のコンポーネント位置の状態を変更した場合、変更はそのドメインにのみ適用されます。コンポーネントを別の位置または別のドメインに移動すると、そのコンポーネント位置の状態は保持されません。
- コンポーネント位置をプラットフォームで使用不可にすると、ドメインでそのコンポーネント位置を使用可能にすることはできません。また、コンポーネント位置をドメインで使用不可にすると、プラットフォームでそのコンポーネント位置を使用可能にすることはできません。
どちらの場合も、使用不可に指定した位置にあるコンポーネントは、システムに構成されません。

コンポーネント位置は、次のとおりです (表 3-6 および表 3-7 を参照)。

- ポート (CPU/メモリーボード上の CPU、および I/O アセンブリ上の I/O コントローラ)
- 物理および論理メモリーバンク
- I/O バス
- I/O カード

表 3-6 CPU/メモリーボードの位置の説明

ボードまたはデバイス	コンポーネント位置
CPU/メモリーボードのスロット	SB0、SB1、SB2、SB3、SB4、SB5
CPU/メモリーボードのポート	P0、P1、P2、P3
CPU/メモリーボードの物理メモリーバンク	B0、B1
CPU/メモリーボードの論理バンク	L0、L1、L2、L3

表 3-7 I/O アセンブリの位置の説明

ボードまたはデバイス	コンポーネント位置
I/O アセンブリのスロット	IB6、IB7、IB8、IB9
I/O アセンブリのポート	P0、P1
I/O アセンブリのバス	B0、B1
I/O アセンブリの I/O カード	C0、C1、C2、C3、C4、C5、C6、C7 (カードの数は I/O アセンブリによって異なります。)

注 – I/O アセンブリのポートの位置を使用不可にする場合は、ドメイン内で 1 つ以上の I/O コントローラ 0 を使用可能にして、ドメインがシステムコントローラと通信できるようにしてください。

関連項目

showcomponent、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』

例

コード例 3-45 に、スロット sb4 にあるコンポーネントを使用可能にする例を示します。スロット sb4 にある CPU/メモリーボードは、コンポーネントの健全性状態に応じてシステムに構成されます。状態の変更は、次のドメインの再起動時、ボードの電源の再投入時、または POST の実行時に行われます。

コード例 3-45 スロット sb4 の CPU/メモリーボードの位置を使用可能にする setls コマンドの例

```
schostname:A> setls -s enable -l sb4
```

コード例 3-46 に、スロット ib6 のポート 1 にある I/O アセンブリを使用可能にする例を示します。I/O アセンブリ 6 のポート 1 は、コンポーネントの健全性状態に応じてシステムに構成されます。状態の変更は、次回のドメインの再起動時、ボードの電源の再投入時、または POST の実行時に行われます。

コード例 3-46 スロット ib6 の I/O アセンブリの位置を使用可能にする `setls` コマンドの例

```
schostname:A> setls -s enable -l ib6/p1
```

コード例 3-47 に、スロット sb0 の CPU ポート 3 にあるコンポーネントを使用不可にする例を示します。スロット sb0 にある CPU/メモリーボードは、次回のドメインの再起動時、ボードの電源の再投入時、または POST の実行時にシステムから構成解除されます。また、この CPU ポート上のメモリーバンクにもアクセスできなくなるので、メモリーバンクは暗黙的に使用不可になります。

コード例 3-47 スロット sb0 および CPU ポート 3 の CPU/メモリーボードの位置を使用不可にする `setls` コマンドの例

```
schostname:A> setls -s disable -l sb0/p3
```

コード例 3-48 に、スロット sb4 にあるコンポーネントを使用不可にする例を示します。スロット sb4 にある CPU/メモリーボードは、次回のドメインの再起動時、ボードの電源の再投入時、または POST の実行時に構成解除されます。

コード例 3-48 スロット sb4 の CPU/メモリーボードの位置を使用不可にする `setls` コマンドの例

```
schostname:A> setls -s disable -l sb4
```


setupdomain

ドメインを構成します。

適用範囲

ドメインシェル

構文

```
setupdomain [-p part]...
```

```
setupdomain -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-p *part* を指定すると、指定した情報が設定されます。次のオプションがあります。

- `bootparams` を指定すると、起動パラメタの情報が設定されます。
- `loghost` を指定すると、ログホストが設定されます。
- `snmp` を指定すると、SNMP 情報が設定されます。

表 3-8 に、`setupdomain` のパラメタ値を示します。`diag-level` では、`default` と `max` の定義および機能が同じであることに注意してください。また、`mem1` と `mem2` のテストの実行には時間がかかるため、`default` または `max` を使用してください。ただし、メモリー障害が予想される場合は、`mem1` と `mem2` の値を使用してください。

表 3-8 setupdomain コマンドのパラメタ値

パラメタ	値	説明
diag-level	init	システムボードの初期設定コードだけが実行されます。テストは行われません。POST は、もっとも早く実行が終了します。
	quick	すべてのシステムボードコンポーネントで、少数のパターンによるテストが実行されます。

表 3-8 setupdomain コマンドのパラメタ値 (続き)

パラメタ	値	説明
	default (デフォルト値)	メモリーおよび外部キャッシュモジュールを除き、すべてのシステムボードコンポーネントに対して、すべてのテストおよびテストパターンが実行されます。メモリーおよび外部キャッシュモジュールに対しては、複数のパターンですべての位置がテストされます。このレベルでは、より広範囲で時間のかかるアルゴリズムは実行されません。この設定は、max と同じです。
	max	すべてのシステムボードコンポーネントで、すべてのテストおよびテストパターンが行われます。この設定は、default と同じです。
	mem1	default レベルのすべてのテストに加えて、より徹底した DRAM および SRAM テストアルゴリズムを実行します。これらのテストの実行には時間がかかります。
	mem2	DRAM データを明示的に比較する DRAM テストを追加するほかは、mem1 と同じです。これらのテストの実行には時間がかかります。
verbosity-level	off	状態メッセージは表示されません。POST 出力は常に表示されています。ただし、値を off に設定すると、わずかな POST 出力しか表示されず、次の出力が表示されるまでに時間がかかる場合があります。これは、ご使用のハードウェアの構成および diag-level の設定によって異なります。
	min (デフォルト値)	テスト名および状態メッセージ、エラーメッセージが表示されます。
	max	サブテストのトレースメッセージが表示されます。
error-level	off	エラーメッセージは表示されません。
	min	問題が発見されたテスト名が表示されます。
	max (デフォルト値)	発生したすべてのエラーの状態が表示されます。
interleave-scope	within-cpu	CPU 上のメモリーバンクは、互いにインタリーブされます。各 CPU は、最大 4 つの論理メモリーバンクを持つことができます。
	within-board (デフォルト値)	システムボード上のメモリーバンクは、互いにインタリーブされます。
	across-boards	メモリーは、ドメイン内のすべてのボードのメモリーバンクにインタリーブされます。この値に設定されている場合、DR を使用してシステムから CPU/メモリーボードを削除することはできません。

表 3-8 setupdomain コマンドのパラメタ値 (続き)

パラメタ	値	説明
interleave-mode	optimal (デフォルト値)	性能の最適化のために、メモリーはさまざまなサイズでインタリーブされます。
	fixed	メモリーは固定サイズでインタリーブされます。
	off	メモリーはインタリーブされません。
reboot-on-error	true (デフォルト値)	システムコントローラがハードウェアのエラーを検出すると、ドメインが再起動されます。OBP.auto-boot? が true に設定されている場合は、Solaris オペレーティング環境が起動されます。 注 — ドメインの自動再起動は、3 回まで行われず。3 回目の再起動後にシステムコントローラがそのドメインで別のハードウェアエラーを検出すると、ドメインは一時停止します。その場合は、手動でドメインを再起動せずに、ご購入先にお問い合わせください。
	false	システムコントローラがハードウェアのエラーを検出すると、ドメインが停止されます。復元するには、手動でドメインをリセットする必要があります。setkeyswitch コマンドを使用して、ドメインを off にしたあと、on にします。
	display	エラーメッセージが通知および記録されます。
hang-policy		ハングアップしたドメインの自動回復を制御します。
	reset	ハングアップしたドメインが、XIR (外部強制リセット) によって自動的にリセットされます。また、ドメインのコンソールまたはドメインのログホストのメッセージを介して、ハングアップしたドメインが通知されます。
	notify	ハングアップしたドメインはリセットされませんが、ドメインのコンソールまたはドメインのログホストのメッセージを介して、ドメインがハングアップしたことが通知されます。
OBP.use-nvramrc?		OpenBoot PROM の nvramrc? パラメタと同一です。このパラメタは、nvramrc に格納されている別名を使用します。
	true	OpenBoot PROM は、nvramrc に格納されているスクリプトを実行します。
	false (デフォルト値)	OpenBoot PROM は、nvramrc に格納されているスクリプトを実行しません。
OBP.auto-boot?		Solaris オペレーティング環境の起動を制御します。

表 3-8 setupdomain コマンドのパラメタ値 (続き)

パラメタ	値	説明
	true (デフォルト値)	POST 実行後、ドメインは自動的に起動します。
	false	POST 実行後、OpenBoot PROM の ok プロンプトが表示されます。このプロンプトから boot コマンドを入力することによって、Solaris オペレーティング環境を起動します。
OBP.error-reset-recovery	XIR (外部強制リセット) およびレッドモードトラップ後のドメインの動作を制御します。	
	sync (デフォルト値)	OpenBoot PROM は、sync を呼び出します。コアファイルが生成されます。呼び先から戻った場合、OpenBoot PROM は再起動を実行します。
	none	OpenBoot PROM は、エラーリセットの原因になったリセットトラップを説明するメッセージを出力し、OpenBoot PROM の ok プロンプトに制御を渡します。リセットトラップの種類を説明するメッセージは、プラットフォーム固有です。
	boot	OpenBoot PROM のファームウェアは、ドメインを再起動します。コアファイルは生成されません。ドメインを再起動すると、OpenBoot PROM 構成変数 diag-switch? の値に基づいて、diag-device または boot-device の OpenBoot PROM 設定が使用されます。
		diag-switch? に true が設定されている場合は、diag-device のデバイス名が起動時のデフォルトになります。diag-switch? に false が設定されている場合は、boot-device のデバイス名が起動時のデフォルトになります。
Loghost		このドメインのログホストの名前または IP アドレス (SNMP)
Log Facility		SC のログ機能の設定は、メッセージ送信先の SYSLOG サーバーの設定と一致する必要があります。デフォルトは、local0 です。
Domain Description		このドメインの簡単な説明 (機能など) を入力します。
Domain Contact		主ドメイン管理者の名前を入力します。

表 3-8 setupdomain コマンドのパラメタ値 (続き)

パラメタ	値	説明
Trap Hosts		<p>このドメインの SNMP トラップホストの名前または IP アドレスを入力します。</p> <p>SNMP エージェントは、SNMP のデフォルトのポート番号 (162) のトラップホストにトラップを送信します。デフォルトのポート番号のほかに、任意で異なる番号のポート番号を使用できます。</p> <p>トラップホストは、host[:port] の形式で指定します。</p>
Public Community String		<p>SNMP 読み込み側のコミュニティー文字列。デフォルト値は、A-public、B-public などです。</p> <p>注 - Sun Management Center ソフトウェアなどの SNMP クライアントで SNMP を使用してシステムコントローラにアクセスするには、SNMP クライアントのコミュニティー文字列に、ここで入力した値と同じ値を設定する必要があります。</p>
Private Community String		<p>読み込み側および書き込み側のコミュニティー文字列。デフォルト値は、A-Private、B-Private などです。</p> <p>注 - Sun Management Center ソフトウェアなどの SNMP クライアントで SNMP を使用してシステムコントローラにアクセスするには、SNMP クライアントのコミュニティー文字列に、ここで入力した値と同じ値を設定する必要があります。</p>

説明

ドメイン固有の値を設定します。ドメインを構成します。各ドメインは、個別に独立して構成できます。このコマンド是对話型です。設定するパラメタのプロンプトが表示されます。

関連項目

password、setdate、showdate、showdomain、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「システムの電源投入および設定」の章にある「ドメイン固有のパラメタを設定する」を参照してください。

例

コード例 3-49 setupdomain コマンドの変数

```
schostname:A> setupdomain

Domain Boot Parameters
-----
diag-level [default]:
verbosity-level [min]:
error-level [max]:
interleave-scope [within-board]:
interleave-mode [optimal]:
reboot-on-error [true]:
hang-policy [reset]:
OBP.use-nvramrc? [<OBP default>]:
OBP.auto-boot? [<OBP default>]:
OBP.error-reset-recovery [<OBP default>]:

Log hosts
-----
Loghost [ ]: このドメインのログホストのホスト名または IP アドレス
Log Facility [local0]: メッセージを受信する SYSLOG サーバーと一致するように定義

SNMP
-----
Domain Description[]: このドメインの機能の簡単な説明
Domain Contact [ ]: 主ドメイン管理者の名前
Trap Hosts [ ]: このドメインの SNMP トラップホストの名前または IP アドレス
Public Community String [ ]: SNMP 読み込み側のコミュニティ文字列
Private Community String [ ]: 読み込み側および書き込み側のコミュニティ文字列

schostname:A>
```

注 – OBP.* パラメタに対してソフトウェアが表示するデフォルトの値は、OBP default です。

無効な値を入力した場合、システムコントローラは「invalid entry」のメッセージと、適切な値を入力するためのプロンプトを表示します (表 3-8)。値を指定しない場合は、現在の値が保持されます。無効なエントリを入力した場合は、有効な応答のリストが表示されます。ダッシュ (-) を入力すると、エントリが消去されます。

現在の値は、角括弧 ([]) 内に表示されます。表 3-8 に、setupdomain のパラメタ値を示します。

setupplatform

プラットフォーム固有の変数を設定します。

適用範囲

プラットフォームシェル

構文

```
setupplatform [-p part]...
```

```
setupplatform -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-p *part* を指定すると、指定した情報が設定されます。次のオプションがあります。

- `acls` を指定すると、ACL (アクセス制御リスト) が設定されます。
 - は、ACL からボードを消去
 - + は、ACL にボードを追加
 - a *board* は、ボードの追加
 - d *board* は、ボードの削除
- `cod` を指定すると、COD パラメタが設定されます。次のオプションがあります。
 - `headroom-number` を指定すると、COD インスタントアクセス CPU の数のみを設定できます。
 - d *domainID proc-RTUs* を指定すると、指定したドメイン (a、b、c、または d) に特定数の COD RTU ライセンスを予約できます。
- `hostid` を指定すると、ドメインのホスト ID および MAC アドレスを、別のドメインのものとの交換できます。
 - `[-m auto]` を指定すると、交換したホスト ID および MAC アドレスを、元のドメインの割り当てに復元できます。

注 -HostID/MAC Address Swap パラメタは、`hostid` オプションを指定した場合にだけ表示されます。詳細は、このコマンドの「説明」の項を参照してください。

- loghost を指定すると、デフォルトの local0 を使用してログホストおよびログ機能が設定されます。ログホストは、syslog ログホストの IP アドレスまたはホスト名です。ホスト名はフルネームで指定する必要があります (省略指定は不可)。
- network を指定すると、ネットワーク構成が含まれるようになります。この構成によって、システムコントローラへの遠隔アクセスを制御して、SSH または Telnet サービスのいずれかを使用可能または使用不可にできます。タイムアウト時間の指定を除き、すべてのネットワーク構成を有効にするには再起動が必要です。アイドル状態になっているシステムコントローラへの遠隔接続またはシリアルポート接続に対するタイムアウト時間を設定することもできます。
- partition を指定すると、パーティションモードが設定されます。
- sc を指定すると、システムコントローラの動作が設定されます。
- snmp を指定すると、SNMP (Simple Network Management Protocol) が設定されます。
- sntp を指定すると、SNTP (Simple Network Time Protocol) が設定されます。

説明

プラットフォームのパラメタを設定します。このコマンドは対話型です。設定するパラメタのプロンプトが表示されます。設定するパラメタについては、表 3-9 を参照してください。

表 3-9 setupplatform のパラメタ値

パラメタ	説明
Is the System Controller on a Network?	no と答えると、すべてのネットワークパラメタは未設定のままになります。ホスト名を入力するためのプロンプトが表示されます。yes と答えると、ネットワークの構成を設定するためのプロンプトが表示されます。
Use DHCP or static network settings?	<ul style="list-style-type: none"> • DHCP を指定すると、システムコントローラのネットワーク構成が DHCP サーバーから取り出されます。 • Static を指定すると、ネットワーク構成を手動で設定することになります。Static を選択した場合は、次のネットワークパラメタに関する入力を求められます。
Hostname (ネットワークパラメタ)	システムコントローラの参照可能なネットワーク識別情報
IP address (ネットワークパラメタ)	コンピュータによって使用されるネットワーク識別情報
Netmask (ネットワークパラメタ)	ネットワークをサブネットワークに分割するために必要なアドレスの数。ドット記法のアドレスで指定する必要があります (たとえば、255.255.255.0)。
Gateway (ネットワークパラメタ)	ゲートウェイの IP アドレス
DNS Domain (ネットワークパラメタ)	ドメイン名 (たとえば、xxx.xxx.com)

表 3-9 setupplatform のパラメタ値 (続き)

パラメタ	説明
Primary DNS Server (ネットワークパラメタ)	プライマリ DNS サーバーの IP アドレス
Secondary DNS Server (ネットワークパラメタ)	セカンダリ DNS サーバーの IP アドレス
Loghost	このプラットフォームのログホストの名前または IP アドレス
Connection type	遠隔接続形式: ssh, telnet、または none (シリアル接続) 注 - セキュリティ保護された遠隔接続を実現するためには、ssh を選択してください。詳細は、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「セキュリティに関するガイドライン」に記載されている、関連するセキュリティの推奨事項を参照してください。
Idle connection timeout	タイムアウトの間隔は分単位です。ゼロ (0) は、タイムアウトが未設定であることを示します。 注 - ドメインの起動処理はユーザーの入力を要求しないので、アイドル状態とみなされます。タイムアウト時間がドメインの起動時間よりも短いと、ドメインの起動中に接続が解除される可能性があります。接続が解除された場合、起動処理は完了するまで続行されますが、起動処理が OBP に達するまでコンソールは使用不可になります。
Enable Sun Fire Link?	このパラメタは、使用するシステムに Sun Fire Link ボードが取り付けられている場合のみ表示されます。デフォルトでは、Sun Fire Link は使用不可になっています。yes と応答すると、Sun Fire Link が使用可能になります。
Log Facility	SC のログ機能の設定は、メッセージ送信先の SYSLOG サーバーの設定と一致している必要があります。デフォルトは、local0 です。 注 - 詳細は、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「セキュリティに関するガイドライン」に記載されている、関連するセキュリティの推奨事項を参照してください。
SNTP server	各システムコントローラによって管理されるローカルのシステムクロック間のずれ (相違) を自動的に追跡し、修正する SNTP (Simple Network Time Protocol) サーバー名 注 - SC フェイルオーバーを使用可能にする場合は、SNTP を使用することをお勧めします。詳細は、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「セキュリティに関するガイドライン」に記載されている、関連するセキュリティの推奨事項を参照してください。
Platform Description	デフォルト値は、プラットフォームモデル名です。

表 3-9 setupplatform のパラメタ値 (続き)

パラメタ	説明
Platform Contact	このシステムの管理者の名前。この名前は、SNMP が使用します。SNMP が使用可能でない場合、このフィールドは情報提供のみとなります。
Platform Location	システムの設置場所 (設置室の位置か室内の位置、またはその両方)。この情報は、SNMP が使用します。SNMP が使用可能でない場合、このフィールドは情報提供のみとなります。
Enable SNMP Agent?	デフォルトでは、SNMP は使用不可です。yes と応答すると、SNMP エージェントが、SNMP を使用可能にします。 注 — デフォルトの設定 (disabled) を使用することをお勧めします。Sun Management Center ソフトウェアを使用する場合のみ、SNMP を使用可能にしてください。詳細は、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「セキュリティに関するガイドライン」に記載されている、関連するセキュリティの推奨事項を参照してください。
Trap Hosts	SNMP トラップホストの IP アドレスまたはホスト名。SNMP エージェントは、SNMP のデフォルトのポート番号 (162) のトラップホストにトラップを送信します。デフォルトのポート番号のほかに、任意で異なる番号のポート番号を使用できます。トラップホストは、host[:port] の形式で指定します。
Public Community String	SNMP 読み込み側のコミュニティ文字列。デフォルトは P-public です。 注 — Sun Management Center ソフトウェアなどの SNMP クライアントで SNMP を使用してシステムコントローラにアクセスするには、SNMP クライアントのコミュニティ文字列に、ここで入力した値と同じ値を設定する必要があります。
Private Community String	読み込み側および書き込み側のコミュニティ文字列。デフォルトは P-private です。 注 — Sun Management Center ソフトウェアなどの SNMP クライアントで SNMP を使用してシステムコントローラにアクセスするには、SNMP クライアントのコミュニティ文字列に、ここで入力した値と同じ値を設定する必要があります。

表 3-9 setupplatform のパラメタ値 (続き)

パラメタ	説明
ACL for Domain A	<p>アクセス制御リスト (ACL)。ボード名が特定のドメインの ACL に記載されている場合は、そのボードに対する addboard 要求または deleteboard 要求を実行する権限があります。デフォルトでは、すべてのスロットがすべてのドメインに割り当てられています。</p> <p>注 — 詳細は、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「セキュリティに関するガイドライン」に記載されている、関連するセキュリティの推奨事項を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> スロット名の前に -d を入力すると、このドメインの ACL からスロットが削除されます。 スロット名の前に -a (add) を入力すると、スロットが追加されます。 スロット名の前にダッシュ (-) を入力すると、リスト全体が消去されます。 + (正記号) を入力すると、すべて追加されます。 Return キーを押しても、[] 中の値は変化しません。
ACL for Domain B	「ACL for Domain A」の説明を参照
ACL for Domain C	「ACL for Domain A」の説明を参照
ACL for Domain D	「ACL for Domain A」の説明を参照
PROC RTUs installed	現在インストールされている COD RTU ライセンスの数が表示されます。
PROC Headroom Quantity (0 to disable, 4 MAX) [x]	<p>使用可能にする COD インスタントアクセス CPU の数</p> <ul style="list-style-type: none"> 丸括弧内に使用可能にできるインスタントアクセス CPU の最大数 (4) が表示されます。 0 を指定すると、現在使用中のインスタントアクセス CPU がない場合のみ、インスタントアクセス CPU が使用不可になります。 角括弧内に現在使用可能になっているインスタントアクセス CPU の数が表示されます。
PROC RTUs reserved for domain A (x MAX) [y]:	<p>ドメインに予約する COD 使用権 (RTU) ライセンスの数</p> <ul style="list-style-type: none"> 丸括弧内にドメインに予約できる COD RTU ライセンスの最大数が表示されます。 角括弧内に現在ドメインに割り当てられている COD RTU ライセンスの数が表示されます。
PROC RTUs reserved for domain B (x MAX) [y]:	「PROC RTUs reserved for domain A」の説明を参照
PROC RTUs reserved for domain C (x MAX) [y]:	「PROC RTUs reserved for domain A」の説明を参照

表 3-9 setupplatform のパラメタ値 (続き)

パラメタ	説明
PROC RTUs reserved for domain D (x MAX) [y]:	「PROC RTUs reserved for domain A」の説明を参照
SC POST diag level	システムコントローラ起動パラメタ (diag level) は、off、min、または max に設定できます。
off	システムボードの初期設定コードだけが実行されます。テストは行われません。POST は実行されません。
min	すべてのシステムコントローラボードコンポーネントで、少数の位置が少数のパターンでテストされます。
max	すべてのシステムコントローラボードコンポーネントで、すべてのテストおよびテストパターンが行われます。
Enable SC failover?	yes と応答して、冗長 SC 構成にすると、SC フェイルオーバーが使用可能になります (動作します)。no と応答すると、SC フェイルオーバーは、再度使用可能に設定するまで使用不可になります。
Logical Hostname or IP Address	常に動作中のメイン SC を指す論理ホストの名前または IP アドレス。SC フェイルオーバーが発生すると、この論理ホスト名または IP アドレスは新しいメイン SC に関連付けられ、移動します。 浮動 IP アドレスは、システムコントローラを特定するために使用される IP アドレスとは異なる必要があります。
Configure platform for single or dual partition mode?	single または dual の 2 つのオプションがあります (デフォルトは single)。シングルおよびデュアルパーティションモードの説明は、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「概要」の章を参照してください。

HostID/MAC Address Swap パラメタ

HostID/MAC Address Swap パラメタは、setupplatform コマンドを `-p hostid` オプションを指定して実行した場合にだけ表示されます。このパラメタを使用すると、あるドメインのホスト ID および MAC アドレスを、別のドメインと交換できます。たとえば、特定のドメインのホスト ID および MAC アドレスに限定されたホストライセンスを必要とするソフトウェアを実行している場合、別のドメインでそのソフトウェアを実行する必要があるときに、ドメインのホスト ID および MAC アドレスを、別の有効なドメインのホスト ID および MAC アドレスと交換できます。このようにすると、元のドメインのホスト ID および MAC アドレスに限定されたライセンスによって制限を受けることがなくなり、使用できるドメインでホストライセンスが必要なソフトウェアを実行できます。HostID/MAC address swap の使用方法については、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』を参照してください。

表 3-10 に、`setupplatform -p hostid` コマンドを指定するときに表示されるプロンプトを示します。コード例 3-51 には、出力例を示します。

表 3-10 `setupplatform HostID/MAC Address Swap` パラメタのプロンプト

パラメタ	説明
Domain to swap HostID/MAC address [A,B,C,D]:	<p>ホスト ID および MAC アドレスを、別のドメインと交換するドメインを指定します。選択するドメインは、非動作状態にしておく必要があります。</p> <p>注 — このプロンプトと次のプロンプトでは、HostID/MAC address swap の対象になるドメインを指定します。選択するドメインの一方には、ホストライセンスが必要なソフトウェアに現在関連付けられているドメインを選択します。もう一方には、これからそのソフトウェアを実行するドメインを指定します。</p>
Domain to swap HostID/MAC address with [A,B,C,D]:	<p>ホスト ID および MAC アドレスを、先に指定したドメインと交換するドメインを指定します。選択するドメインは、非動作状態にしておく必要があります。</p>
Commit swap?[no]:	<p>yes と応答すると、指定したドメインのホスト ID および MAC アドレスが交換されます。</p>
Swap HostIDs/MAC addresses of another pair of Domains?[no]:	<p>yes と応答すると、ホスト ID および MAC アドレスを交換するドメインの組を指定するためのプロンプトが表示されます。</p>
Restore automatic HostID/MAC address assignment?[no]: n	<p>-p hostid オプションに -m auto オプションを指定した場合にだけ表示されます。yes と応答すると、ドメイン間で交換したホスト ID および MAC アドレスが元のドメインに復元されます。</p>

関連項目

password、setdate、setupdomain、showdate、showdomain、showplatform、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』を参照してください。このマニュアルでは `setupplatform` を使用するプラットフォームの設定手順について説明しています。

例

コード例 3-50 `setupplatform` の出力

```

schostname:SC> setupplatform

Network Configuration
-----
Is the system controller on a network? [yes]:

```

コード例 3-50 setupplatform の出力 (続き)

```
Use DHCP or static network settings? [DHCP]:
Hostname []:
IP Address []:
Netmask []:
Gateway []:
DNS Domain []:
Primary DNS Server []:
Secondary DNS Server []:

To enable remote access to the system controller, select "ssh" or "telnet."

Connection type: ssh

Rebooting the SC is required for changes in the above network settings
to take effect.

Idle connection timeout (in minutes; 0 means no timeout) [0]:

Enable Sun Fire Link? [no]:

Loghosts
-----
Loghost [ ]:
Log Facility [local0]:

SNTP
----
SNTP server [ntp1]:

SNMP
----
Platform Description [Sun Fire 6800]: システムの種類
Platform Contact [ ]: プラットフォームの管理者名
Platform Location [ ]: システムの地理的な場所

Do not enable SNMP Agent unless you use Sun Management Center software.

Enable SNMP Agent? [yes]:
Trap Hosts []: SNMP トラップホストの IP アドレスまたは名前
Public Community String [P-public]: SNMP 読み込み側のコミュニティー文字列
Private Community String [P-private]: 読み込み側および書き込み側のコミュニティー文字列

ACLs
----
ACL for domain A [SB0 SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 IB6 IB7 IB8 IB9 ]:
ACL for domain B [SB0 SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 IB6 IB7 IB8 IB9 ]:
ACL for domain C [SB0 SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 IB6 IB7 IB8 IB9 ]:
```

コード例 3-50 setupplatform の出力 (続き)

```
ACL for domain D [SB0 SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 IB6 IB7 IB8 IB9 ]:  
  
COD  
---  
PROC RTUs installed: 8  
PROC Headroom Quantity (0 to disable, 4 MAX) [0]: 使用可能にするインスタントアクセス CPU 数  
PROC RTUs reserved for domain A (6 MAX) [0]: ドメインに予約する COD RTU ライセンス数  
PROC RTUs reserved for domain B (6 MAX) [0]: ドメインに予約する COD RTU ライセンス数  
PROC RTUs reserved for domain C (4 MAX) [0]: ドメインに予約する COD RTU ライセンス数  
PROC RTUs reserved for domain D (4 MAX) [0]: ドメインに予約する COD RTU ライセンス数  
  
SC  
--  
SC POST diag Level [min]:  
Enable SC failover? [yes]:  
Logical Hostname or IP address [sp1-sc]:  
  
Partition Mode  
-----  
Configure chassis for single or dual partition mode? [single]:  
  
schostname:SC>
```

コード例 3-51 `setupplatform -p hostid` の出力

```
schostname:SC> setupplatform -p hostid

HostID/MAC Address Swap
-----
Domain to swap HostID/MAC address [A,B,C,D]: b
Domain to swap HostID/MAC address with [A,B,C,D]: d
Commit swap? [no]: y

Swap HostIDs/MAC addresses of another pair of Domains? [no]: n

schostname:SC>
```

コード例 3-52 `setupplatform -p hostid -m auto` の出力

```
schostname:SC> setupplatform -p hostid -m auto

HostID/MAC Address Swap
-----
Restore automatic HostID/MAC address assignment? [no]: y

schostname:SC>
```


showboards

システム内のすべてのコンポーネントの割り当て情報および状態を表示します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

プラットフォームシェルの構文

```
showboards [-ev] [-y| -n] [ -d domainID] [-p part]
```

```
showboards -h
```

ドメインシェルの構文

```
showboards [-aev] [-y| -n] [-p part]
```

```
showboards -h
```

オプション / パラメタ

-a を指定すると、使用可能なボードが含まれます (ドメインのみ)。

-e を指定すると、出力に空きスロットが含まれます。

-v を指定すると、冗長モードになります。

-d *domainID* には、表示するドメインを指定します (プラットフォームのみ)。

-p *part* を指定すると、指定した部分の情報のみが表示されます。

- board を指定すると、ボード状態が表示されます。
- clock を指定すると、システムのクロック状態が表示されます。
- cpu を指定すると、CPU のタイプ、速度、および外部キャッシュのサイズが表示されます。
- io を指定すると、入出力情報が表示されます。
- memory を指定すると、各ボードのメモリー情報が表示されます。
- power を指定すると、グリッドの情報が表示されます。
- version を指定すると、バージョン情報が表示されます。

-y を指定すると、すべての質問に **yes** と応答します。

-n を指定すると、すべての質問に **no** と応答します。

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

説明

システム内のすべてのコンポーネント (CPU/メモリーボード、I/O アセンブリ、ファントレイなど) の割り当て情報および状態を表示します。ドメインシェルの場合、ドメインに割り当てられているコンポーネントのほかに、ACL にリストされているがドメインには割り当てられていないボードも表示されます。

関連項目

addboard、deleteboard

例 — プラットフォームシェル

コード例 3-53 プラットフォームシェルの showboards コマンドの出力例

```
schostname: SC> showboards
```

Slot	Pwr	Component	Type	State	Status	Domain
SSC0	On	System Controller	V2	Main	Passed	-
SSC1	On	Present		Spare	-	-
ID0	On	Sun Fire Replacement	ID Board	-	OK	-
PS0	On	A184 Power Supply		-	OK	-
PS1	On	A184 Power Supply		-	OK	-
PS2	On	A184 Power Supply		-	OK	-
PS3	On	A184 Power Supply		-	OK	-
PS4	On	A184 Power Supply		-	OK	-
PS5	On	A184 Power Supply		-	OK	-
FT0	On	Fan Tray		Low Speed	OK	-
FT1	On	Fan Tray		Low Speed	OK	-
FT2	On	Fan Tray		Low Speed	OK	-
FT3	On	Fan Tray		Low Speed	OK	-
RP0	On	Repeater Board		-	OK	-
RP1	On	Repeater Board		-	OK	-
RP2	On	Repeater Board		-	OK	-
RP3	On	Repeater Board		-	OK	-
/N0/SB0	On	CPU Board	V3	Active	Passed	A
/N0/SB1	On	CPU Board	V3	Active	Passed	A
/N0/SB2	On	CPU Board	V3	Active	Passed	A
/N0/SB3	On	CPU Board	V3	Active	Passed	A
/N0/SB4	On	CPU Board	V3	Active	Passed	A

コード例 3-53 プラットフォームシェルの showboards コマンドの出力例 (続き)

/N0/SB5	On	CPU Board V3	Active	Passed	A
/N0/IB6	On	PCI I/O Board	Active	Passed	A
/N0/IB7	On	PCI I/O Board	Active	Passed	A
/N0/IB8	On	Fire Link/CPCI I/O Board	Active	Degraded	A
/N0/IB9	On	Fire Link/CPCI I/O Board	Active	Degraded	A

-v オプションを指定して showboards コマンドを実行すると、冗長オプションが表示されます。

-p version オプションを指定して showboards コマンドを実行すると、ファームウェアのバージョンおよび互換性に関する情報が表示されます。

コード例 3-54 -p version オプションを指定した showboards コマンド

```
schostrname: SC> showboards -p version
```

Component	Compatible	Version
-----	-----	-----
SSC1	Reference	5.17.0
/N0/IB6	Yes	5.17.0
/N0/IB7	Yes	5.17.0
/N0/IB8	Yes	5.17.0
/N0/IB9	Yes	5.17.0
/N0/SB0	Yes	5.17.0
/N0/SB1	Yes	5.17.0
/N0/SB2	Yes	5.17.0
/N0/SB3	Yes	5.17.0
/N0/SB4	Yes	5.17.0
/N0/SB5	Yes	5.17.0

```
schostrname: SC>
```

表 3-11 showboards コマンドおよび showboards -v コマンドの出力ヘッダーの定義

ヘッダー	説明
Slot	スロット指示子。スロット記述子の Nx は、ノード番号です。
Pwr	装置の電源が投入されているかどうかを示します。
Component type	システムコントローラ、CPU ボード、COD CPU ボード、ファントレイなどのコンポーネントの説明。次に、注意が必要なコンポーネントの説明を示します。 <ul style="list-style-type: none"> • System Controller - 拡張メモリーがない SC • System Controller V2 - 拡張メモリーがある SC • CPU Board または COD CPU Board - CPU ボード (バージョン 1) • CPU Board V2 または COD CPU Board V2 - CPU ボード (バージョン 2) • CPU Board V3 または COD CPU Board V3 - CPU ボード (バージョン 3)
State	ボード状態。Active または Assigned、Available、- (ダッシュ) のいずれかの状態となります。- は、ボードの状態がこのスロットに適用されないことを示します。システムコントローラの場合は、Main または Spare のいずれかになります。ボード状態の詳細は、6 ページの「CPU/メモリーボードおよび I/O アセンブリのボード状態」を参照してください。
Status	現在のボードの状態。ボード状態の詳細は、6 ページの「ボードのテスト状態」を参照してください。
Domain	ボードが属するドメイン。ドメインの詳細は、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「概要」の章を参照してください。
メモリー情報	
Component	ボード、CPU、メモリー DIMM などのコンポーネント
J-No	ボード上のコンポーネントラベル
Size	DIMM のサイズ
Reason	報告されない値について、その原因を説明します。
ファームウェア情報	
Component	フラッシュ PROM を含むボード
Segment	ソフトウェアモジュール。ScApp、iPOST、POST、または OBP のいずれかになります。値が Ver の場合は、すべてのソフトウェアモジュールが結合されて特定のイメージを形成していることを示します。

表 3-11 showboards コマンドおよび showboards -v コマンドの出力ヘッダーの定義 (続き)

ヘッダー	説明
Compatible	そのコンポーネントが、Version 列に示された scapp バージョンに対応しているかどうかを示します。Yes または No、-(ダッシュ)のいずれかになります。-(ダッシュ)は、そのコンポーネントにファームウェアの互換性がないことを示します。システムコントローラの場合は、Reference が表示されて、Version 列に示されたファームウェアバージョンが、ファームウェアの互換性を判定する基準になることを示します。
In	そのファームウェアのソフトウェアモジュールを示す数値。この数値は、ファームウェアとの互換性を判定するために使用されます。
Date	サンで、フラッシュ PROM イメージが作成された年月日
Time	サンで、フラッシュ PROM イメージが作成された時刻 (時間 : 分)
Build	内部ビルド番号を示す数値。サンでのみ使用されます。
Version	コンポーネントと互換性のあるファームウェアのバージョン。電源の投入されていないシステムコントローラおよび電力が供給されていないボードには表示されません。
クロック状態	
Component	ボード
SSCx Signal	ボード上の SSC0 または SSC1 クロックの状態
Signal Used	ボードで使用されるクロック
Failover	ボードがクロックのフェイルオーバーに応答するかどうかを示します。
入出力状態	
Slot	I/O スロット
Populated	スロットにカードが取り付けられているかどうかを示します。
Slot Description	スロットの情報。カードタイプは、システムコントローラでは判定できません。Solaris オペレーティング環境で判定できます。
CPU 情報	
Component	CPU
CPU Mask	CPU のバージョン
Description	CPU のタイプ、速度、および外部キャッシュのサイズ
電源グリッド	
Component	ボード
Pwr	ボードの電源が投入されているか、切断されているかを示します。
Grid	ボードがどの電源グリッドにあるかを示します。

例 — ドメインシエル

コード例 3-55 ドメインシエルの showboards -a コマンド

```
schostname:A> showboards -a
```

Slot	Pwr	Component	Type	State	Status	Domain
----	---	-----		-----	-----	-----
/N0/SB0	On	CPU Board	V3	Active	Passed	A
/N0/SB1	On	CPU Board	V3	Active	Passed	A
/N0/SB2	On	CPU Board	V3	Active	Passed	A
/N0/SB3	On	CPU Board	V3	Active	Passed	A
/N0/SB4	On	CPU Board	V3	Active	Passed	A
/N0/SB5	On	CPU Board	V3	Active	Passed	A
/N0/SB0	On	CPU Board	V3	Active	Passed	A
/N0/SB0	On	CPU Board	V3	Active	Passed	A
/N0/SB0	On	CPU Board	V3	Active	Passed	A
/N0/SB0	On	CPU Board	V3	Active	Passed	A

showcodlicense

COD ライセンスデータベースに現在格納されている COD 使用権 (RTU) ライセンスを表示します。

適用範囲

プラットフォームシェル

プラットフォームシェルの構文

```
showcodlicense [-r] [-v]
```

```
showcodlicense -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-r を指定すると、ライセンスキーが COD ライセンスデータベースに格納されている場合に、そのライセンス情報が加工されていないそのままの形式で表示されます。

-v を指定すると、冗長モードになります。わかりやすい形式に加工されたライセンス情報と、加工されていないライセンスキーの両方が表示されます。

説明

表 3-12 に、showcodlicense コマンドで表示されるデフォルトの COD ライセンス情報を示します。

表 3-12 COD ライセンス情報

項目	説明
Description	リソースタイプ (プロセッサ)
Ver	ライセンスのバージョン番号
Expiration	NONE - サポートされていません (有効期限はありません)。
Count	指定したリソースに与えられている COD RTU ライセンスの数
Status	次のいずれかの状態を示します。 <ul style="list-style-type: none">• GOOD - リソースのライセンスが有効• EXPIRED - リソースのライセンスが無効

関連項目

addcodlicense、deletecodlicense、showcodusage

例

COD RTU ライセンスキーのデータをわかりやすく加工された形式で表示するには、次のように入力します。

コード例 3-56 showcodlicense コマンドの出力例 – わかりやすく加工された COD RTU ライセンスデータ

```
schostname:SC> showcodlicense
Description Ver      Expiration  Count  Status
-----
PROC        01          NONE        8     GOOD
```

COD RTU ライセンスキーを表示するには、次のように入力します。

コード例 3-57 showcodlicense -r コマンドの出力例 – COD RTU ライセンスキー

```
schostname:SC> showcodlicense -r
01:80d8a9ed:45135285:0201000000:8:00000000:J0WKZ8vpZ5kOgSJ7e8ZasA
```

COD RTU ライセンスキーのデータを、わかりやすく加工された形式および加工されていない形式の両方で表示するには、次のように入力します。

コード例 3-58 showcodlicense -v コマンドの出力例 – わかりやすく加工された COD RTU ライセンスデータと加工されていない COD RTU ライセンスデータ

```
schostname:SC> showcodlicense -v
Description Ver      Expiration  Count  Status
-----
PROC        01          NONE        8     GOOD
01:80d8a9ed:45135285:0201000000:8:00000000:J0WKZ8vpZ5kOgSJ7e8ZasA
```


showcodusage

COD リソースの現在の使用状況に関する統計情報を表示します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

プラットフォームシェルの構文

```
showcodusage [-v] [-p resource|domains|all] ...
```

```
showcodusage -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-p resource を指定すると、リソースタイプ別の COD の使用状況が表示されます。

-p domains を指定すると、ドメイン別の COD の使用状況が表示されます。

-p all を指定すると、リソースタイプ別およびドメイン別の両方で、COD の使用状況が表示されます。

-v を指定すると、冗長モードになります。

説明

このコマンドは、使用中の COD RTU ライセンスの現在の情報を表示します。デフォルトでは、使用中またはインストールされている COD RTU ライセンスの概要と、各リソースの現在の状況が表示されます。

関連項目

showcodlicense

例

リソース別の情報を表示するには、次のように入力します。

コード例 3-59 showcodusage コマンドのリソース別の出力例

```
schostname:SC> showcodusage -p resource
Resource      In Use  Installed  Licensed  Status
-----
PROC          0        4          8  OK: 8 available Headroom: 2
```

表 3-13 に、表示されるリソース情報を示します。

表 3-13 showcodusage リソース情報

項目	説明
Resource	COD リソース (プロセッサ)
In Use	現在システムで使用中の COD CPU の数
Installed	システムに取り付けられている COD CPU の数
Licensed	インストールされている COD RTU ライセンスの数
Status	次のいずれかの COD 状態を示します。 <ul style="list-style-type: none">• OK - 使用中の COD CPU に対して十分なライセンスがあることを示します。また、使用可能な COD リソースの残数と使用可能なインスタントアクセス CPU (headroom) の数を示します。• HEADROOM - 使用中のインスタントアクセス CPU の数を示します。• VIOLATION - ライセンス違反があることを示します。有効な COD RTU ライセンスが割り当てられていない、使用中の COD CPU の数を示します。この状態は、COD ライセンスデータベースから強制的に COD RTU ライセンスキーを削除したにもかかわらず、そのライセンスキーに関連する COD CPU の使用を続けた場合に発生します。

ドメイン別の情報を表示するには、次のように入力します。

コード例 3-60 showcodusage コマンドのドメイン別の出力例

```
schostname:SC> showcodusage -p domains -v
Domain/Resource  In Use  Installed  Reserved  Status
-----
A - PROC        6        8          4
  SB0 - PROC    4        4
  /N0/SB0/P0                                Licensed
```

コード例 3-60 showcodusage コマンドのドメイン別の出力例 (続き)

/N0/SB0/P1				Licensed
/N0/SB0/P2				Licensed
/N0/SB0/P3				Licensed
SB1 - PROC	2	4		
/N0/SB1/P0				Licensed
/N0/SB1/P1				Licensed
/N0/SB1/P2				Unlicensed
/N0/SB1/P3				Unlicensed
B - PROC	0	0	0	
C - PROC	0	0	0	
D - PROC	0	0	0	
Unused - PROC	0	4	0	
SB2 - PROC	0	4		
SB2/P0				Unused
SB2/P1				Unused
SB2/P2				Unused
SB2/P3				Unused

表 3-14 に、表示されるドメイン情報を示します。

表 3-14 showcodusage ドメイン情報

項目	説明
Domain/Resource	各ドメインの COD リソース (プロセッサ)。Unused と表示されたプロセッサは、ドメインに割り当てられていない COD CPU です。
In Use	現在ドメインで使用中の COD CPU の数
Installed	ドメインに取り付けられている COD CPU の数
Reserved	ドメインに割り当てられている COD RTU ライセンスの数
Status	次のいずれかの CPU 状態を示します。 <ul style="list-style-type: none"> • Licensed - COD CPU に対応する COD RTU ライセンスがあります。 • Unused - COD CPU は使用されていません。 • Unlicensed - COD CPU に対応する COD RTU ライセンスを取得していないので、COD CPU は使用できません。

リソースタイプ別およびドメイン別の両方で情報を表示するには、次のように入力します。

コード例 3-61 showcodusage コマンドのリソース別およびドメイン別の出力例

```
schostname:SC> showcodusage -v
Resource      In Use  Installed  Licensed  Status
-----
PROC          0        4         8  OK: 8 available Headroom: 2
Domain/Resource  In Use  Installed  Reserved  Status
-----
A - PROC          0         0         4
B - PROC          0         0         4
C - PROC          0         0         0
D - PROC          0         0         0
Unused - PROC     0         4         0
  SB4 - PROC      0         4
  SB4/P0
  SB4/P1
  SB4/P2
  SB4/P3
                                Unused
                                Unused
                                Unused
                                Unused
```

showcomponent

コンポーネントの状態を表示します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

プラットフォームシェルの構文

```
showcomponent [-v] [component] ...
```

```
showcomponent [-v] [-d domainID] ...
```

```
showcomponent -h
```

ドメインシェルの構文

```
showcomponent [-v] [component] ...
```

```
showcomponent -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。*component_name* 構文を含みます。

boardname は、CPU/メモリーボードの場合は SB0 ~ SB5 で、I/O アセンブリの場合は IB6 ~ IB9 です。

-d *domainID* の値は、a、b、c、または d です。ドメインに割り当てられているコンポーネントを表示します (プラットフォームのみ)。

説明

オプションを指定しないでこのコマンドを入力すると、ボードのすべてのコンポーネントの状態が表示されます。「構文」で示した 1 つ以上のオプションを指定すると、ボードの 1 つ以上のコンポーネントの状態が出力されます。

setls コマンドによって使用不可に設定したコンポーネント、または testboard コマンドによってテストしたときに問題ありと判定されたコンポーネントが表示されます。さらに、次の情報も表示されます。

- CPU/メモリーボードの場合は、CPU、メモリーモジュール (DIMM)、および外部 キャッシュに関する情報が表示されます。
- 論理メモリーバンクのサイズが表示されます。
- COD RTU ライセンスが割り当てられていない COD CPU コンポーネントの状態は、Cod-dis (COD 使用不可) と表示されます。詳細は、『Sun Fire ミッドレンジ システムプラットフォーム管理ガイド』の「Capacity on Demand」の章を参照してください。
- ご購入先の保守作業員による詳細な調査を必要とするコンポーネントがあると、POST 列に chs (コンポーネントの健全性状態) と表示されます。詳細は、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』の「自動診断および回復」の章を参照してください。

関連項目

set1s、『Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』

例

コード例 3-62 に、showcomponent sb0 コマンドの出力例を示します。Component フィールドの略語の意味は、次のとおりです。

Nx	ノード名
SBx	CPU/メモリーボード、x は 0 ~ 5 の値になります。
Px	ポート、x は 0 ~ 3 の値になります。
Bx	物理メモリーバンク、x は 0 ~ 1 の値になります。
Lx	論理メモリーバンク、x は 0 ~ 3 の値になります。

コード例 3-62 showcomponent の出力例

```

schostname: SC> showcomponent

/N0/SB4: is not powered on
Skipping /N0/SB4

Component          Status   Pending  POST   Description
-----
/N0/SB0/P0         enabled -         pass   UltraSPARC-IV, 1200MHz, 16M ECache
/N0/SB0/P1         enabled -         pass   UltraSPARC-IV, 1200MHz, 16M ECache
/N0/SB0/P2         enabled -         pass   UltraSPARC-IV, 1200MHz, 16M ECache
/N0/SB0/P3         enabled -         pass   UltraSPARC-IV, 1200MHz, 16M ECache
/N0/SB0/P0/B0/L0  enabled -         pass   1024M DRAM

```

コード例 3-62 showcomponent の出力例 (続き)

```

/N0/SB0/P0/B0/L2    enabled -      pass  1024M DRAM
/N0/SB0/P0/B1/L1    enabled -      untest empty
/N0/SB0/P0/B1/L3    enabled -      untest empty
/N0/SB0/P1/B0/L0    enabled -      pass  1024M DRAM
/N0/SB0/P1/B0/L2    enabled -      pass  1024M DRAM
/N0/SB0/P1/B1/L1    enabled -      untest empty
/N0/SB0/P1/B1/L3    enabled -      untest empty
/N0/SB0/P2/B0/L0    enabled -      pass  1024M DRAM
/N0/SB0/P2/B0/L2    enabled -      pass  1024M DRAM
/N0/SB0/P2/B1/L1    enabled -      untest empty
/N0/SB0/P2/B1/L3    enabled -      untest empty
/N0/SB0/P3/B0/L0    enabled -      pass  1024M DRAM
/N0/SB0/P3/B0/L2    enabled -      pass  1024M DRAM
/N0/SB0/P3/B1/L1    enabled -      untest empty
/N0/SB0/P3/B1/L3    enabled -      untest empty
/N0/SB2/P0           enabled -      pass  UltraSPARC-IV, 1050MHz, 16M ECache
/N0/SB2/P1           enabled -      pass  UltraSPARC-IV, 1050MHz, 16M ECache
/N0/SB2/P2           enabled -      pass  UltraSPARC-IV, 1050MHz, 16M ECache
/N0/SB2/P3           enabled -      pass  UltraSPARC-IV, 1050MHz, 16M ECache
/N0/SB2/P0/B0/L0    enabled -      pass  1024M DRAM
/N0/SB2/P0/B0/L2    enabled -      pass  1024M DRAM
/N0/SB2/P0/B1/L1    enabled -      untest empty
/N0/SB2/P0/B1/L3    enabled -      untest empty
/N0/SB2/P0/B0/L0    enabled -      pass  1024M DRAM
/N0/SB2/P0/B0/L2    enabled -      pass  1024M DRAM
.
.
.

```

コード例 3-62 およびコード例 3-63 のヘッダーの定義は次のとおりです。

- Component は、ボードおよびそのボード上のコンポーネントの名前を示します。
- Status は、ボードまたはコンポーネントの状態 (使用可能または使用不可) を示します。
- Pending は、次の再起動時に、コンポーネントがここで示された状態 (使用可能または使用不可) に変更されることを示します。
- POST は、コンポーネントの POST (電源投入時自己診断) の結果を示します。合格または問題あり、テスト未実行、CHS (コンポーネントの健全性状態) のいずれかの状態になります。CHS 状態と表示されたコンポーネントについては詳細な調査が必要なので、ご購入先にお問い合わせください。
- Description は、ボードまたはコンポーネントについての説明を示します。

コード例 3-63 に、`showcomponent ib6` の出力例を示します。Component フィールドの略語の意味は、次のとおりです。

- Nx ノード名
- IBx I/O アセンブリ、 x は 6 ~ 9 の値になります。
- Px ポート、 x は 0 ~ 1 の値になります。
- Bx バス、 x は 0 ~ 1 の値になります。
- Cx I/O アセンブリのカード、 x は 0 ~ 7 の値になります。

コード例 3-63 `showcomponent ib6` の出力例

```
schostname:SC> showcomponent ib6
```

Component	Status	Pending	POST	Description
/N0/IB6/P0	enabled	-	pass	IO Controller 0
/N0/IB6/P1	enabled	-	pass	IO Controller 1
/N0/IB6/P0/B0	enabled	-	untest	66/33MHz. EPCI/PCI Bus
/N0/IB6/P0/B1	enabled	-	untest	33MHz. PCI Bus
/N0/IB6/P1/B0	enabled	-	untest	66/33MHz. EPCI/PCI Bus
/N0/IB6/P1/B1	enabled	-	untest	66/33MHz. EPCI/PCI Bus
/N0/IB6/P0/B1/C0	enabled	-	untest	33MHz. 3.3V Short PCI card
/N0/IB6/P0/B1/C1	enabled	-	untest	33MHz. 3.3V Short PCI card
/N0/IB6/P0/B0/C2	enabled	-	untest	66/33MHz. 3.3V Long/Short PCIX/EPCI/PCI card
/N0/IB6/P0/B0/C3	enabled	-	untest	66/33MHz. 3.3V Long/Short PCIX/EPCI/PCI card
/N0/IB6/P1/B1/C4	enabled	-	untest	66/33MHz. 3.3V Long/Short PCIX/EPCI/PCI card
/N0/IB6/P1/B1/C5	enabled	-	untest	66/33MHz. 3.3V Long/Short PCIX/EPCI/PCI card
/N0/IB6/P1/B0/C6	enabled	-	untest	66/33MHz. 3.3V Long/Short PCIX/EPCI/PCI card
/N0/IB6/P1/B0/C7	enabled	-	untest	66/33MHz. 3.3V Long/Short PCIX/EPCI/PCI card

showdate

日付および時刻を表示します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

プラットフォームシェルの構文

```
showdate [-tv]
```

```
showdate -h
```

```
showdate [-v] [-d domainID]
```

ドメインシェルの構文

```
showdate [-tv]
```

```
showdate -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-t を指定すると、使用可能なタイムゾーンが一覧で表示されます。

-v を指定すると、冗長モードになります。

-d *domainID* の値は、a、b、c、または d です。プラットフォームからここで指定したドメインの日付が表示されます。

説明

プラットフォームまたは各ドメインの、現在の日付および時刻を表示します。プラットフォームシェルおよび各ドメインシェルの日付がプラットフォームシェルから取得されます。ドメインシェルの 1 つからコマンドを入力すると、現在のドメインの日付および時刻が戻されます。

関連項目

setdate

例 — プラットフォームシェル

コード例 3-64 プラットフォームシェルの showdate コマンド

```
schostname:SC> showdate  
Fri Mar 07 18:00:56 PST 2003
```

showdomain

ドメインの構成および状態を表示します。

適用範囲

ドメインシェル

構文

```
showdomain [-v] [-p part]...
```

```
showdomain -h
```

オプション / パラメタ

-v を指定すると、冗長モードになります。

-p *part* は、表示する情報を指定するパラメタです。次の内容を指定します。

- `acls` を指定すると、アクセス制御リストが表示されます。
- `bootparams` を指定すると、起動パラメタの情報が表示されます。
- `cod` を指定すると、ドメインに予約されている COD RTU ライセンスの数が表示されます。
- `loghosts` を指定すると、ログホストが表示されます。
- `mac` を指定すると、MAC アドレスが表示されます。
- `snmp` を指定すると、SNMP 設定が表示されます。
- `status` を指定すると、ドメイン状態が表示されます。

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

説明

ドメインの構成および状態を表示します。表示される情報には、設定できないものと、プラットフォームでのみ設定できるもの (アクセス制御リスト (ACL)、SNMP の使用可能の切り替え、COD パラメタなど) があります。引数を指定しないでこのコマンドを実行すると、`setupdomain` コマンドで設定されたすべてのパラメタ値が表示されます。

関連項目

`setupdomain`、`showdate`、`setupplatform`、`showplatform`

例

setupdomain コマンドで割り当てられたパラメタを表示するには、showdomain を入力します (コード例 3-65)。

コード例 3-65 showdomain コマンドの例

```
schostname:A> showdomain

Domain  Solaris Nodename  Domain Status  Keyswitch
-----  -----
A      -                    Powered Off    off

diag-level = default
verbosity-level = min
error-level = max
interleave-scope = within-board
interleave-mode = optimal
reboot-on-error = true
hang-policy = reset
OBP.use-nvramrc? = <OBP default>
OBP.auto-boot? = <OBP default>
OBP.error-reset-recovery = <OBP default>

Loghost for Domain A:
Log Facility for Domain A: local0

SNMP Agent: enabled
Domain Description:
Domain Contact:
Trap Hosts:
Public Community String:
Private Community String:

ACL for Domain A: SB0 SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 IB6 IB7 IB8 IB9

PROC RTUs reserved for domain A: 0

schostname:A>
```

setupdomain コマンドで割り当てられたパラメタの詳細を表示するには、showdomain -v と入力します (コード例 3-66)。

コード例 3-66 showdomain -v コマンドの例

```
schostname:A> showdomain -v
```

Domain	Solaris Nodename	Domain Status	Keyswitch
A	-	Powered Off	off

Domain Boot Parameters

```
-----  
diag-level = default  
verbosity-level = min  
error-level = max  
interleave-scope = within-board  
interleave-mode = optimal  
reboot-on-error = true  
hang-policy = reset  
OBP.use-nvramrc? = <OBP default>  
OBP.auto-boot? = <OBP default>  
OBP.error-reset-recovery = <OBP default>
```

	MAC Address	HostID
Domain A	xx:xx:xx:xx:xx:xx	xxxxxxxx

Loghosts

```
-----  
Loghost for Domain A:  
Log Facility for Domain A: local0
```

SNMP

```
-----  
SNMP Agent: enabled  
Domain Description:  
Domain Contact:  
Trap Hosts:  
Public Community String:  
Private Community String:
```

SNMP packets received: 0
SNMP packets sent: 0
SNMP traps sent: 0

コード例 3-66 showdomain -v コマンドの例 (続き)

```
ACLS
----
ACL for Domain A: SB0 SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 IB6 IB7 IB8 IB9

COD
---
PROC RTUs reserved for domain A: 0

schostname:A>
```

起動パラメタの情報を表示するには、次のように入力します (コード例 3-67)。

コード例 3-67 起動パラメタの情報を表示する showdomain -p bootparams コマンドの例

```
schostname:A> showdomain -p bootparams

diag-level = default
verbosity-level = min
error-level = max
interleave-scope = within-board
interleave-mode = optimal
reboot-on-error = true
hang-policy = reset
OBP.use-nvramrc? =<OBP default>
OBP.auto-boot? = <OBP default>
OBP.error-reset-recovery = <OBP default>

schostname:A>
```

showenvironment

システム (プラットフォームシェル) または現在のドメイン (ドメインシェル) の、現在の環境状態、温度、電流、電圧、およびファン状態を表示します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

プラットフォームシェルの構文

```
showenvironment [-ltvuw] [-d domainID] [-p part]  
showenvironment [-ltvuw] board_name  
showenvironment -h
```

ドメインシェルの構文

```
showenvironment [-ltvuw] [-p part]  
showenvironment [-ltvuw] board_name [board_name ...]  
showenvironment -h
```

オプション / パラメタ

board_name はボード名です。このボードの情報だけが表示されます。複数のボード名を入力できます。

-d *domainID* の値は、a、b、c、または d です。そのドメインに割り当てられたボードの情報が表示されます。

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-l を指定すると、選択された各測定値に適用する制限が表示されます。これらの値は、各測定値に対するしきい値です。しきい値を超えると、状態に Max または Min が表示されます。

-p *part* を指定すると、指定した部分の情報が表示されます (表 3-15)。

表 3-15 showenvironment -p *part* の説明

レポート	説明
currents	電流を表示します (電源装置のみ)。
fans	ファンの状態を表示します。
faults	無効になっている可能性のある値を表示します。
temps	温度のみを表示します。
voltage	電圧のみを表示します。

-t を指定すると、ヘッダーのタイトルが出力されます。

-u を指定すると、データが更新されます。すべてのセンサーにポーリングして最新の値を取得します。

-v を指定すると、冗長モードになります。-l および -w を指定した場合と同じ結果が得られます。

-w を指定すると、警告のしきい値が表示されます。

説明

システム (プラットフォームシェル) または現在のドメイン (ドメインシェル) の、現在の環境状態、温度、電流、電圧、およびファン状態を表示します。ドメインシェルの場合、CPU/メモリーボード、I/O アセンブリなどのドメインに割り当てられているボードだけが表示されます。ボードの電源が投入されている必要があります。電源が投入されていないボードは監視されず、環境データもありません。

このコマンドでは、最大値および最小値が表示されます。これらの値を超えた場合、コンポーネント (およびコンポーネントを使用するドメイン) が停止されます。制限値に近付いていることをシステムコントローラが警告している場合は、その警告レベルも表示されます。

showenvironment の出力ヘッダーおよび値については、表 3-16 を参照してください。

表 3-16 showenvironment の出力ヘッダーの説明

ヘッダー	値	説明
Slot		スロット ID
Device		センサーが監視している装置
Sensor		装置の環境データを測定するコンポーネント
Value		センサーが戻す値
Units		センサーが使用する単位
	Degrees C	摂氏温度
	Volts DC	ボルト
	Amps	Amps
Age		値を取得してから表示するまでの経過時間 (秒)
Status		状態についての値。Value 列を参照。Value 列に表示される値が規定された値を超えている場合に、警告メッセージが記録されます。
	WARNING LOW	
	NOTICE Low	
	OK	
	NOTICE High	
	WARNING HIGH	
	error	
	failed	
	ignored	
	unavailable	
LoWarn		-v および -w オプションを指定したときだけ表示されます。表示された値を超えると、警告メッセージが記録されます。
HiWarn		-v および -w オプションを指定したときだけ表示されます。表示された値を超えると、警告メッセージが記録されます。

表 3-16 showenvironment の出力ヘッダーの説明 (続き)

ヘッダー	値	説明
Min		-v および -1 オプションを指定したときに表示されます。これは警告メッセージではありません。 Min は、コンポーネント (そのコンポーネントを使用するすべてのドメインを含む) を保護するために、電源が切断される場合の最小値です。
Max		-v および -1 オプションを指定したときに表示されます。これは障害状態ではありません。 Max は、コンポーネント (そのコンポーネントを使用するすべてのドメインを含む) を保護するために、電源が切断される場合の最大値です。

例

プラットフォームシェルで showenvironment コマンドを実行すると、コード例 3-68 に示すように、Slot 番号、Device、Sensor、Value、Units、Age、および Status が表示されます。

コード例 3-68 プラットフォームシェルに対する showenvironment コマンドの例

```
schostname:SC> showenvironment
```

Slot	Device	Sensor	Value	Units	Age	Status
SSC0	SBBC 0	Temp. 0	47	Degrees C	4 sec	OK
SSC0	CBH 0	Temp. 0	53	Degrees C	4 sec	OK
SSC0	SSC 0	Temp. 0	33	Degrees C	4 sec	OK
SSC0	SSC 0	Temp. 1	33	Degrees C	4 sec	OK
SSC0	SSC 0	Temp. 2	37	Degrees C	4 sec	OK
SSC0	Board 0	1.5 VDC 0	1.50	Volts DC	4 sec	OK
SSC0	Board 0	3.3 VDC 0	3.37	Volts DC	4 sec	OK
SSC0	Board 0	5 VDC 0	5.05	Volts DC	4 sec	OK
PS0	48 VDC 0	Current 0	10.47	Amps	3 sec	OK
PS0	48 VDC 0	48 VDC 0	56.07	Volts DC	3 sec	OK
PS0	48 VDC 0	Temp. 0	33	Degrees C	3 sec	OK
PS0	48 VDC 1	Current 0	0.78	Amps	3 sec	OK
PS0	48 VDC 1	48 VDC 0	54.76	Volts DC	3 sec	OK
PS1	48 VDC 0	Current 0	9.61	Amps	3 sec	OK
PS1	48 VDC 0	48 VDC 0	56.07	Volts DC	3 sec	OK
PS1	48 VDC 0	Temp. 0	28	Degrees C	3 sec	OK
PS1	48 VDC 1	Current 0	0.15	Amps	3 sec	OK

コード例 3-68 プラットフォームシェルに対する showenvironment コマンドの例 (続き)

```

PS2      48 VDC 0   Current 0 11.50 Amps          2 sec OK
PS2      48 VDC 0   48 VDC 0 56.07 Volts DC       2 sec OK
PS2      48 VDC 0   Temp. 0 26      Degrees C    2 sec OK
PS2      48 VDC 1   Current 0 0.15 Amps          2 sec OK
PS2      48 VDC 1   48 VDC 0 54.76 Volts DC       2 sec OK
FT0      Fan 0     Cooling 0 Low                2 sec OK
FT1      Fan 0     Cooling 0 Low                1 sec OK
FT2      Fan 0     Cooling 0 Low                1 sec OK
RP0      Board 0   1.5 VDC 0 1.51  Volts DC       9 sec OK
RP0      Board 0   3.3 VDC 0 3.39  Volts DC       9 sec OK
RP0      Board 0   Temp. 0 32     Degrees C    9 sec OK
RP0      Board 0   Temp. 1 33     Degrees C    9 sec OK
RP0      SDC 0     Temp. 0 71     Degrees C    9 sec OK
RP0      AR 0     Temp. 0 59     Degrees C    9 sec OK
.
.
.

/N0/SB0 Board 0   1.5 VDC 0 1.51  Volts DC       8 sec OK
/N0/SB0 Board 0   3.3 VDC 0 3.29  Volts DC       8 sec OK
/N0/SB0 SDC 0     Temp. 0 66     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB0 AR 0     Temp. 0 52     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB0 DX 0     Temp. 0 59     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB0 DX 1     Temp. 0 61     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB0 DX 2     Temp. 0 61     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB0 DX 3     Temp. 0 59     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB0 SBBC 0   Temp. 0 61     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB0 Board 1  Temp. 0 29     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB0 Board 1  Temp. 1 30     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB0 CPU 0    Temp. 0 63     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB0 CPU 0    Core 0 1.36  Volts DC       9 sec OK
/N0/SB0 CPU 1    Temp. 0 65     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB0 CPU 1    Core 1 1.36  Volts DC       9 sec OK
/N0/SB0 SBBC 1   Temp. 0 47     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB0 Board 1  Temp. 2 30     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB0 Board 1  Temp. 3 30     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB0 CPU 2    Temp. 0 67     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB0 CPU 2    Core 2 1.36  Volts DC       9 sec OK
/N0/SB0 CPU 3    Temp. 0 65     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB0 CPU 3    Core 3 1.36  Volts DC       9 sec OK
/N0/SB2 Board 0   1.5 VDC 0 1.51  Volts DC       9 sec OK
/N0/SB2 Board 0   3.3 VDC 0 3.27  Volts DC       9 sec OK
/N0/SB2 SDC 0    Temp. 0 61     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB2 AR 0    Temp. 0 49     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB2 DX 0    Temp. 0 57     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB2 DX 1    Temp. 0 60     Degrees C    9 sec OK
/N0/SB2 DX 2    Temp. 0 62     Degrees C    9 sec OK

```

コード例 3-68 プラットフォームシェルに対する showenvironment コマンドの例 (続き)

```
/N0/SB2 DX 3            Temp. 0    61            Degrees C    9 sec OK
.
.
.
/N0/SB2 Board 1        Temp. 2    28            Degrees C    9 sec OK
/N0/SB2 Board 1        Temp. 3    28            Degrees C    10 sec OK
/N0/SB2 CPU 2          Temp. 0    58            Degrees C    10 sec OK
/N0/SB2 CPU 2          Core 2     1.34          Volts DC     10 sec OK
/N0/SB2 CPU 3          Temp. 0    56            Degrees C    10 sec OK
/N0/SB2 CPU 3          Core 3     1.34          Volts DC     10 sec OK
/N0/IB6 Board 0        1.5 VDC 0 1.51      Volts DC     9 sec OK
/N0/IB6 Board 0        3.3 VDC 0 3.33      Volts DC     9 sec OK
.
.
.
/N0/IB8 SBBC 0         Temp. 0    59            Degrees C    10 sec OK
/N0/IB8 IOASIC 0       Temp. 0    60            Degrees C    10 sec OK
/N0/IB8 IOASIC 1       Temp. 1    54            Degrees C    10 sec OK
```

showerrorbuffer

エラーバッファの内容を表示します。

適用範囲

プラットフォームシェル

構文

```
showerrorbuffer [-p [-n nnn]]
```

```
showerrorbuffer -h
```

オプション / パラメタ

`-p` を指定すると、SC V2 の永続システムエラーバッファに保存されているメッセージが表示されます。このオプションは、ログメッセージおよびシステムエラー用の永続記憶領域を提供する SC V2 で構成されているシステムで有効です。

`-n nnn` を指定すると、指定した件数 (*nnn* に整数で指定) のエラーメッセージが日付順に表示されます。たとえば、`-p -n 5` を指定すると、永続システムエラーバッファに保存されているエラーメッセージの最新の 5 件が表示されます。

`-h` を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

説明

システムのハードウェアエラーレジスタによって検出されたエラーメッセージ情報を取得して、エラーバッファに格納します。

すべての Sun Fire ミッドレンジシステムには、システムのエラーレコードを短期的に保存する、動的な `showerrorbuffer` があります。システムエラーがメッセージログバッファに記録されると、動的な `showerrorbuffer` のシステムエラーレコードは、`showerrorbuffer` にさらに領域が必要になったときに自動的に消去されます。

SC V2 が構成されているミッドレンジシステムには、動的な `showerrorbuffer` と永続的な `showerrorbuffer` の両方があります。永続的な `showerrorbuffer` は、発生したシステムエラーを取得し、`showerrorbuffer` がいっぱいになるまでシステムエラーレコードを格納します。永続的な `showerrorbuffer` がいっぱいになると、新しいシステムエラーレコードによって、永続的な `showerrorbuffer` 内の既存のエラーレコードが先頭から上書きされます。

- SC V2 が構成されており、永続的なエラーバッファの機能を持つシステムの場合、`-p` および `-n` オプションを使用して、永続記憶バッファに保存されているメッセージを表示できます。この情報は、システムの再起動が発生しても保持されます。
- システムのエラーバッファが小さい (SC に拡張メモリーがない) 場合、エラーメッセージは永続的には保存されません。ただし、エラーが発生すると自動的にドメインを再起動するように設定している場合は、`showerrorbuffer` コマンドを実行することによってエラーメッセージを表示できます。`showerrorbuffer` コマンドを実行しないと、ドメインを再起動したときにエラーメッセージが失われる可能性があります。

ユーザーおよび保守プロバイダは、このコマンドを使用して、障害追跡のための情報を入手できます。

関連項目

なし

例

コード例 3-69 に、インターコネクトテストで発生したエラーを示します。

コード例 3-69 `showerrorbuffer` コマンドのインターコネクトテストの出力例

```
schostname: SC> showerrorbuffer
ErrorData[0]
  Date: Tue Jun 04 11:11:32 PDT 2002
  Device: /partition0/domain0/SB0/ar0
  Register: InterconnectTestError[0x40] : 0x00080400
           FailBit [15:00] : 0x400
           FailGroup [31:16] : 0x8
ErrorData[1]
  Date: Tue Jun 04 11:11:42 PDT 2002
  Device: /partition0/domain0/IB8/ar0
  Register: InterconnectTestError[0x40] : 0x00020001
           FailBit [15:00] : 0x1
           FailGroup [31:16] : 0x2
ErrorData[2]
  Date: Tue Jun 04 11:11:42 PDT 2002
  Device: /partition0/domain0/IB8/ar0
  Register: InterconnectTestError[0x40] : 0x00040001
           FailBit [15:00] : 0x1
           FailGroup [31:16] : 0x4
```

コード例 3-70 に、ハードウェアエラーを示します。

コード例 3-70 showerrorbuffer コマンドのハードウェアエラーの出力例

```
schostname:SC> showerrorbuffer
ErrorData[0]
  Date: Thu Jul 25 11:13:30 PDT 2002
  Device: /SSC0/sbbc0/systemepld
  Register: FirstError[0x10] : 0x0200
           SB0 encountered the first error
ErrorData[1]
  Date: Thu Jul 25 11:13:30 PDT 2002
  Device: /partition0/domain0/SB0/bbcGroup0/repeaterepld
  Register: FirstError[0x10]: 0x0040
           sbbc0 encountered the first error
ErrorData[2]
  Date: Thu Jul 25 11:13:30 PDT 2002
  Device: /partition0/domain0/SB0/sdc0
  Register: SafariPortError[0x200] : 0x00000001
           ParBidiErr [00:00] : 0x1 ParityBidi error
ErrorData[3]
  Date: Thu Jul 25 11:13:30 PDT 2002
  Device: /partition0/domain0/SB0/bbcGroup0/sbbc0
  Register: ErrorStatus[0x80] : 0x00000100
           SafErr [09:08] : 0x1 Fireplane device asserted an error
```

コード例 3-71 に、永続システムエラーバッファに保存されたハードウェアエラーの最新の 2 件を表示する例を示します。

コード例 3-71 showerrorbuffer コマンドの出力例 – 永続的に保存されたエラー情報

```
schostname:SC> showerrorbuffer -p -n 2
  Date: Mon Jan 12 13:44:41 PST 2004
  Device: /partition0/domain1/SB4/bbcGroup1/cpuCD/cpusafariagent1/cheetahplusplus0
  ErrorID: 0x73a2113f
  Register: AFSR_2 (high)[0x591] : 0x00080000
           PERR [19:19] : 0x1

  Date: Mon Jan 12 13:44:41 PST 2004
  Device: /partition0/domain1/SB4/bbcGroup1/cpuCD/cpusafariagent1/cheetahplusplus0
  ErrorID: 0x7372102f
  Register: EMU C[0x521] : 0x00000004
           CPQ_TO [02:02] : 0x1 CPQ system bus timeout
```

showescape

現在のエスケープシーケンスを表示します。

構文

```
showescape  
showescape -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

説明

現在のエスケープシーケンスを表示します。

関連項目

setescape

例

コード例 3-72 に、エスケープシーケンスを示します。

コード例 3-72 showescape コマンドの出力例

```
schostname: SC>showescape  
#.
```


showfailover

システムコントローラ (SC) フェイルオーバーおよびクロックフェイルオーバーの状態を表示します。

適用範囲

プラットフォームシェル

構文

```
showfailover -v
```

```
showfailover -h
```

オプション / パラメタ

-v を指定すると、冗長モードになります。SC フェイルオーバーおよびクロックフェイルオーバーの両方の状態を含む、すべての有効なコマンド情報を表示します。フェイルオーバー状態が **degraded** (「説明」の項を参照) であると考えられる場合に、このオプションを指定すると、メイン SC では制御できてもスペア SC では制御できないボードが表示されます。

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

説明

SC フェイルオーバーおよびクロックフェイルオーバーの状態を監視できます。SC フェイルオーバーの状態は、次の状態のいずれかになります。

- **enabled and active** – SC フェイルオーバーは使用可能で、正常に機能しています。
- **disabled** – SC フェイルオーバーは、オペレータからの要求 (`setfailover off`) か、フェイルオーバーの発生によって使用不可になっています。
- **enabled but not active** – SC フェイルオーバーは使用可能ですが、スペア SC や、メインおよびスペア SC 間のセンタープレーンなどのコンポーネントが、フェイルオーバー準備状態 (使用可能で応答できる状態) になっていません。
- **degraded** – メイン SC とスペア SC がバージョンの異なるファームウェアを実行していて、次のいずれかの状態である場合には、SC フェイルオーバーによって「縮退」が発生します。

- メイン SC のファームウェアのバージョンが、スペア SC のファームウェアより新しい
- システム内に、メイン SC では制御できるが、スペア SC では制御できないボードがある

クロックフェイルオーバーの状態は、次のいずれかになります。

- `enabled` - クロックフェイルオーバーは使用可能です。
- `disabled` - クロックフェイルオーバーは、ハードウェアの問題により自動的に使用不可になっています。

関連項目

`setfailover`、`setupplatform`、`showsc`、`showlogs`、`showplatform`

例

- フェイルオーバーが使用可能で機能している場合は、次のように表示されます。

コード例 3-73 フェイルオーバーが正常に機能していることを示す `showfailover` コマンド

```
schostname:SC> showfailover  
SC Failover: enabled and active.
```

- フェイルオーバーが使用不可になっている場合は、次のように表示されます。

コード例 3-74 フェイルオーバーが使用不可であることを示す `showfailover` コマンド

```
schostname:SC> showfailover  
SC Failover: disabled
```

- SC フェイルオーバーおよびクロックフェイルオーバーの状態は、次のように表示されます。

コード例 3-75 冗長モードでの `showfailover` コマンド

```
schostname:SC> showfailover -v  
SC:SSC1  
Main System Controller  
SC Failover: enabled and active.  
Clock failover enabled.
```

- システムがフェイルオーバー準備状態でないために、フェイルオーバーは使用可能でも動作していない場合は、次のように表示されます。

コード例 3-76 SC フェイルオーバーが動作していないことを示す `showfailover` コマンド

```
schostname:SC> showfailover  
SC Failover: enabled but not active.
```

showfru

現在 Sun Fire ミッドレンジシステムに取り付けられている現場交換可能ユニット (FRU) を表示します。

適用範囲

プラットフォームシェル

構文

```
showfru [-v] -r record
```

```
showfru -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-v を指定すると、冗長モードになります。

-r *record* には FRU 識別情報 (FRUID) レコードを指定します。FRUID レコードには、FRU に固有の情報が含まれています。サポートされるレコード形式は、*manr* (製造レコード) です。

説明

Sun Fire ミッドレンジシステムの FRU を一覧表示します。この情報は、保守プロバイダが、取り付けられている FRU を追跡するために使用します。

FRU 情報を表示するのに数分かかる場合があります。その場合、FRU データの読み込み中は待機が必要であることを示すメッセージが表示されます。

例

コード例 3-77 に、Sun Fire ミッドレンジシステムの FRU の製造レコードの出力を示します。

コード例 3-77 showfru -r manr コマンドの出力例

```

schostname:SC> showfru -r manr
Component          Part #           Serial Date      Time           Vend
-----
SSC0               501-5407-06-50  001304 01/03/2001 01:35:36/PST 012c
ID0                501-4970-03-08  000071 12/30/2000 07:50:35/PST 001c
PS0                300-1459-03-01  D00040 11/29/2000 12:18:53/PST 009d
PS1                300-1459-03-01  D00041 11/28/2000 11:48:36/PST 009d
PS2                300-1459-03-01  D00493 11/27/2000 09:21:48/PST 009d
FT0                540-3639-01-02  WM1035 12/29/2000 10:41:32/PST 028f
FT1                540-3639-01-02  WM105L 01/18/2001 11:57:09/PST 028f
FT2                540-3639-04-02  WM100M 08/15/2000 09:37:47/PDT 028f
RP0                501-4953-08-50  001298 12/11/2000 11:35:59/PST 012c
RP2                501-4953-08-50  001480 12/08/2000 10:06:34/PST 012c
/N0/SB0            501-4362-07-50  007072 12/24/2000 03:11:01/PST 012c
/N0/SB2            501-4362-06-04  004011 08/11/2000 03:39:54/PDT 012c
/N0/SB0/P0/B0/D0  501-5401-06-01  021929 12/31/2000 04:00:00/PST 7800
/N0/SB0/P0/B0/D1  501-5401-06-01  021923 12/31/2000 04:00:00/PST 7800
/N0/SB0/P0/B0/D2  501-5401-06-01  021821 12/31/2000 04:00:00/PST 7800
/N0/SB0/P0/B0/D3  501-5401-06-01  021888 12/31/2000 04:00:00/PST 7800
/N0/SB0/P1/B0/D0  501-5401-06-01  021922 12/31/2000 04:00:00/PST 7800
/N0/SB0/P1/B0/D1  501-5401-06-01  021921 12/31/2000 04:00:00/PST 7800
/N0/SB0/P1/B0/D2  501-5401-06-01  021870 12/31/2000 04:00:00/PST 7800
/N0/SB0/P1/B0/D3  501-5401-06-01  021939 12/31/2000 04:00:00/PST 7800
.
.
.
/N0/SB0/P2/E1     370-4125-01-35  391A6H 12/03/2000 10:55:47/PST 00ce
/N0/SB0/P3/E0     370-4125-01-35  391A6A 12/03/2000 10:57:29/PST 00ce
/N0/SB0/P3/E1     370-4125-01-35  391A5Y 12/03/2000 10:59:48/PST 00ce
/N0/IB6           501-4404-08-50  002404 12/21/2000 04:31:04/PST 012c
IB8               501-4868-04-07  000165 10/03/2000 09:55:38/PDT 012c

```

showkeyswitch

キースイッチの設定を表示します。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

プラットフォームシェルの構文

```
showkeyswitch [-v] -d domainID
```

```
showkeyswitch -h
```

ドメインシェルの構文

```
showkeyswitch [-v]
```

```
showkeyswitch -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-v を指定すると、冗長モードになります。

-d *domainID* には、a、b、c、または d を指定します (プラットフォームシェルのみ)。

関連項目

setkeyswitch、showdomain、showplatform

説明

キースイッチの設定を表示します。

例

コード例 3-78 キースイッチが **on** に設定されていることを示している
showkeyswitch の例

```
schostrname:A> showkeyswitch  
keyswitch is: on
```

コード例 3-79 キースイッチが **off** に設定されていることを示している
showkeyswitch の例

```
schostrname:A> showkeyswitch  
keyswitch is: off
```

コード例 3-80 キースイッチが **standby** に設定されていることを示している
showkeyswitch の例

```
schostrname:A> showkeyswitch  
keyswitch is: standby
```

showlogs

システムコントローラがログに記録したイベントを表示します。これらのイベントは、システムコントローラのメッセージバッファに格納されています。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

プラットフォームシェルの構文

```
showlogs [-d domainID] [-p [-f filter][-n nnn]] [-v]
```

```
showlogs -h
```

ドメインシェルの構文

```
showlogs [-v]
```

```
showlogs -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-d *domainID* には、ドメイン (a、b、c、または d) を指定します (プラットフォームシェルのみ)。

-p を指定すると、SC V2 で構成されたシステムの永続記憶領域に保持されているログメッセージが表示されます。

-f *filter* を指定すると、指定した種類のログメッセージが表示されます。*filter* には、次のいずれかを指定します。

- alert - 警報メッセージ
- critical - 重大メッセージ
- emergency - 緊急メッセージ
- error - エラーメッセージ
- fault - 障害メッセージ
- warning - 警告メッセージ

-n *nnn* を指定すると、*nnn* (整数) に指定した件数のメッセージが日付順に表示されます。たとえば、-p -n 5 を指定すると、保存されているログメッセージの最新の 5 件が表示されます。

-v を指定すると、冗長モードになります。

説明

システムの動的バッファに格納されている、プラットフォームおよび各ドメインのログメッセージを表示します。この動的バッファのメッセージ記憶領域は一時的なもので、次のように処理されます。

- 動的バッファがいっぱいになると、コンソールに記録された古いメッセージは新しいメッセージで上書きされます。これらは、システムコントローラからのメッセージで、Solaris オペレーティング環境のメッセージではありません。
- 動的バッファは、システムコントローラの再起動または電力供給の停止が発生すると消去されます。

SC V2 で構成されたシステムでは、動的バッファ内の、重要度が `.alert`、`.error`、`.emerg`、`.warning`、および `.critical` のメッセージは、永続記憶領域に保持されて、システムの再起動または電力供給の停止が発生しても消去されません。永続記憶バッファがいっぱいになると、新しいメッセージはバッファの先頭に折り返され、バッファの先頭にある既存のメッセージが最新のメッセージで上書きされます。

ログは、プラットフォームのシステムコントローラごとおよびドメインごとに存在します。ログホストを設定すると、ログホストにもメッセージが記録されて保持されます (プラットフォームでは `setupplatform` コマンド、各ドメインでは `setupdomain` コマンドを使用して、プラットフォームと各ドメインのログホストを個別に設定します)。

関連項目

`setupdomain`、`setupplatform`、`showdomain`、`showplatform`

例

コード例 3-81 に、システムを再起動したあとで、プラットフォームシェルで実行された `showlogs` コマンドの出力を示します。

コード例 3-81 システムの再起動後に実行する `showlogs` コマンドの出力例

```
schostrname:SC> showlogs
Dec 01 16:50:32 hostname Platform.SC: [ID 827764 local0.notice] Boot: ScApp 5.17.0, RTOS 38
```

コード例 3-81 システムの再起動後に実行する showlogs コマンドの出力例 (続き)

```
Dec 01 16:50:38 hostname Platform.SC: [ID 595276 local0.notice] Clock Source: 75MHz
Dec 01 16:51:02 hostname Platform.SC: [ID 367723 local0.notice] Chassis is in single
partition mode.
Dec 01 16:53:40 hostname Platform.SC: [ID 530026 local0.notice] Main System Controller
Dec 01 16:53:48 hostname Platform.SC: [ID 588369 local0.notice] Starting SNMP agent.
Dec 01 16:53:49 hostname Platform.SC: [ID 942133 local0.notice] Starting telnet server ...
Dec 01 16:53:49 hostname Platform.SC: [ID 710711 local0.notice] SC Failover: disabled
Dec 01 16:54:01 hostname Platform.SC: [ID 728126 local0.notice] Clock failover enabled.
Dec 01 16:54:55 hostname Platform.SC: [ID 862046 local0.warning] Frame Manager connected.
ID: 0003ba:1d57f6
```

コード例 3-82 に、SC V2 で構成されたシステムの永続ログを表示する、プラットフォームシェルで実行された showlogs コマンドの出力を示します。

コード例 3-82 showlogs コマンドの永続ログの出力例

```
schostname:SC> showlogs -p

Jan 05 10:55:29 schostname Platform.SC: [ID 207559 local0.error] SB2/P2/B0/D2:
SepromSection(constructor): Invalid CRC observed=00 expected=59
Jan 05 10:55:30 schostname Platform.SC: [ID 494536 local0.error] SB2/P2/B0/D3:
SepromSection(constructor): Invalid Header Length offset=1800 seg_count=5
headerLen=22
Jan 05 10:55:30 schostname Platform.SC: [ID 328118 local0.error] SB2/P2/B0/D3:
SepromSection(constructor): Invalid CRC observed=00 expected=59
.
.
.
Jan 05 10:55:51 schostname Platform.POST: [ID 232495 local0.error] SB2/P0 has
invalid DFRUID status: -16
.
.
.
Jan 05 11:08:11 schostname Platform.SC: [ID 353467 local0.crit] ErrorMonitor:
Domain B has a SYSTEM ERROR
Jan 05 11:08:13 schostname Platform.SC: [ID 325303 local0.error] [AD] Event: SF4800
CSN: 041H3371 DomainID: B ADInfo: 1.SCAPP.17.0\
Time: Mon Jan 05 11:08:13 PST 2004
FRU-List-Count: 0; FRU-PN: ; FRU-SN: ; FRU-LOC: UNRESOLVED
Recommended-Action: Service action required

Jan 06 14:01:26 schostname Platform.SC: [ID 695969 local0.crit] Domain B is
currently paused due to an error. This domain must be turned off via
"setkeyswitch off" to recover
Jan 06 14:18:54 schostname Platform.POST: [ID 416500 local0.error]
/partition0/domain1/IB8/bbcGroup0/pci/schizo0: has invalid DFRUID status: 16
```

コード例 3-82 showlogs コマンドの永続ログの出力例 (続き)

```
.  
.  
Jan 12 13:41:45 schostname Platform.SC: [ID 430298 local0.warning] WARNING: Host  
ID information is missing  
Jan 12 13:42:14 schostname Platform.SC: [ID 273116 local0.error] PS0:  
SepromSection.readSegments: invalid section header data seg_offs = 1f00 seg_len  
= 0100  
.  
.  
.  
Jan 14 17:46:03 schostname Platform.POST: [ID 416500 local0.error]  
/partition0/domain1/IB8/bbcGroup0/pci/schizo0: has invalid DFRUID status: 16
```

コード例 3-83 に、重大 (critical) メッセージのみを表示する、永続ログの出力を示します。

コード例 3-83 showlogs コマンドの永続ログの出力例、重大 (Critical) メッセージのみ

```
hostname:SC> showlogs -p -f critical  
  
Jan 05 11:08:11 schostname Platform.SC: [ID 353467 local0.crit] ErrorMonitor:  
Domain B has a SYSTEM ERROR  
Jan 05 11:08:13 schostname Platform.SC: [ID 695969 local0.crit] Domain B is  
currently paused due to an error. This domain must be turned off via  
"setkeyswitch off" to recover  
Jan 06 11:06:28 schostname Platform.SC: [ID 353467 local0.crit] ErrorMonitor:  
Domain B has a SYSTEM ERROR  
.  
.  
.  
Jan 06 15:16:09 schostname Platform.SC: [ID 695969 local0.crit] Domain B is  
currently paused due to an error. This domain must be turned off via  
"setkeyswitch off" to recover  
Jan 12 09:23:30 schostname Platform.SC: [ID 353467 local0.crit] ErrorMonitor:  
Domain B has a SYSTEM ERROR  
Jan 12 09:23:37 schostname Platform.SC: [ID 695969 local0.crit] Domain B is  
currently paused due to an error. This domain must be turned off via  
"setkeyswitch off" to recover
```

コード例 3-84 に、指定した件数のメッセージを表示する、永続ログの出力を示します。保存されたメッセージの最新の 5 件が表示されています。

コード例 3-84 showlogs コマンドの永続ログの出力例、5 件のメッセージの表示

```
hostname:SC> showlogs -p -n 5

Jan 12 13:43:44 schostname Platform.POST: [ID 416500 local0.error]
/partition0/domain1/IB8/bbcGroup0/pci/schizo0: has invalid DFRUID status: 16
Jan 12 13:44:41 schostname Platform.SC: [ID 806378 local0.error] /N0/SB4: marked
as Failed! errorReg = 0x0040
"setkeyswitch off" to recover
Jan 12 13:44:52 schostname Platform.SC: [ID 797753 local0.error] [AD] Event: SF4800
CSN: 041H3371 DomainID: B ADInfo: 1.SCAPP.17.0
Time: Mon Jan 12 13:44:45 PST 2004
FRU-List-Count: 1
ASIC.CHEETAH.EMU_NCPQ_TO.7062119f:
FRU-PN: 5014362; FRU-SN: 004419; FRU-LOC: /N0/SB4
Recommended-Action: Service action required

Jan 14 17:44:53 schostname Platform.POST: [ID 416500 local0.error]
/partition0/domain1/IB8/bbcGroup0/pci/schizo0: has invalid DFRUID status: 16
Jan 14 17:46:03 schostname Platform.POST: [ID 416500 local0.error]
/partition0/domain1/IB8/bbcGroup0/pci/schizo0: has invalid DFRUID status: 16
```

showplatform

プラットフォームの設定と情報およびドメインの状態を表示します。

適用範囲

プラットフォームシェル

構文

```
showplatform [-v] [-d domainID] [-p part]
```

```
showplatform [-p part]
```

```
showplatform -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-d *domainID* には、表示するドメイン (a、b、c、d) を指定します。

-p *part* を指定すると、特定の情報が表示されます。-d オプションを使用してドメインを指定する場合は、次のオプションを使用します。これらのオプションは、showdomain の -p *part* オプションと同じです。

指定できる値は、次のとおりです。

- `acls` を指定すると、ACL (アクセス制御リスト) が表示されます。
- `bootparams` を指定すると、起動パラメタの情報が表示されます。
- `cod` を指定すると、COD パラメタが表示されます。
- `loghosts` を指定すると、ドメインのログホストが表示されます。
- `mac` を指定すると、ドメインの MAC アドレスが表示されます。
- `snmp` を指定すると、ドメインの SNMP 構成が表示されます。
- `status` を指定すると、ドメイン状態が表示されます。

-p *part* を指定すると、特定の情報が表示されます。-d オプションを使用してドメインを指定しない場合は、-p *part* で次のオプションを使用します。

指定できる値は、次のとおりです。

- `acls` を指定すると、ACL (アクセス制御リスト) が表示されます。
- `cod` を指定すると、COD パラメタが表示されます。
- `frame` を指定すると、FrameManager の情報が表示されます。
- `hostid` を指定すると、ホスト ID および MAC アドレスの交換情報が表示されます。

注 – ホスト ID および MAC アドレスの交換情報は、`hostid` オプションを指定した場合にだけ表示されます。詳細は、このコマンドの「説明」の項を参照してください。

- `loghosts` を指定すると、プラットフォームのログホストが表示されます。
- `mac` を指定すると、ドメインおよびシステムコントローラの MAC アドレス、ホスト ID、およびプラットフォームのシリアル番号が表示されます。
- `network` を指定すると、システムコントローラへの遠隔アクセスの使用可能または使用不可、`Sun Fire Link` の使用可能または使用不可 (システムに `Sun Fire Link` ボードが取り付けられている場合にのみ表示される)、アイドル状態の接続のタイムアウト値などの、ネットワーク構成が表示されます。
- `partition` を指定すると、パーティションモードが表示されます。
- `sc` を指定すると、システムコントローラ構成が表示されます。
- `snmp` を指定すると、プラットフォームの SNMP 情報が表示されます。
- `sntp` を指定すると、SNTP サーバーが表示されます。
- `status` を指定すると、すべてのドメインの状態が表示されます。

`-v` を指定すると、冗長モードになります。

説明

このプラットフォームのすべての構成変数を表示します。次の変数があります。

- プラットフォームのネットワーク属性
- 各ドメインの ACL
- COD の構成
- ドメイン状態
- SNMP 状態
- SNTP サーバー
- フェイルオーバー状態
- 遠隔接続形式
- アイドル状態の接続のタイムアウト
- ログホスト
- パーティション構成
- 設定されずに使用されているその他の値 (MAC アドレス、ホスト ID、システムシリアル番号など)
- ホスト ID および MAC アドレスの交換情報は、`showplatform` コマンドを `-p hostid` オプションを指定して実行した場合にだけ表示されます。ドメイン間でホスト ID および MAC アドレスを交換した場合 (`setupplatform` コマンドを参照) は、そのドメインに交換後のホスト ID および MAC アドレスが表示されず、`HostID/MAC address mapping mode` には `manual` と表示されます。

ホスト ID および MAC アドレスを交換していない場合には、`HostID/MAC address mapping mode` に `automatic` と表示されるので、システムが自動的に割り当てたホスト ID および MAC アドレスが表示されていることがわかります。`HostID/MAC address swap` パラメタの詳細は、『`Sun Fire` ミッドレンジシステムプラットフォーム管理ガイド』を参照してください。

関連項目

setupplatform、showdate

例

コード例 3-85 Sun Fire 6800 システムの showplatform コマンドの出力例

```
schostname:SC> showplatform

Domain      Solaris Nodename   Domain Status   Keyswitch
-----      -
A           -                 Powered Off    off
B           -                 Powered Off    off
C           -                 Powered Off    off
D           -                 Powered Off    off

The system controller is configured to be on a network.
Network settings: DHCP
Hostname: schostname
IP Address: xxx.xxx.xxx.xxx
Netmask: xxx.xxx.xxx.x
Gateway: xxx.xxx.xxx.xxx
DNS Domain: domainname
Primary DNS Server: xxx.xxx.x.xxx
Secondary DNS Server: xxx.xxx.x.xxx
Connection type: ssh
Idle connection timeout: No timeout
Sun Fire Link Enabled: no
Loghost for Platform:
Log Facility for Platform:local0

SNTP server: ntp1

SNMP Agent: disabled
Chassis Description: Sun Fire 6800
Chassis Contact:
Chassis Location:

ACL for Domain A: SB0 SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 IB6 IB7 IB8 IB9
ACL for Domain B: SB0 SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 IB6 IB7 IB8 IB9
ACL for Domain C: SB0 SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 IB6 IB7 IB8 IB9
ACL for Domain D: SB0 SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 IB6 IB7 IB8 IB9

Chassis HostID: xxxxxxx
PROC RTUs installed: x
```

コード例 3-85 Sun Fire 6800 システムの showplatform コマンドの出力例 (続き)

```

PROC Headroom Quantity: x
PROC RTUs reserved for domain A: x
PROC RTUs reserved for domain B: x
PROC RTUs reserved for domain C: x
PROC RTUs reserved for domain D: x

SC POST diag Level: off
SC Failover is enabled
Logical Hostname: spl-sc

Chassis is in dual partition mode.

Frame information is not available.

schostname:SC>

```

コード例 3-86 に、showplatform -v コマンドの出力を示します。

コード例 3-86 Sun Fire 6800 システムの showplatform -v コマンドの出力例

```

schostname:SC> showplatform -v

Domain      Solaris Nodename    Domain Status    Keyswitch
-----
A           -                   Powered Off     off
B           -                   Powered Off     off
C           -                   Powered Off     off
D           -                   Powered Off     off

Network
-----
The system controller is configured to be on a network.
Network settings: DHCP
Hostname: schostname
IP Address: xxx.xxx.xxx.xx
Netmask: xxx.xxx.xxx.x
Gateway: xxx.xxx.xxx.xxx
DNS Domain: domainname
Primary DNS Server: xxx.xxx.x.xxx
Secondary DNS Server: xxx.xxx.x.xxx
Connection type: ssh
Idle connection timeout : No timeout

                MAC Address                HostID
                -----
Domain A       xxxxxxxxxxxxxxxxxxxx  xxxxxxxx
Domain B       xxxxxxxxxxxxxxxxxxxx  xxxxxxxx

```


コード例 3-86 Sun Fire 6800 システムの showplatform -v コマンドの出力例
(続き)

```
Domain C      xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx  xxxxxxxxx
Domain D      xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx  xxxxxxxxx
SSC0          xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx  xxxxxxxxx
SSC1          xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx  xxxxxxxxx

System Serial Number: xxxxxxxx
Chassis HostID: xxxxxxxx

Loghosts
-----
Loghost for Platform:
Log Facility for Platform: local0

SNMP
----
SNMP Agent: enabled
Chassis Description: Sun Fire 6800
Chassis Contact:
Chassis Location:
Trap Hosts:
Public Community String: P-public
Private Community String: P-private

SNMP packets received: x
SNMP packets sent: xxx

ACLs
----
ACL for Domain A: SB0 SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 IB6 IB7 IB8 IB9
ACL for Domain B: SB0 SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 IB6 IB7 IB8 IB9
ACL for Domain C: SB0 SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 IB6 IB7 IB8 IB9
ACL for Domain D: SB0 SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 IB6 IB7 IB8 IB9

COD
---
Chassis HostID: xxxxxxxx
PROC RTUs installed: x
PROC Headroom Quantity: x
PROC RTUs reserved for domain A: x
PROC RTUs reserved for domain B: x
PROC RTUs reserved for domain C: x
PROC RTUs reserved for domain D: x

SNTP
-----
SNTP server: ntp1
```

コード例 3-86 Sun Fire 6800 システムの showplatform -v コマンドの出力例
(続き)

```
SC
--
SC POST diag Level: off
SC Failover is enabled
Logical Hostname: spl-sc

Partition Mode
-----
Chassis is in dual partition mode.

Frame information is not available.

schostname:SC>
```

コード例 3-85 およびコード例 3-86 のヘッダー Domain Status には、次のいずれかの状態が表示されます。

- 電源切断 (Powered off)
- 待機 (Standby)
- POST 実行中 (Running POST)
- 動作中 (Active)
- OpenBoot PROM が動作中 (Active - OpenBoot PROM)
- 起動中 (Active - Booting)
- Solaris が動作中 (Active - Solaris)
- 停止中 (Active - Halted)
- リセット中 (Active - Reset)
- パニック中 (Active - Panicking)
- デバッグ中 (Active - Debugger)
- 応答なし (Not Responding)
- エラーによる一時停止 (Paused due to an error)

これらの状態については、7 ページの「ドメインの状態」を参照してください。

コード例 3-87 に、showplatform -p hostid コマンドの出力を示します。

コード例 3-87 ホスト ID および MAC アドレスの交換後の showplatform -p
hostid コマンドの出力例

```
schostname:SC> showplatform -p hostid

                MAC Address                HostID
                -----                -
Domain A        08:00:20:d8:88:99        80d88899
Domain B        08:00:20:d8:88:9c        80d8889c
```

コード例 3-87 ホスト ID および MAC アドレスの交換後の showplatform -p
hostid コマンドの出力例 (続き)

```
Domain C      08:00:20:d8:88:9b      80d8889b
Domain D      08:00:20:d8:88:9a      80d8889a
SSC0          08:00:20:d8:88:9d      80d8889d
SSC1          08:00:20:d8:88:9e      80d8889e

System Serial Number: xxxxxxxx
Chassis HostID: xxxxxxxx
HostID/MAC address mapping mode: manual

schostname:SC>
```

コード例 3-87 に、ホスト ID および MAC アドレスを元のドメインに復元したあとの showplatform -p hostid コマンドの出力を示します。

コード例 3-88 ホスト ID および MAC アドレスの復元後の showplatform -p
hostid コマンドの出力例

```
schostname:SC> showplatform -p hostid

                MAC Address          HostID
                -----
Domain A      08:00:20:d8:88:99      80d88899
Domain B      08:00:20:d8:88:9a      80d8889a
Domain C      08:00:20:d8:88:9b      80d8889b
Domain D      08:00:20:d8:88:9c      80d8889c
SSC0          08:00:20:d8:88:9d      80d8889d
SSC1          08:00:20:d8:88:9e      80d8889e

System Serial Number: xxxxxxxx
Chassis HostID: xxxxxxxx
HostID/MAC address mapping mode: automatic

schostname:SC>
```

showresetstate

リセットまたはレッドモードトラップ後の CPU の状態を表示します。

適用範囲

ドメインシェル

構文

```
showresetstate [-w | -s | -v] [-f url]
```

オプション / パラメタ

`-w` を指定すると、レジスタウィンドウの内容が表示されます。最初に表示されるウィンドウは、障害が発生した CPU のスタックトレースです。スタックトレースの一部でないウィンドウが、同じ順序で続きます。

`-s` を指定すると、二次保存領域の内容が表示されます。通常、このコマンドでは、最初に障害が発生した時点からのレジスタを保持している一次保存領域の内容が表示されます。CPU で 2 回以上の障害が発生した場合、二次保存領域には、最後に障害が発生した時点からの選択されたレジスタが保持されています。

`-v` を指定すると、すべての使用可能なレジスタの概要が表示されます。次のオプションで使用可能なレジスタが含まれます。

- `-s` および `-w` オプション
- デフォルト表示 (オプションなし)

`-f` には、URL を指定します (FTP プロトコルを使用する必要があります)。

`url` には、このコマンドの出力先ディレクトリの URL を指定します。出力は、次のような形式の名前の付いたファイルに格納されます。

```
hostname.resetstate.yymmddHHMMSS
```

サンの保守プロバイダは、この出力を参照して障害または問題を分析します。URL は、ファイルではなくディレクトリを指す必要があります。次に例を示します。

```
ftp://userid:password@hostname//path
```

```
ftp://hostname/path
```

FTP プロトコルの URL の指定方法の詳細は、8 ページの「FTP URL の使用」を参照してください。

説明

有効な状態を保存している、ドメインにあるすべての CPU の保存領域から、レジスタ内容の概要が出力されます。特定のオプションを指定すると、出力されるレポートの書式および内容を制御できます。出力された情報は、保守プロバイダが障害追跡に使用します。

オプションを指定しないでこのコマンドを実行すると、次のレジスタが表示されます。

- 障害が発生した時点のレジスタウィンドウ (グローバル、出力、ローカル、入力)
- CANSAVE、CANRESTORE、OTHERWIN、およびその他の選択された特権レジスタ
- AFAR および AFSR
- TICK および関連する CPU 固有のレジスタ

状態を保存しない CPU では出力が生成されないため、CPU がリセットされたとき、または CPU に障害が発生したときの出力はありません。障害の発生後、Solaris オペレーティング環境を再起動するか、または仮想キースイッチを off から on に設定すると、ドメインが OpenBoot PROM をふたたび開始するまで、保存された状態を使用できます。

関連項目

reset

showsc

システムコントローラおよびクロックフェイルオーバーの状態、バージョン、および稼働時間を表示します。

適用範囲

プラットフォームシェル

構文

```
showsc [-v]
```

```
showsc -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

-v を指定すると、冗長モードになります。

説明

ScApp のバージョンおよび SC の稼働時間を表示します。

例

コード例 3-89 で、RTOS はシステムコントローラのリアルタイムオペレーティングシステム、ScApp はシステムコントローラのアプリケーションを示します。また、この例では System Controller のあとに V2 と表示されていますが、これは拡張メモリーのあるシステムコントローラであることを示します。

コード例 3-89 showsc コマンド

```
schostname:SC> showsc

SC: SSC0
Main System Controller V2
SC Failover: disabled.
Clock failover enabled.
```

コード例 3-89 showsc コマンド (続き)

```
SC date: Sun Jan 25 17:39:59 PST 2004
SC uptime: 5 days 5 hours 46 minutes 20 seconds

ScApp version: 5.17.0
RTOS version: 38
```

ssh-keygen

Secure Shell (SSH) ホスト鍵の生成、または SSH ホスト鍵の指紋の表示を行います。

適用範囲

プラットフォームシェル

構文

```
ssh-keygen [-l] [-t <rsa|dsa>]
```

```
ssh-keygen [-r]
```

```
ssh-keygen [-h]
```

オプション / パラメタ

-l を指定すると、ホスト鍵の指紋が表示されます。デフォルトは、RSA です。

-t には、ホスト鍵の形式を指定します。デフォルトは、RSA です。

-r を指定すると、ホスト鍵が再生成されます。

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

説明

SSH ホスト鍵の生成、または SC のホスト鍵の指紋の表示を行います。

SC で SSH サーバーが使用可能になっている場合、SSH ホスト鍵が存在するかどうかはファームウェアによって確認されます。SSH ホスト鍵が存在しない場合は、ファームウェアによって 1 組の RSA 公開および非公開ホスト鍵が自動的に生成されます。SC の DSA ホスト鍵が必要な場合は、ssh-keygen に -t スイッチを指定して手動で実行する必要があります。

生成された新しいホスト鍵は、次のものを使用可能にすると、メモリーに読み込まれて有効になります。

- SSH サーバーが (ふたたび) 使用可能になる
- システムが再起動され、SSH サーバーが使用可能になる
- SSH サーバーが使用可能である間に restartssh コマンドを実行する

マシンを適切に管理するための望ましいセキュリティー対策は、定期的に新しいホスト鍵を生成することです。鍵が危険であると疑われる場合は、`ssh-keygen` コマンドを実行して、システムのホスト鍵を再生成できます。いったんホスト鍵を生成すると、これを交換することはできますが、削除することはできません。新しく生成されたホスト鍵を有効にするには、`restartssh` コマンドを実行するか、再起動のコマンドを実行して、SSH サーバーを再起動する必要があります。

ホスト鍵のサイズは大きい (1K バイト) ため、ホスト鍵全体を確認することは困難です。`ssh-keygen` を使用すると、ホスト鍵の指紋を表示できます。ホスト鍵の指紋とは、MD5 メッセージダイジェストアルゴリズムによって出力される 16 オクテットのシーケンスで、小文字の 16 進数をコロンで区切った形式で表示されます。詳細は、コード例 3-90 を参照してください。

ホスト鍵は SC に格納されるため、`dumpconfig` を使用してバックアップし、`restoreconfig` によって復元できます。デフォルトでは、`dumpconfig` コマンドによって、暗号化形式で鍵が保存されます。SC フェイルオーバーが発生すると、鍵は冗長 SC にコピーされます。つまり、メイン SC と冗長 SC は、同じ SSH 鍵のセットを共有します。

ホスト鍵は、`ssh-keygen` を実行することで、いつでも再生成できます。ホスト鍵がすでに存在する場合は、`-r` スイッチを指定する必要があります。

関連項目

`restartssh`

例

コード例 3-90 `ssh-keygen` コマンドの例

```
schostname:SC> ssh-keygen -l  
'd1:c1:30:22:5d:6c:11:09:de:38:40:9e:20:a5:b3:10'
```

testboard

CPU/メモリーボードをテストします。

適用範囲

プラットフォームシェル、ドメインシェル

構文

```
testboard board_name
```

```
testboard -h
```

オプション / パラメタ

-h を指定すると、このコマンドのヘルプが表示されます。

board_name は、CPU/メモリーボードの sb0 ~ sb5 です。

説明

コマンド行で指定した CPU/メモリーボードをテストします。テストするボードは、動作中のドメインで使用されておらず、電源が投入されている必要があります。ドメインから実行する場合は、ボードがドメインに割り当てられている必要があります。ドメインの実行に必要なリピータボードにも電源が投入されている必要があります。

testboard コマンドは、ドメインに設定されたレベルでテストを実行します。CPU/メモリーボードのテストでは、そのボードがドメインの一部になっていると精度が高くなります。POST によって CPU/メモリーボードをテストすると、もっとも正確な結果が得られます。しかし、それができない場合は、ドメイン内で CPU/メモリーボードをテストすると、次に正確なテストを実行できます。



注意 – 動作中のドメインに割り当てられている CPU/メモリーボードをテストする場合、そのドメインに問題が発生する可能性がわずかにあります。問題の発生を防ぐために、ドメインからボードの割り当てを解除し、プラットフォームシェルからボードをテストしてください。

関連項目

showcomponent、showboards

例

ドメイン A のシェルで CPU/メモリーボード sb0 をテストするには、次のように入力します (コード例 3-91)。

コード例 3-91 CPU/メモリーボード sb0 をテストする testboard の例

```
schostname:A> testboard sb0  
<コマンド出力は省略>
```


用語集

Capacity on Demand

(COD) 必要に応じて、処理リソース (CPU) を追加するためのオプション。追加する CPU は、ユーザーのシステムに取り付けられている COD CPU/メモリーボードに搭載される。COD 使用权 (RTU) ライセンスを購入すると、COD CPU にアクセスできるようになる。COD の詳細は、Sun Fire ミッドレンジシステムプラットフォーム管理マニュアルを参照。

CHS **Component Health Status** (コンポーネントの健全性状態) の略。コンポーネントは、自動診断 (AD) エンジンによって生成された診断情報を含む、健全性に関する情報を保持する。

DSA 米国標準技術局 (National Institute of Standards and Technology : NIST) によって公開されたデジタル署名アルゴリズム (Digital Signature Algorithm) 規格。米国政府のデジタル認証の標準規格。

POST **Power-On Self-Test** (電源投入時自己診断) の略。初期化されていないシステムハードウェアのコンポーネントを検索およびテストし、一貫性のある初期化済みのシステムに構成して、OpenBoot PROM に渡すプログラム。

RSA Rivest、Shamir、および Adleman (RSA) によって考案された、もっとも一般的な公開鍵暗号化方式。

SSH シェルへのセキュリティー保護されたアクセスを提供するクライアント/サーバープロトコル。

SRAM **Static Random Access Memory** の略。外部キャッシュモジュールに使用される高速メモリー装置の一種。

TOD 「仮想時刻 (TOD)」を参照。

永続ログ SC V2 (拡張メモリーシステムコントローラ) の NVRAM にある、SC が生成した特定のメッセージログおよびシステムエラーを保存するための記憶領域。

仮想時刻
(TOD : Time of Day)

システムコントローラボードには、TOD/NVRAM チップが搭載されている。システムコントローラは、各ドメインおよびシステムコントローラに TOD サービスを提供する。

仮想ドメイン

キースイッチ

システムコントローラは、ドメインごとに仮想キースイッチを提供する。setkeyswitch コマンドによって、各ドメインの仮想キースイッチの位置を制御できる。

環境監視

すべてのシステムには、温度、電圧、および電流を監視する多くのセンサーがある。システムコントローラは、適時に装置をポーリングし、有効な環境データを提供する。システムコントローラは、損傷を防ぐためにさまざまなコンポーネントを停止できる。

キースイッチ

「仮想ドメインキースイッチ」を参照。

システムコントローラ

システムコントローラは、システムコントローラボードとシステムコントローラソフトウェアで構成される。システムコントローラソフトウェアは、プラットフォームやドメインの資源を管理し、プラットフォームおよびドメインの監視と制御を行う。また、ドメインおよびプラットフォームの構成、ドメインコンソールへのアクセスの提供、Solaris オペレーティング環境への日付と時刻の提供、システムで使用されるリファレンスクロック信号の提供、コンソールセキュリティの提供、ドメインの初期化の実行、システムに取り付けられているボードのファームウェアの更新メカニズムの提供、SNMP を使用する外部管理インタフェースの提供も行う。

システムコントローラ ボード

CPU (中央演算処理装置) を搭載するボード。システムの動作を監視し、クロックおよびコンソールバスを提供する。Sun Fire ミッドレンジシステムは、2 つのシステムコントローラボードをサポートする。

自動診断

(AD : Auto-Diagnosis)

エンジン

ファームウェアの機能。プラットフォームおよびそのドメインの可用性に影響を与えるハードウェアエラーを検出および診断する。

ドメイン

オペレーティングシステムを起動し、ほかのドメインから独立して動作する 1 つ以上のシステムボードのセット。ドメインは、相互に依存せず、対話も行わない。

ドメインコンソール

Solaris オペレーティング環境または OpenBoot PROM が動作している場合は、ドメインコンソールにアクセスできる。ドメインコンソールでは、ok または login、#、% プロンプトが表示される。

ドメインシェル

ドメインシェルを使用すると、ドメインで実行する必要があるシステムコントローラのコマンドにアクセスできる。ドメインシェルは、最大で 4 つ (A ~ D) ある。ドメインシェルのプロンプトは、schostname:A> (または B>、C>、D>)。

パーティション

リピーターボードのグループ。セグメントとも呼ばれる。グループで使用され、同一のドメイン内で CPU/メモリーボードと I/O アセンブリ間の通信を提供する。

- フェイルオーバー** メインシステムコントローラまたはクロックソースの動作中に障害が発生した場合に、メインシステムコントローラからスペアシステムコントローラへ、またはそのシステムコントローラのクロックソースからほかのシステムコントローラのクロックソースへ処理を引き継ぐこと。
- プラットフォームシェル** プラットフォームシェルを使用すると、システム全体にアクセスできる。また、設定制御、環境状態、ドメインの再配置機能、電源グリッドの電源の投入および切断機能、システムコントローラのパスワードの変更機能、その他の汎用システムコントローラ機能が提供される。

索引

A

ACL (アクセス制御リスト)
構成, 93
表示, 121, 147
ボード, 17, 28
addboard コマンド, 17
addcodlicense コマンド, 19

B

break コマンド, 21

C

COD (Capacity On Demand)
RTU ライセンス, 19, 30, 109
リソースの使用, 111
CPU/メモリーボードのテスト, 160

D

deleteboard コマンド, 28
deletecodlicense コマンド, 30
disablecomponent コマンド, 32

E

enablecomponent コマンド, 38

F

flashupdate コマンド, 41
FRU (現場交換可能ユニット)、一覧表示, 138
FTP URL, 8, 35, 39, 60, 154

H

help コマンド, 44
history コマンド, 46

P

password コマンド, 47
poweroff コマンド, 49, 50
poweron コマンド, 52, 53

R

reset コマンド, 57
restartssh コマンド, 59
resume コマンド, 63
RTU (使用権) ライセンス, 19, 30, 109

S

- SC フェイルオーバー
 - 状態表示, 135
 - フェイルオーバーの状態の変更, 75
- setdate コマンド, 65, 67
- setescape コマンド, 73
- setfailover コマンド, 75
- setls コマンド, 83
- setupdomain コマンド, 91
- showboards コマンド, 104
- showcodlicense コマンド, 109
- showcodusage コマンド, 111
- showenvironment コマンド, 125, 126
- showerrorbuffer コマンド, 131
- showescape コマンド, 134
- showfailover コマンド, 135
- showfru コマンド, 138
- showlogs コマンド, 142
- showsc コマンド, 156
- SSH (Secure Shell) プロトコル
 - SSH サーバーの再起動, 59
 - ホスト鍵, 158
- ssh-keygen コマンド, 158
- Sun Fire Link, 95

T

- testboard コマンド, 160

え

- 永続ログ
 - システムエラー, 132
 - ログメッセージ, 143
- エスケープ文字
 - 設定, 73
 - 表示, 134

か

- 仮想キースイッチ, 81
- 稼働時間情報、バージョン情報、および表示, 156
- 環境状態
 - 表示, 125, 126

き

- キースイッチ
 - 設定, 81
 - 表示, 140

け

- 現在のログの設定、表示, 142

こ

- 更新、フラッシュ PROM, 41
- コマンド
 - 概要, 13
 - 履歴, 46
- コンソールポート
 - コマンド, 13
- コンポーネント位置の状態, 83
- コンポーネントの健全性状態 (CHS), 83, 116, 117

し

- シエルの終了
 - コマンド, 13
 - 終了, 63
- 時刻
 - 設定, 65, 67
- システムコントローラファームウェア
 - コマンドの概要, 13
- 状態
 - 環境, 125
 - ボード, 104

す

- 推奨されないコマンド
 - disablecomponent コマンド, 32
 - enablecomponent コマンド, 38

せ

- 設定、時刻, 65, 67

て

- テスト、CPU/メモリーボード, 160
- 電源グリッド
 - 電源の切断, 49, 50
 - 電源の投入, 52, 53
- 電源装置
 - 電源の切断, 49, 50
 - 電源の投入, 52, 53

と

- ドメイン
 - 状態表示, 7, 121
 - リセット, 57
- ドメインコンソール
 - アクセスの再開, 63
- ドメインのパラメタ
 - 設定, 91
 - 表示, 121

は

- バージョン情報、稼働時間情報、および表示, 156
- パスワード、設定, 47

ひ

- 表示, 142
 - 現在の環境状態, 125, 126
 - 現在のログの設定, 142
 - バージョン情報および稼働時間情報, 156

ふ

- フラッシュ PROM の更新, 41
- プラットフォームのパラメタ
 - 設定, 94
 - 表示, 147
- ブ레이크文字, 21

ほ

- ボード
 - 状態、動作中 (Active)、割り当て済み (Assigned)、使用可能 (Available), 6
 - 状態表示, 104
 - テスト, 160
 - テスト状態, 6
 - 電源の切断, 49, 50, 53
 - 電源の投入, 52
 - ドメインからの割り当て解除, 28
 - ドメインへの追加, 17
 - 割り当て情報と状態の表示, 104
- ホスト ID および MAC アドレスの交換, 98

り

- リセット
 - ドメイン, 57

ろ

- ログの設定、現在, 142

